

第5章 墳丘下の住居跡

1号住居跡

本跡は、長軸4.1、短軸3.3mの東西に長い隅丸方形の住居跡である。現地表下20cmまで耕作土で旧地表面は不明であるが、住居跡の壁はしっかり遺っていた。柱穴は4口でほぼ対角線上に位置し、そのうち3口に重複がみられる。炉は、ほぼ楕円形、北側寄りと東側寄りの2か所にあった。床は、堅い貼床で、床面には炭化物の小塊が散在していた。貼床下は、中央部を高く残し、床面の外縁部に壁溝が廻る。この他に住居跡南東隅に貯蔵穴と考えられる穴が床面で2か所確認できた。それぞれ東側からP₁、P₂とした、P₂は床面から深さが12~13cmと浅く、遺物はほとんどない。それに対し、P₁は床面から深さ30cmと深く、遺物は穴底面より台付甕の台部が倒立した状態で出土し、その中に小石が入っていた。

住居跡とは直接関係ないが、本跡によって切られた溝が北西方向に向かって延びている。遺物はほとんど出土せず、その性格は不明であるが、上端幅約80cm、下端幅約50cmの断面U字形である。本跡より古いことがセクション観察の結果判明している。この溝は本跡下でとぎれている。なお、北方向に延びる溝は本跡より新しい時期の攪乱である。

遺物 (第62図)

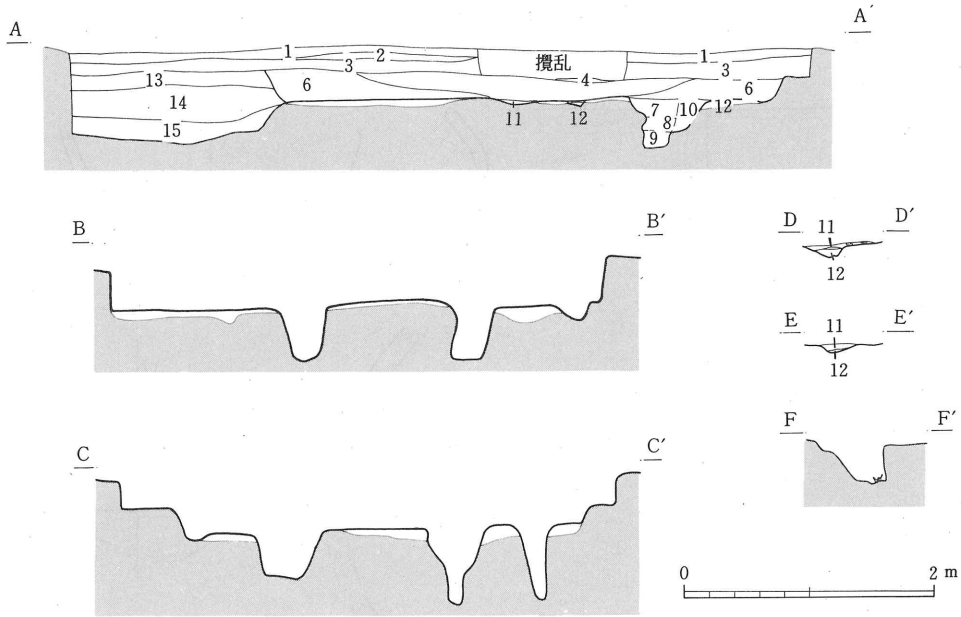
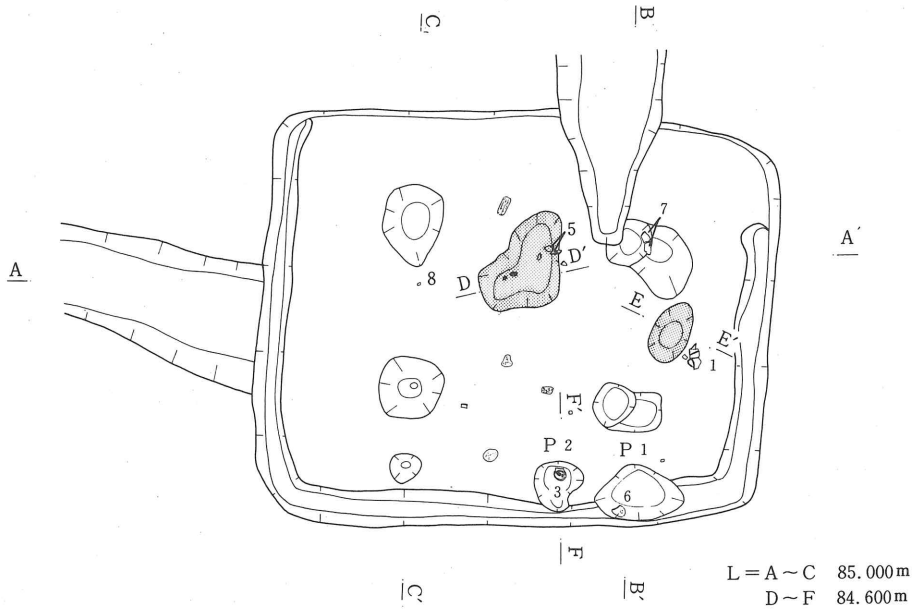
1号跡の遺物のうち土器類の完形品がないばかりか破片資料も少なかった。ここでは実測可能な土師器9破片(1~9)を図示する。器種は、甕、壺、器台で、出土状態は1・5は若干浮いた状態であるがほぼ床面直上、7は完全に床面直上であり、3はP₂内底面から出土した。

2号住居跡

本跡は、第2次調査の際、墳裾確認のために入れたサブトレンチ中より壁の立ち上がりを確認し、第3次調査の結果、竪穴式住居跡であると判明した。

本跡は、古墳築造の際に周湮によって切断されたため全貌は明らかでないが、ほぼ半分が遺存していた。長軸は推定5、短軸は推定4mの隅丸方形と推測できる。穴が6口確認できたが確実に柱穴に該当するものはない。この6口の穴のうち5口が南東隅にかたまっていることは、1号住居跡と同様の特徴といえる。また、それらの穴群周辺には多くの粘土塊が置かれ、穴埋積土中には土器片の他、焼土、炭化物が多量に含まれていた。また、P₁が今のところ位置的・形状的に柱穴の可能性が強い。炉は、1号住居跡と同じように2か所、ただし、中央より東側に2つ平行して並んでいた。床面も1号住居跡同様貼床で、壁溝が圍繞する。

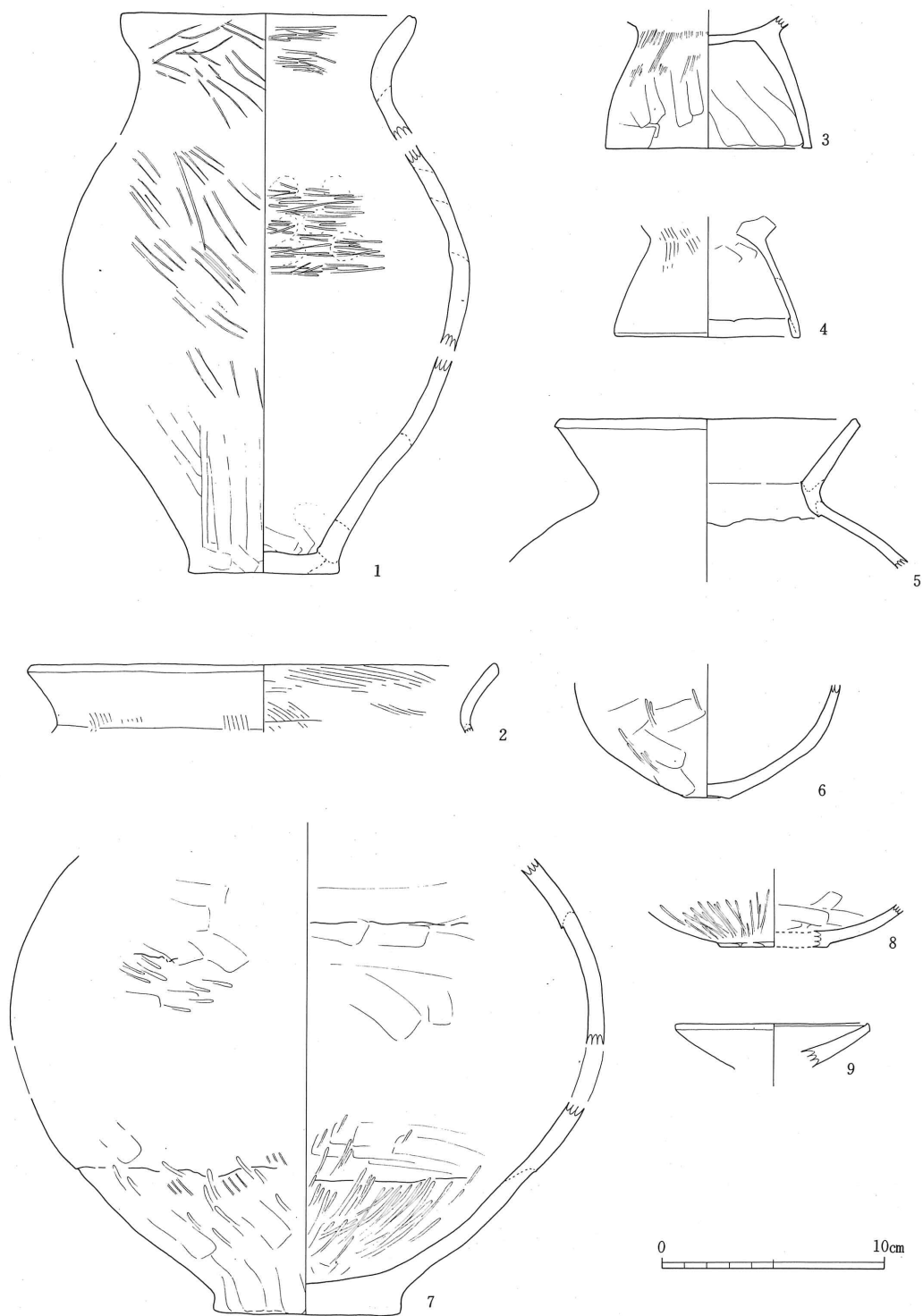
この住居跡が特に問題となるのは墳丘下に在ったということであり、本古墳築造の上限を決める重要な手掛かりとなる。断面図(第63図)をみると、第10層の黒色地山(標高85.1m)から住居の壁が掘り込まれ、ローム地山に達している。断面図には表現できなかったが、床面直上に薄い炭化物を混入する層があった。また、それを含む第8層は、やはり炭化物が若干混入する層で



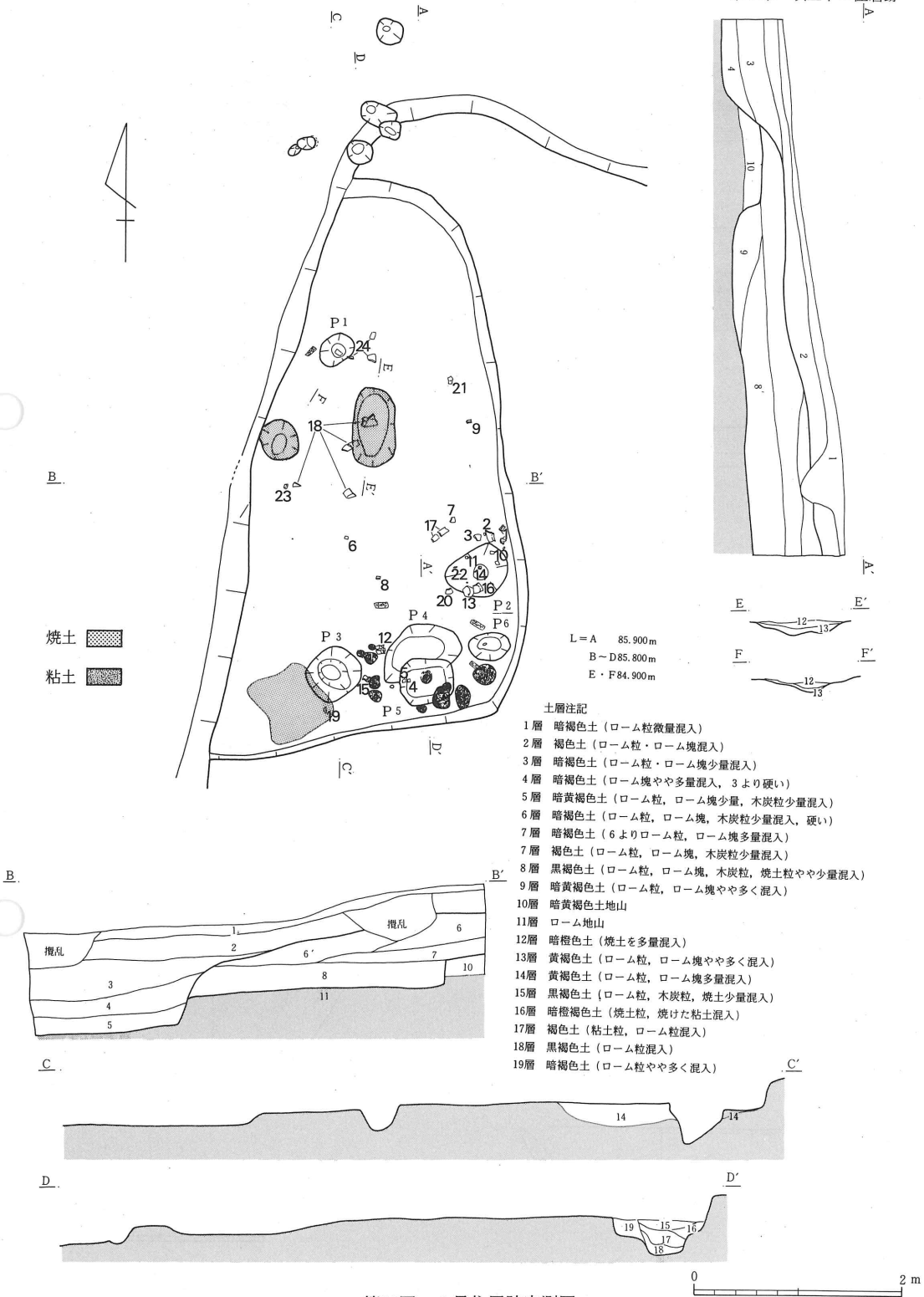
土層注記

- | | | | |
|---------|------------------------------|-----------|-------------------------|
| 1層 暗褐色土 | | 9層 黄褐色土 | (ローム粒, ローム塊多量混入) |
| 2層 黒褐色土 | (焼土粒, 木炭粒少量混入) | 10層 暗黄褐色土 | (ローム粒, ローム塊やや混入) |
| 3層 明褐色土 | (ローム粒, 木炭粒少量混入) | 11層 赤褐色土 | (焼土粒, 木炭粒多量混入) |
| 4層 黒褐色土 | (焼土粒, 木炭多量混入) | 12層 黄褐色土 | (ローム粒, ローム塊多量, 木炭少量混入) |
| 5層 暗褐色土 | (ローム粒, 焼土粒, 木炭粒多量, ローム塊少量混入) | 13層 暗褐色土 | (ローム粒多量, ローム塊少量, 木炭粒混入) |
| 6層 黒褐色土 | (ローム粒多量, ローム塊, 木炭粒少量混入) | 14層 明褐色土 | (ローム粒, ローム塊多量, 木炭粒少量混入) |
| 7層 黄褐色土 | (ローム粒, ローム塊多量, 木炭粒少量混入) | 15層 黄褐色土 | (ローム粒, ローム塊微量混入) |
| 8層 明褐色土 | (ローム粒, ローム塊やや多量混入) | | |

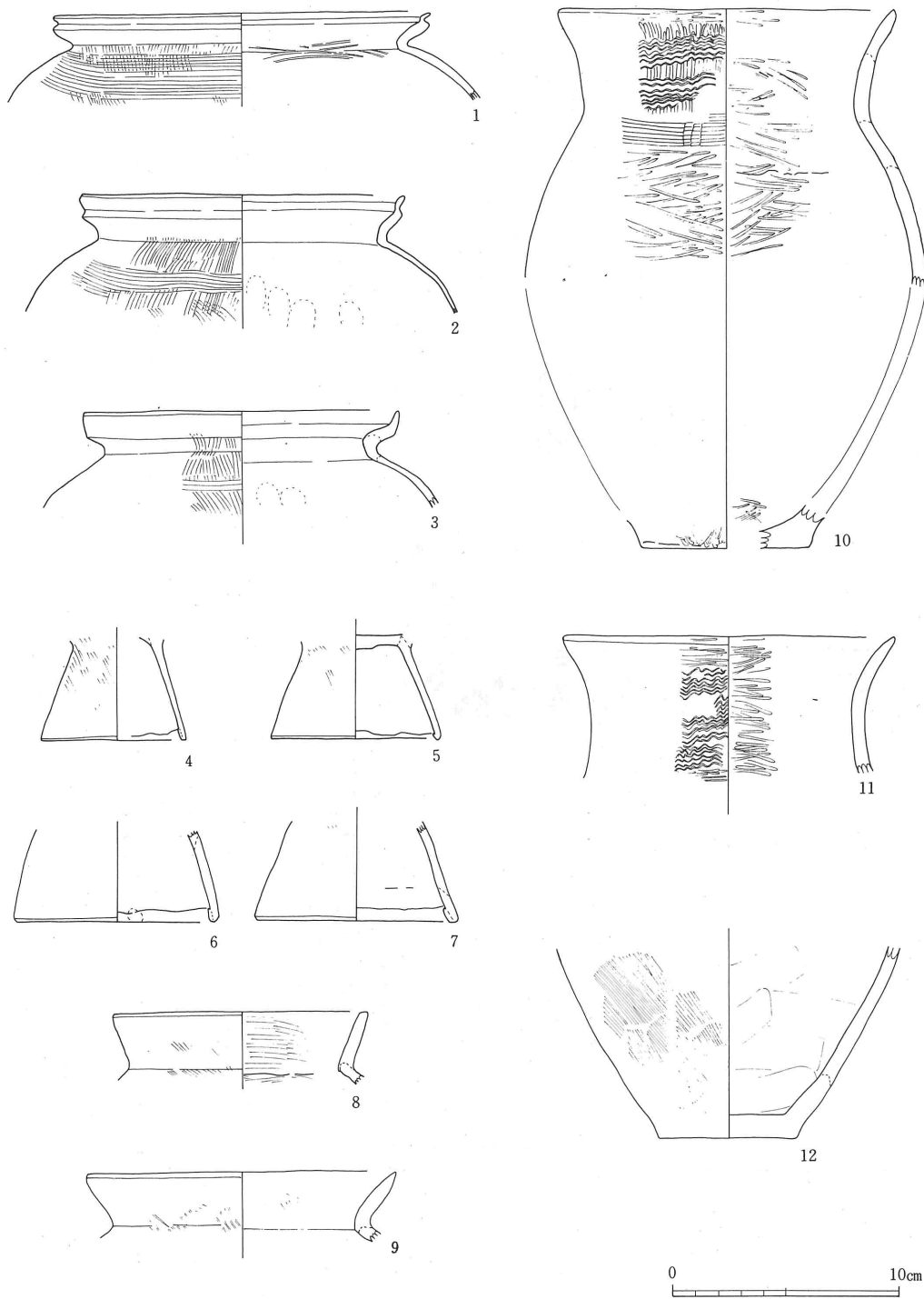
第61図 1号住居跡実測図



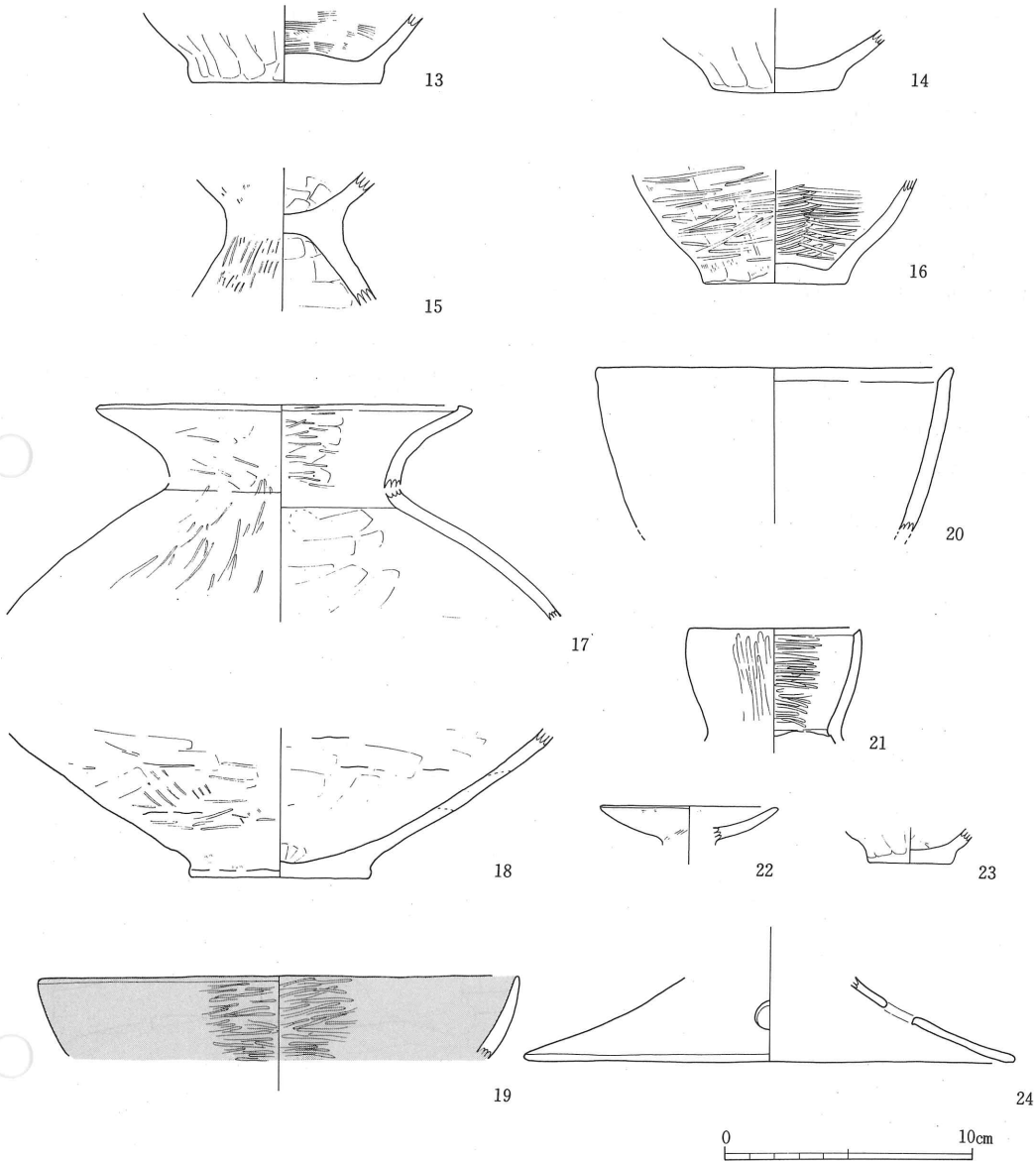
第62図 1号住居跡出土遺物実測図



第63図 2号住居跡実測図



第64図 2号住居跡出土遺物実測図(1)



第65図 2号住居跡出土遺物実測図(2)

ある。墳丘盛土にはもちろんローム粒・ローム塊が含まれる，後方部の混入具合と比べるとさほど多くない。

遺物(第64・65図)

1号住居跡に比べてかなり多くの土師器片が出土しているが完形品は1個体もない。本跡の約半分が古墳築造の際に壊されている可能性が強く，墳丘盛土の中にも本跡に関連する土師器片が多く含まれている。土器片の出土状態は，主に3か所に集中している。P₂を中心とするもの，

P₃を中心とするもの、南壁の焼土付近、の3か所である。盛土内の土器片を除けば、そのほとんどが床面直上である。

3号住居跡

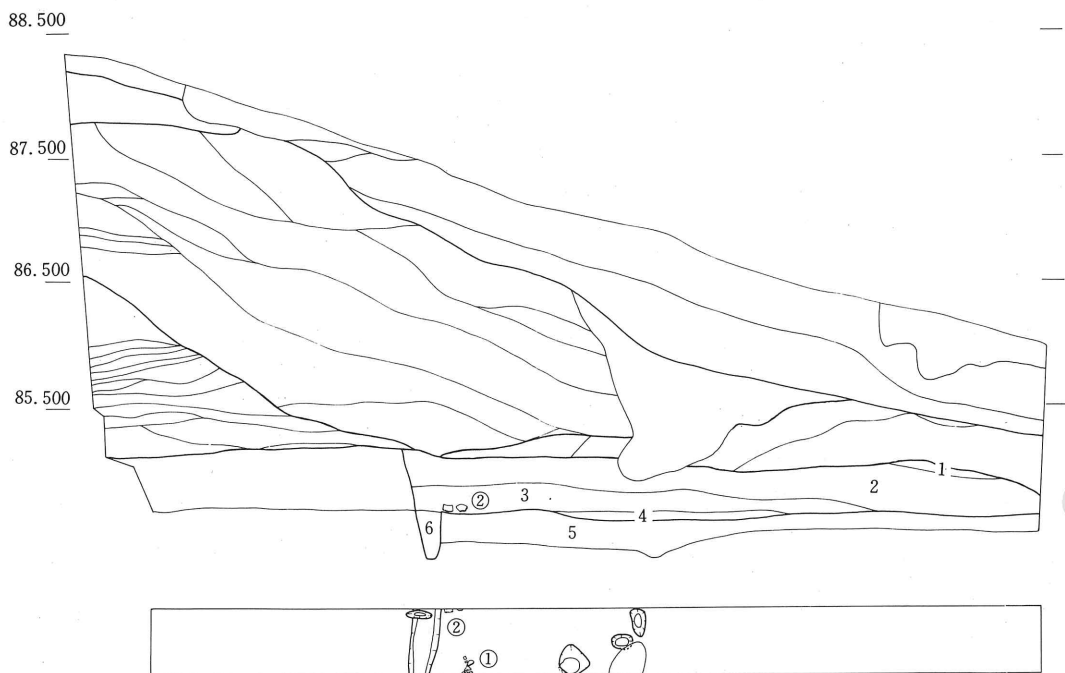
G-2 墳丘面確認のための断ち割り調査の際確認されたもので、住居跡内からはS字状口辺甕の口辺部破片が1片出土している。幅50cmのサブトレンチであるため全体はわからない。

4号住居跡

G-2 墳丘面確認のための断ち割り調査の際確認されたものである。(第66図) 幅50cmのトレンチであるため全体はわからないが、壁際に浅い溝があり、その他に穴がいくつか確認できた。断面図では一部分にしか見られないが、住居跡の床全面に焼土が遺っていた。住居内の埋積土状態から自然堆積と考えられる。

遺物 (第67図)

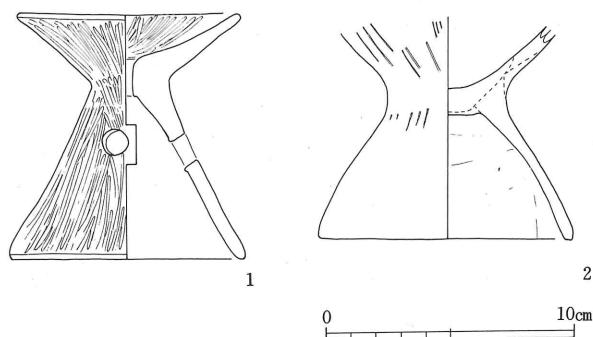
床面上から台付甕の台部と器台が出土している。



- 1 黒褐色土器 (ローム粘少量, 炭化物多量, 白色砂粒多量混入)
- 2 暗褐色土層 (ローム粒やや多く炭化物やや多い, 白色砂粒多量混入)
- 3 暗褐色土層 (ローム粒少量, 炭化物やや多く混入)
- 4 赤褐色土層 (焼土) 炭化物多量混入)
- 5 黄褐色土層 (ローム塊多量, 焼土少量混入)
- 6 黒褐色土層

0 2 m

第66図 4号住居跡実測図



第67図 4号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	仕上げの特徴	胎・焼・色	備考
1	甕	口：(13.2) 高：(25.0) 底：(6.8)	頸部はゆるく、くの字状に曲がり、胴部中位に最大径をもち、縦長に丸く膨れる	外面は口縁部でヨコナデのち右上から左下への櫛状工具(2本)と左下から右上への櫛状工具により交差する。頸～胴部上半にかけて斜めの櫛状工具による仕上げが施され、下半は縦のヘラ削り。紐つくり痕が残り指圧痕がみられ、その上を横のヘラ磨きを施す。底面ヘラ削り。	白色砂粒、輝石粒混入 良好 褐色	外面はほぼ全面に炭化物付着。 1/3現存
2	甕	口：(20.8)	頸部のくびれは緩く、口辺部は直立気味に外反する。	外面縦のハケ、内面斜めのハケ後ヨコナデ。	石英粒、輝石粒、白色砂粒混入 良好 暗褐色	頸部に炭化物付着
3	壺	底：8.2	胴部球形で底部は外に出張っている。	胴部外面ヘラ削り一部にハケの痕跡。内面横のヘラ削り後底部付近は放射状その他は縦、斜めのヘラ磨き。	白色砂粒、小石を含む 良好 暗褐色	底部内側中心が剝離。 1/3現存
4	甕	底：9.4	やや内湾して開く台脚部。縁部に面を持つ。	外面縦のハケ後ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英粒、長石粒混入 良好 褐色	P ₂ 底面出土。
5	甕	底：(8.4)	S字状口辺甕台部。縁部に折り返しがある。	外面縦のハケ後下半ナデ、内面ヘラ削り後ナデ。	石英粒、輝石粒、混入 普通 褐色	
6	壺	口：(13.8)	口辺部は直線的で口縁部に面を持つ。頸部で強く曲がり球形の胴部につながる。	口縁部は内外面ともヨコナデ。内面に接合痕が残る。	白色砂粒、小石を多く、赤色スコリア粒を若干含む 良好 淡黄褐色	胴部上半 1/3現存
7	小型壺	底：(2.1)	上げ底で胴部下半に張りを持つ。	内面ヘラ削り、外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	白色砂粒、赤色スコリア粒を若干含む 良好 淡黄褐色	床面直上出土。黒斑が部分的にみられる。 1/3現存
8	小型壺	底：(5.0)	胴部下半に最大径を持つ。	内面ヘラナデ、外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	白色砂粒、赤色スコリア粒を若干含む 普通 暗褐色	黒斑が部分的にみられる
9	器台	口：(8.8)	器台受皿部は内湾気味に開く。	内外面ヘラ磨き。	白色砂粒、赤色スコリア粒を若干含む 普通 暗褐色	黒斑が部分的にみられる

第8表 1号住居跡出土土器観察表

第2編 大日塚古墳

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	仕上げの特徴	胎・焼・色	備考
1	甗	口：(16.5)	口辺部はS字状。	頸部内面に斜めのハケ、外面斜めのハケ後肩部にヨコハケが施されている。	石英粒、長石粒、赤色スコリア粒混入 不良 暗褐色	床面直上
2	甗	口：(14.2)	口辺部はS字状。	外面斜めのハケ後肩部にヨコハケ、口辺部内外面ともヨコナデ。	輝石粒、白色砂粒混入 良好 淡褐色	床面直上
3	甗	口：(14.0)	口辺部は頸部から外反し直立する受口状。	外面斜めのハケ後肩部にヨコハケ、口辺部内外面ともヨコナデ。	石英粒、長石粒混入 良好 赤褐色	一部に炭化物付着 床面直上
4	甗	底：(6.3)	S字状口辺部の台部で直線的に開き端部内面に折り返し。	外面縦位のハケ後ナデ、内面ナデ。	砂粒を多く混入 良好 暗褐色	台部現存1/4
5	甗	底：(7.6)	S字状口辺部の台部で直線的に開き端部内面に折り返し。	外面縦位のハケ後ナデ、内面ナデ。	砂粒、植物繊維を混入 不良 淡橙褐色	P ₅ 内出土。 生焼け状態 台部3/4
6	甗	底：(9.0)	S字状口辺部の台部で直線的に開き端部内面に折り返し。	外面縦位のハケ後ナデ、内面ナデ、一部に指オサエ。	砂粒、小石を含む 良好 淡褐色	台部1/2現存
7	甗	底：(9.0)	S字状口辺部の台部で直線的に開き端部内面に折り返し。	外面縦位のハケ後ナデ、内面ナデ。	白色砂粒、赤色スコリア粒を若干含む 良好 淡黄褐色	床面直上。黒斑が部分的にみられる。 1/3現存
8	甗	口：(11.2)	口辺部は直立し、口縁部に面を持つ。	内外面ハケ後口縁部ヨコナデ。	チャート粒輝石粒、白色砂粒、石英粒を含む 普通 褐色	黒斑が部分的にみられる。
9	甗	口：(13.6)	口辺部は直立気味に外反し、口辺部は尖る。	内外面ハケ後口辺部ヨコナデ。	チャート粒砂粒、石英粒を含む 普通 赤褐色	床面直上
10	甗	口：(12.0) 高： 底：	口辺部はゆるやかに外反し、頸部は、弓状。胴部の張りは少ない。	外面、口辺部ヨコナデ後櫛描波状文を3段に施文、頸部に簾状文(3連止め)を廻らす。内面横のヘラ磨き。紐作り痕を残す。	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む 良好 赤褐色	床面直上
11	甗	口：(13.6)	口辺部はゆるやかに外反し、頸部は弓状。	外面、口縁部ヨコナデ後櫛描波状文を4段に施文、頸部に簾状文を廻らす。内面横のヘラ磨き。	白色砂粒、赤色スコリア粒を含む 良好 赤褐色	床面直上
12	甗	底：(6.2)	底部から直線的に胴部に至る。	外面、縦のハケ、内面ヘラナデ。	砂粒を含む 良好 褐色	床面直上
13	甗	底：7.8	平底で、胴部はあまり開かずに立ち上がる。底部外側が出張る。	外面ヘラナデ、内面横のハケ。底部の一部に木葉痕がある。	砂粒を少量含む 良好 褐色	床面直上。底～胴部下半現存1/5
14	甗	底：(5.2)	平底。胴部は脹らみを持って立ち上がる。	外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	石英粒を多く含む 良好 褐色	
15	甗		甗の台部。台部はハの字状。	外面ハケ後胴部下半の一部にナデ、内面ヘラナデ。	砂粒を含む 普通 褐色	内面に炭化物付着
16	壺	底：5.9	平底。内湾気味に胴部に続く。	外面ヘラ削り後ハケ後横のヘラ磨き、内面横のヘラ磨き。	輝石粒、長石粒を含む 良好 赤褐色	内外面とも赤彩

第9表 2号住居跡出土土器観察表(1)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	仕上げの特徴	胎・焼・色	備考
17	壺	口：(15.2)	口辺部は大きく外反し、端部がつまみ出される。	外面ヘラ削り後入念なヘラ磨き、内面ヘラ削り、ヘラナデ後口辺部のみヘラ磨き。	チャート粒輝石粒、石英粒を含む。 良好 黄褐色	
18	壺	底：(7.4)	平底。底部から直線的に大きく開きながら胴部に至る。	外面ハケ後ヘラ削り後粗いヘラ磨き、内面ヘラ削り。紐作り痕を残す。	小石、輝石粒、長石粒を含む 良好 黄褐色	床面直上。底～胴部下半現存1/2
19	壺	口：(20.4)	口辺部は内湾気味に開く。	内外面とも入念な横位のヘラ磨き。	よく精選されている 良好 赤褐色	内外面とも赤彩
20	壺	口：(14.4)	口辺部は内湾気味に直立し、口辺部内側に面を持つ。	外面縦の入念なヘラ磨き、内面横の入念なヘラ磨き。	石英粒、黒雲母粒、長石粒を含む 良好 乳白色	床面直上
21	小型壺	口：(7.0)	口辺部は内湾気味に直立し、口辺部内側に面を持つ。頸部内面に稜を持つ。	外面縦のヘラ磨き、内面横のヘラ磨き。	石英粒、黒雲母粒、長石粒を含む 良好 淡褐色	内面に炭化物付着口辺部現存3/4
22	小型器台	口：(7.2)	内湾気味に開く。	内外面ハケ後、外面横のヘラ磨き、内面縦のヘラ磨き。	石英粒、砂粒、輝石粒を含む 良好 褐色	受部現存1/3
23	小型壺	底：3.4	平底	内外面ヘラ削り。	長石粒を含む 良好 暗褐色	炭化物付着
24	高坏	底：(20.1)	裾部は大きく開く。裾上位に径1.2cmの孔が外側から穿たれている。	器面が荒れているが内外面ともヘラ磨き。	黒雲母粒、砂粒を含む 良好 乳白色	床面直上で出土。裾部現存1/3

第10表 2号住居跡出土土器観察表(2)

番号	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	仕上げの特徴	胎・焼・色	備考
1	器台	口：9.1 高：9.8 底：9.6	受皿部は直線的に開き中央に径0.7cmの孔を穿つ。脚部も直線的に広がり、径1.1cmの孔を3つ穿つ。	外面及び受部内面縦のヘラ磨き、脚部内面ナデ。	砂粒を含む 良好 褐色	外面の一部に炭化物付着
2	甕	底：10.3	単口辺台付甕の台部で、ハの字状。	外面ハケ後台部下半ヘラナデ、内面ヘラナデ。	石英粒、輝石粒を含む 良好 灰褐色	胴部下半に炭化物付着

第11表 4号住居跡出土土器観察表

第6章 その他の遺跡と遺物

1 穴跡 (第68図)

1号

第1次調査で設定したT-2の中部、古墳の後方部南西隅近くの南辺から南に約1.4m離れた地点で、周湟底を確認した段階で発見した。長軸を南北にとり、鍋底状の楕円形穴跡で、長径110、短径65cm、周湟底からの深さ30cm。埋積土は黒褐色土を主体とする。埋積土内から若干の土師器小破片が出土。

2号

第1次調査で設定したT-7の北端近く、古墳の後方部北辺から約7m離れた地点で発見。一部を発掘したものの、残りは調査区外であったので、全容を明らかにするまでには至らなかった。確認された部分をみる限りでは、隅丸方形乃至は隅丸長方形の穴跡とみられる。西辺80、南辺は確認された部分だけで50、深さ70cmで、底は鹿沼軽石層にまで達している。埋積土にはローム粒が比較的多量に含まれている。トレンチの断面図を観察した限りでは、古墳築造後、ローム整地面にある程度の土砂が堆積した段階で掘り込まれたものとみられる。埋積土内から若干の土師器小破片が出土。

3号

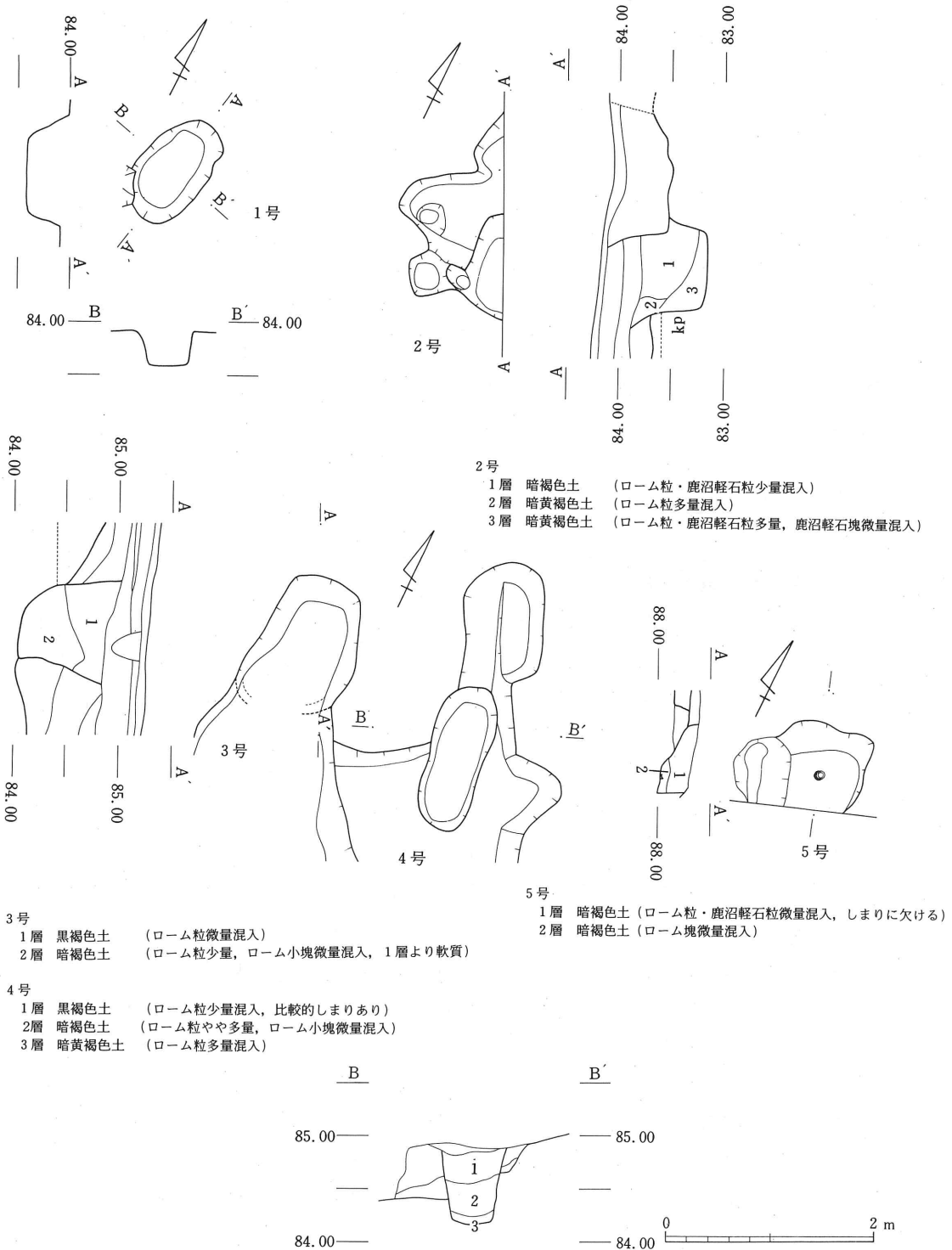
第1次調査で設定したT-11及び第2次調査でそれを拡張したG-2で発見され、古墳のくびれ部南側近くの前方部に掘り込まれた穴跡。南北長軸の不整楕円形で、長径130内外、短径95、深さ96cm。埋積土にはローム粒が少量含まれ、やや軟質である。トレンチ断面図を観察した限りでは、古墳の周湟にかなりの土砂が堆積した段階で掘り込まれたものとみられる。

4号

第1次調査で設定したT-2の拡張トレンチ及び第2次調査でそれを拡張したG-2で発見され、古墳のくびれ部南側に掘り込まれた穴跡。南北長軸の楕円形で、長径140、短径60、深さは確認できただけで70cm。埋積土にはローム粒がやや多量に含まれ、比較的締まりがあり、自然埋積土に近いものとみられる。トレンチ断面図を観察した限りでは、古墳の周湟にある程度の土砂が堆積した段階で掘り込まれたものとみられる。埋積土内から若干の土師器小破片が出土している。

5号

第2次調査で設定したG-1の南端近くで発見、古墳の後方部墳頂部南側に掘り込まれた穴跡。一部を発掘したものの、残りは調査区外であったので、全容を明らかにするまでには至らなかった。確認された部分をみる限りでは平面不整形、東西125、南北は確認された部分で85cm。埋積



第68図 大日塚古墳周辺穴跡平面図・断面図

土にはローム粒、鹿沼軽石粒が微量含まれ、人為的な埋積土とみられる。グリッド断面図を観察した限りでは、古墳築造後、墳丘上にある程度の土砂が堆積した段階で掘り込まれたものとみられる。埋積土内からは完形の土師質土器2枚が上下に重なって出土。

2 溝 跡

1号住居跡と切り合い関係のある溝跡が2条確認されている(第61図参照)。但し、2条とも住居跡とは直接関係ない。

1条は住居跡から北西方向に向かって延びている。本溝は住居跡によって切られており、住居跡下で浅くなり途切れる。上端幅80cm、下端幅50cmを測り、断面U字形である。もう1条は住居跡部分から北方向に延びる溝で住居跡より新しい時期のものである。両方ともほとんど遺物を伴わないため性格は不明である。

3 その他の遺物

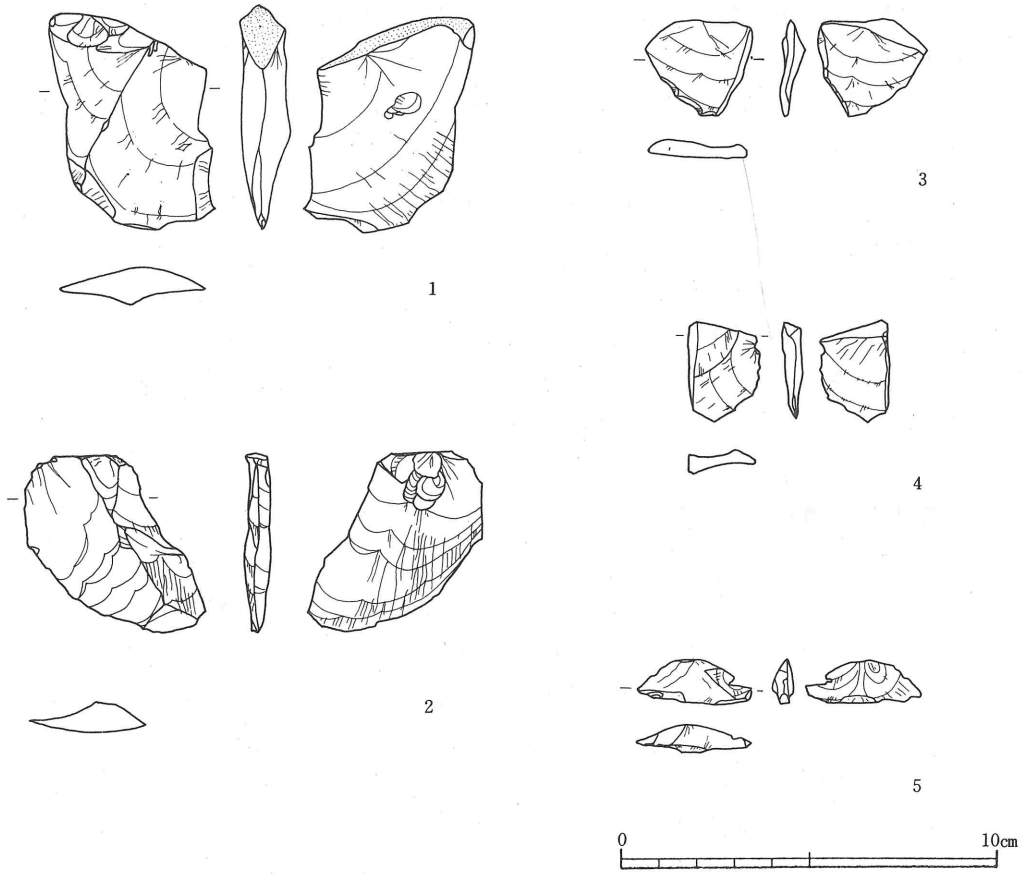
(1) 旧石器時代の遺物(第69図)

旧石器時代の遺物が出土している地点は、本古墳北側に設けたT-8及びT-12である。T-8からは3が、T-12からは1, 2, 4, 5が出土している。それらの出土状態は、2, 3がローム整地面に食い込むよう出土し、1, 4, 5は覆土から出土している。調査が古墳の発掘を目的としており、しかも時間的余裕もなかったため、精査することもできず、2, 3の資料についても明確な出土層位は把握できなかった。ただ鹿沼軽石層上面が把握できているので、そこから推定してみると、宝木ローム層上層の暗色帯から出土しているものと思われるが断定はできない。

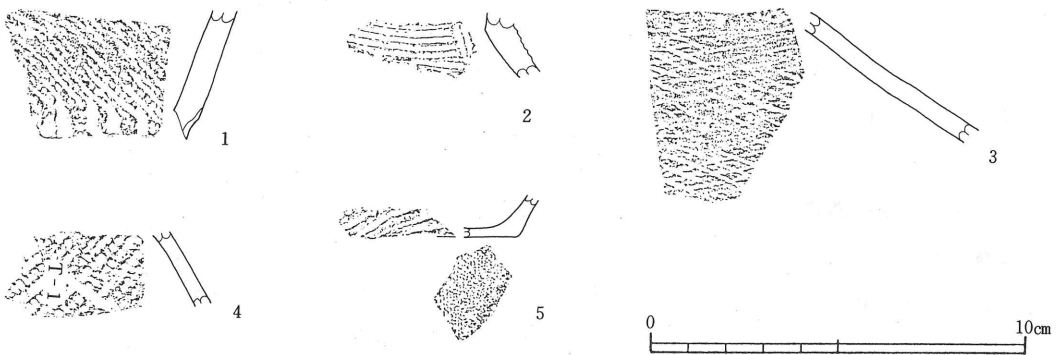
遺物は全て剥片であり、若干のロームが付着している。石質は全てホルンフェルスであり、青灰色を呈している。1は長さ57, 最大幅41, 最大厚13mm。上部に自然面を残しており、調整された石核から取られたものではないことがわかる。2は長さ50, 最大幅33, 最大厚7.5mm。バルブが認められ、また衝撃点からフィッシャーがよく発達している。基部には貝殻状のバルブスカーもはっきりと認められる。1, 2には典型的に頭部調整が認められる。3は長さ27, 最大幅26, 最大厚4mmを測り、一部に細かい剥離も認められる。4は長さ26mm, 最大幅18, 最大厚5mm。5は長さ30, 最大幅12, 最大厚7mm。

(2) 弥生時代の遺物(第70図)

1) 広口壺形土器の口辺部破片。口縁部は欠失している。附加条第一種(軸縄RL, 附加条L)の縄文が横位に施文された後、下端の頸部境に同一の縄文原体による押捺文が施されている。器厚は7mm。



第69図 大日塚古墳周辺出土石器実測図



第70図 大日塚古墳周辺出土弥生土器拓影図

2) 壺形土器の頸部破片。櫛歯状原体による横位の平行沈線が施された後、同一原体により縦位の短沈線で区画されている。器厚は6～7mm。

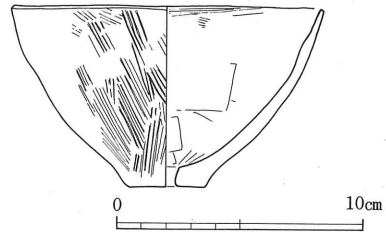
3) 壺形土器の胴部上半の破片。外面には附加条第三種の縄文が横位に施文され、内面にはヘラナデが施されている。器厚は4～5mm。

4) 広口壺形土器の胴部破片。附加条第一種(軸縄 LR, 附加条 R)の縄文が横位に施文されている。器厚は4mm。

5) 広口壺形土器の底部破片。胴部は約60°強の角度をもって直線的に広がりながら立ち上がっていき、外面には附加条第一種(軸縄 LR, 附加条 R)の縄文が横位に施文されている。底には非常に細かい平織の布の圧痕が認められる。器厚は胴部で3～4、底部で2～3mmと非常に薄手である。

(3) 古墳時代の遺物 (第71図)

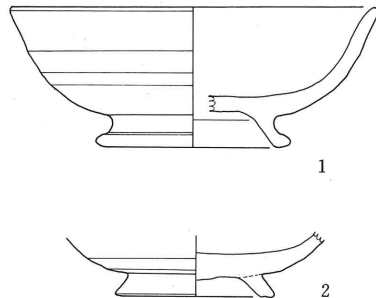
古墳のくびれ部南側周湟の外側平坦部より出土した。この付近はブルドーザーによる攪乱が著しく、明確な遺構は確認されていないが、墳丘下の住居跡同様、住居跡のあった可能性がある。器種は単孔式甑で、復元口径12.4、底径3.2、黄高7.2cm。底には径8mmの穿孔がなされ内湾気味に開き口辺部に至る。外面タテハケ、内面ヘラナデが施され、焼成良好、内外面とも褐色。



第71図 大日塚古墳周辺出土土器実測図

(4) 平安時代の遺物 (第72図)

1, 2とも古墳のくびれ部南側周湟内からの出土である。1は、土師器高台坏で、口径14.8、底径7.8cm、器高5.6cmを測る。内面横位のヘラ磨きで内面黒色処理。2も、同じく土師器高台坏で、底径6.4cm。1と同様の仕上げがなされるが、高台下面が凹んでいる。



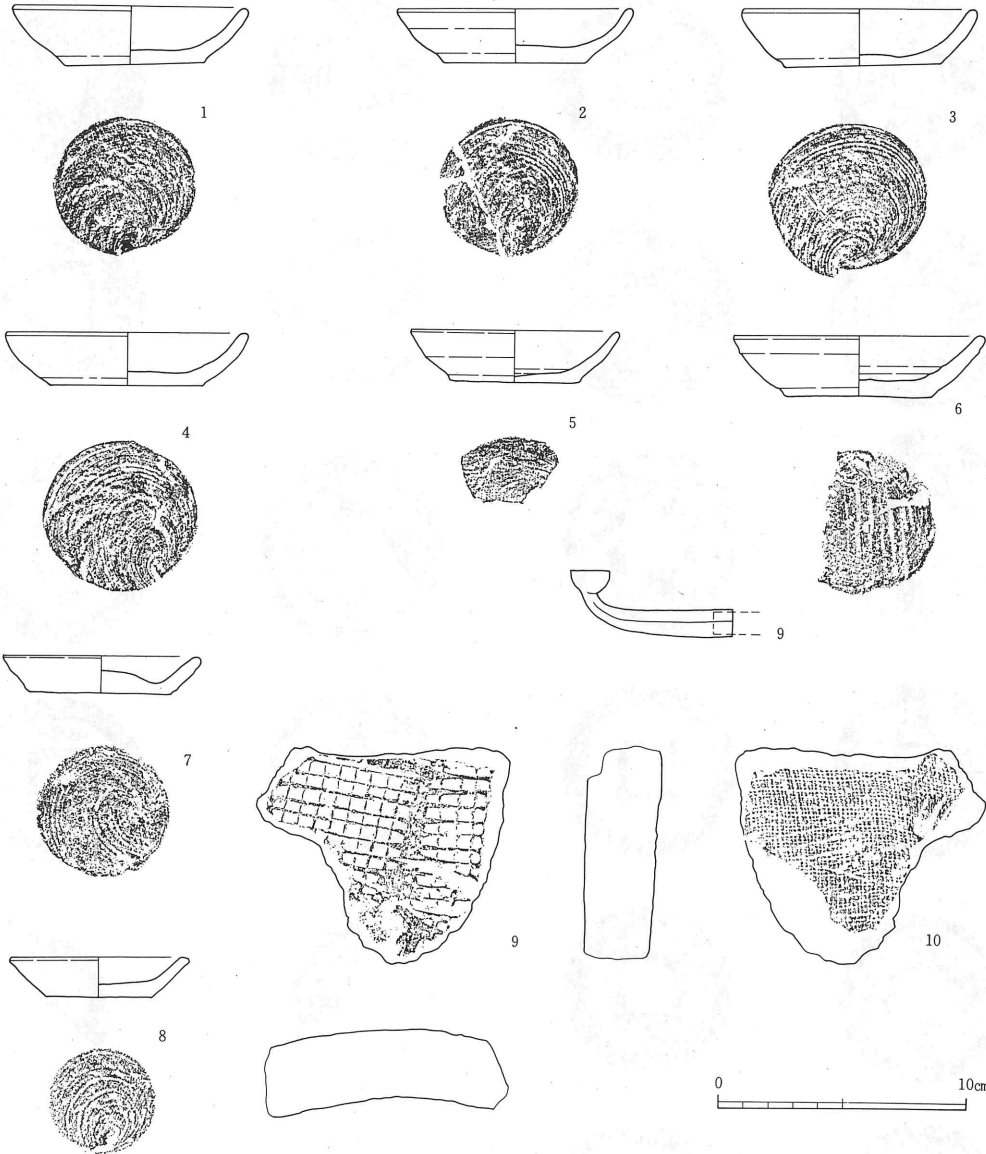
第72図 大日塚古墳周辺出土
平安時代遺物実測図

(5) 中・近世の遺物

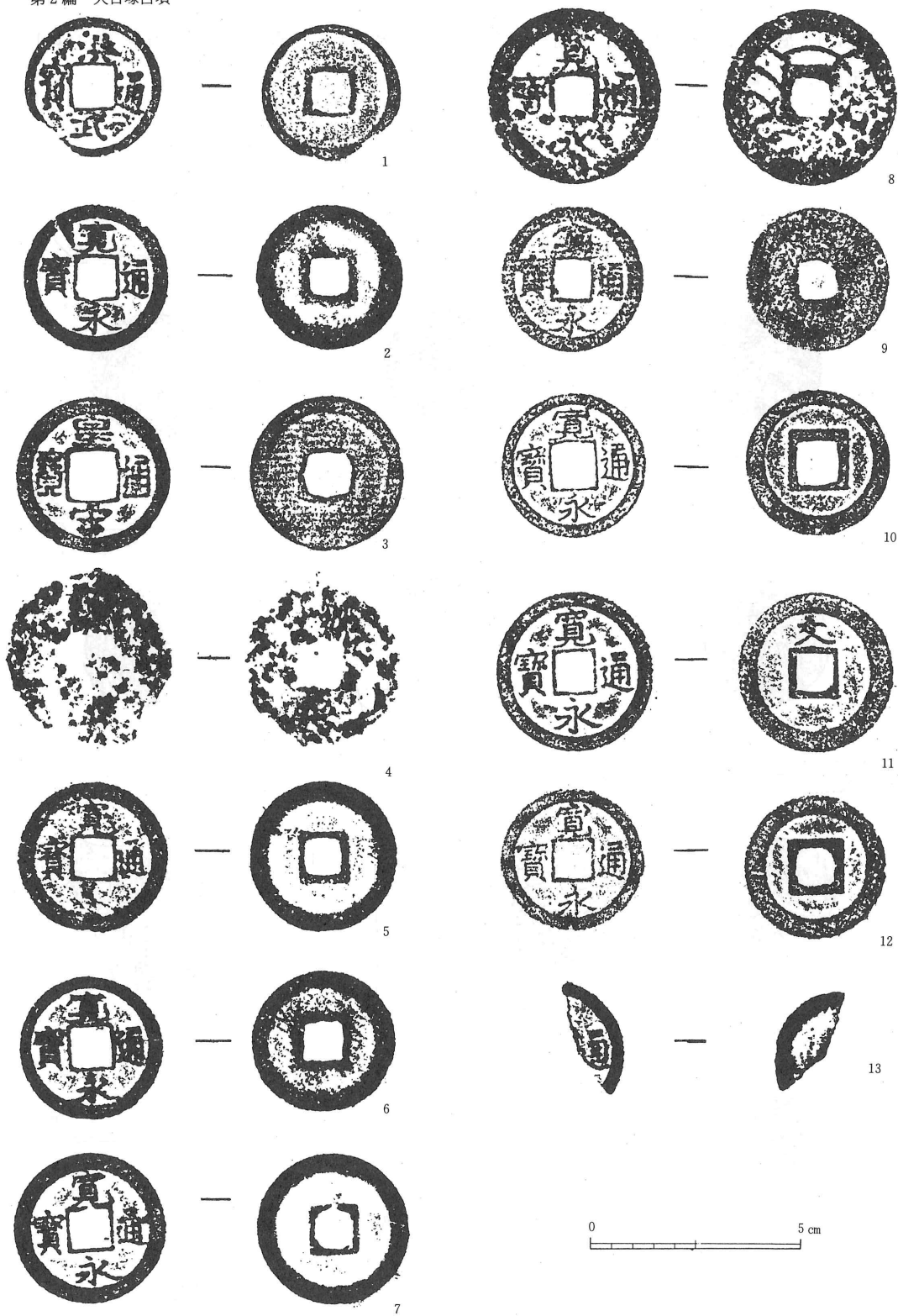
土器類 (第73図)

1～8は土師質土器である。出土位置は後方部墳頂(1～6)及び前方部北西隅(7, 8)の2カ所である。1, 2, 5～8は表土層中からの出土であるが、3と4は墳頂部穴から2枚が重なった状態で出土した。1は、口径9.4、底径5.5、器高2.3cm、2は、口径9.4、底径5.6、器高2.2cm、3は、口径9.5、底径6.3、器高2.3cm、4は口径9.7、底径6.0、器高2.1cm、5は口径8.3、底径5.1、器高2.1cm、6は口径10.2、底径5.9、器高2.4cm、7は、口径7.8、底径5.7、器高1.5cm、8は、

口径7.1, 底径4.2, 器高1.6cm, を測る。この他に墳頂部からは煙管(9)が, 南側周濠内から瓦(10)が出土している。



第73図 中・近世の遺物(1)



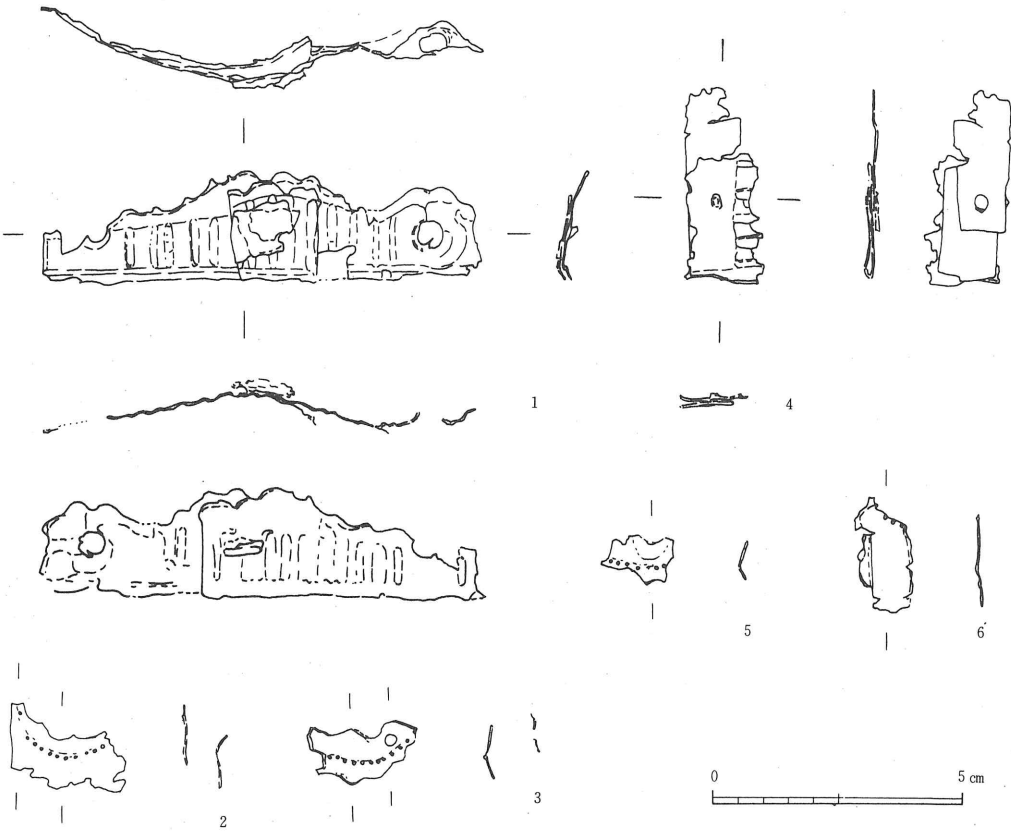
第74図 中・近世の遺物(2)

古銭 (第74図)

古銭も土師質土器同様、後方部墳頂(1~12)及び前方部北西隅(13)から出土している。そのほとんどが「寛永通宝」(2, 5~12)であるが、「洪武通宝」(1)も見られる。また、ほとんどが銅銭であるが、4のみ鉄銭である。

宝冠 (第75図)

後方墳頂の攪乱層内から宝冠の破片が出土している。城川玄一氏によると、「古墳の名前が大日塚であること、おおくの仏像が宝冠をしないのに対し、大日如来は宝冠をすることなどから大日如来の宝冠にほぼ間違いない。また、板の薄さ等から江戸初期のものであろう。」と鑑定している。



第75図 中・近世の遺物 (3)

第3編 権現山古墳の墳丘測量

第1章 調査の経過

権現山古墳は、宇都宮市茂原町字五領山311番地外に所在する。茂原古墳群中では最も北寄りであり、大日塚古墳の北約250mに位置する。北東約50mには小規模な円墳とみられる五領山古墳があり、また北側一帯は弥生後期から古墳時代後期を中心とした集落跡である権現山北遺跡が所在する。(第2図参照)

地理的環境(序-2)の中でも触れたとおり、本墳や権現山北遺跡の所在する台地は独立丘陵のような感が強く、愛宕塚・大日塚古墳のある台地とは隔絶している。本墳はこの独立丘陵の南端に立地しており、位置的には愛宕塚・大日塚両古墳を望む占地である。なお、本墳の立地は標高80~81mであり、周囲の沖積低地面(水田面)との比高差は3m前後である。

本古墳の現状は、東側が宅地と畑地、南・北・西は山林である。山林部分は浅い根切り溝が走る程度で、墳丘の遺存状態は比較的良好なものと思われる。しかし、宅地・畑地となった東側部分は、墳裾および周濠部分が著しく削土されている。また、後方部には、神社が祀られているが、その参道が前方部からくびれ部を通して延びている。

さて、本古墳は古くより前方後円墳として知られてきた。しかし、愛宕塚・大日塚の両墳が、調査によって明らかに前方後方墳であることが確認されたため、同じ古墳群中に位置する本墳がいずれの墳形であるのかについての関心が増大してきた。はたして、前方後方墳が三代にわたって築かれたのか、あるいは最初の前方後円墳として本墳が登場するのか、このことは茂原古墳群がどのような変遷をたどったかという地域的な問題にとどまらず、本地方の出現期古墳の意義がどのような社会的関連をもったのかという非常に大きな問題ををはらむものであった。そこで、われわれは、取りあえず、墳丘測量調査を実施することにより、本墳の墳形の確認を目的とし、さらに隣接する五領山古墳も併せて測量調査をすることとした。

測量調査は、昭和56年4月29日から5月10日までの間、主に連休を利用して実施した。その経過は次に示すとおりである。

- 4月29日 基準杭の設定。西側部分は立木が多いため、設定に苦慮した。
- 4月30日 後方部の測量。北から東側にかけて実施。
- 5月1日 後方部の測量。西側を中心に実施。
- 5月2日 くびれ部の測量。西側は盗掘により大きく変形されていることを確認。
- 5月3日 前方部の測量。墳頂部は参道により切り通し状となっていた。
- 5月4日 西側の周濠部地形測量。東側の宅地・畑地・道路などの測量。
- 5月9・10日 五領山古墳の測量。

第2章 墳形と規模

第76図が、今回作成した権現山古墳の測量図である。測量調査時は、できるだけ細かな地形の変化を捕らえようと25cmコンターを入れたが、斜面部の線がかなり密になるため図面としては50cmコンターで示した。

1 墳形

まず、後世の人為的な変形部分を明らかにしておくのと次のとおりである。

ア 後円(方)部から前方部にかけての東側裾部全体で、宅地化と畑地化による掘削で崖状になっている。おそらく周湟の大部分も削られているものとみられる。

イ 後円(方)部墳頂から前方部墳頂にかけての部分であり、参道をつくるために切り通し状に掘り窪められている。

ウ くびれ部西側の部分で、後円(方)部中心に向って9×5m程の大きな穴が掘られ、その土がくびれ部の周湟部分を埋めるような形で堆積している。

エ 後円(方)部北側と西側の墳裾に、幅1.5～2m程の根切り溝が一部に入っている。

以上のようなことから、墳丘西側を除いた墳裾およびくびれ部の一部分は原形を失っていることが明らかであるが、その他の部分、特に墳丘斜面部は旧状を良くとどめているものとみられる。そこで、後円(方)部の斜面部に注目すると、特に中腹部のコンターは直線的で方形にめぐむ様相で、北西および南西あたりは稜線もみられる。墳裾に近づくにつれてやや丸みをおびてくる感は否めないが、方形となる可能性は非常に高いのではないと思われる。また、くびれ部から前方部西側にかけての周湟部は、比較的良く原形を保っているようである。現状でも60～70cm程の窪みがみられ、コンター(80.5～81.5m)の状態からおおよその平面形も想定できる。ここで注目されるのは、くびれ部付近の周湟が深そうであるのに対して前方部南西隅付近の周湟が浅そうで、この状況は愛宕塚古墳の様子(第9図)と非常に類似する。あるいはこのようなことから、本墳が愛宕塚古墳と同じ前方後方形であることを指摘できるのではなからうか。

なお、五領山古墳(第77図)は、全体に原形を良くとどめているものと思われる。方墳か円墳かの判断は難しいところであるが、周湟と思われる部分のコンターの状況を見る限り、円墳の可能性がやはり強いのではなからうか。なお、ボーリング調査によって、墳丘部に石室と思われるものが存在することを確認した。

2 規模

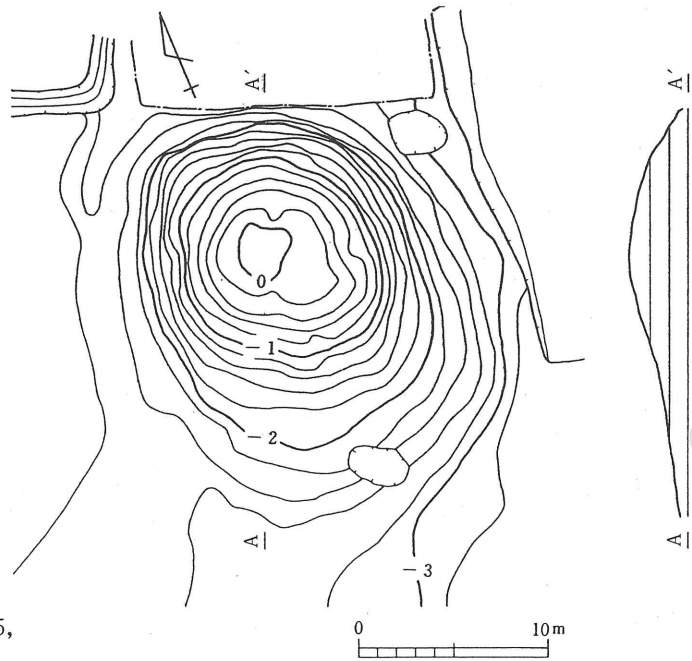
ここでは前方後方墳として、権現山古墳の規模を示す。全長は、後方部の北辺の墳裾を切ったと思われる根切溝の中央にとり、前方部前面の墳裾を81.5mのコンターでもとめると、約63mである。後方部幅は東辺が削土されているため現状では33.5mであるが、現況から墳頂部の中心点



第76図 権現山古墳墳丘測量図

第3編 権現山古墳の墳丘測量

を想定した場合、約35mとするのが適当と思われる。後方部長は墳裾が不明確であるため、直接計測することはできないが、斜面部やくびれ部のコンターの状況から判断すると34m前後が適当とみられる。おそらく後方部は、正方形に近いものであり、少なくとも縦長にはならないものと思われる。前方部長は、推定後方部長との関係から約29mと考える。また、前方部幅は隅の部分の状況が不鮮明であるため、推定20m前後とみられる。なお墳丘の高さは、後方が6.5、前方部が3.5、比高差は3mである。



第77図 五領山古墳墳丘測量図

周湟部は、比較的残りのよい西側部分の状況が参考となる。推定される周湟幅は、後円部西側部分で15~16、くびれ部西側部分で20、そして前方部前面部分はやや狭く5~6mである。なお、五領山古墳は、長径22、短径18mのやや楕円気味の円墳であり、高さは約2.5mである。

第3章 まとめ

以上のように、本墳は前方後方墳である可能性が高く、茂原古墳群では3基の前方後方墳がほぼ南北線上に配されていることになる。しかも全長63mの本墳は、古墳群中最大の前方後方墳である。埴輪・葺石などの外部施設はみられず、また時期を決定するような土器の採集はなかった。ただ墳形・墳丘などの状況を見る限り、本墳は3古墳中最も時代の降ったものであるように考えられる。

第4編 権現山北遺跡

第1章 調査の経過

権現山北遺跡は宇都宮市茂原町字花欠273番地外に所在する。本遺跡の立地は、愛宕塚古墳や大日塚古墳のある台地のすぐ北側の独立丘陵状の小台地上である。この台地南端には権現山古墳が築かれている（第2図参照）。この小台地は東西約280、南北約450mの平らな台地で、周囲の沖積地面（水田面）との比高差は4～5mである。台地の現在の利用状況は、宅地と山林が一部あるものの、大部分は畑地と陸田である。台地上はほぼ全域に土器片などの分布がみられ、かなり密度の濃い集落跡であることが昔より知られていた。

昭和51年11月、従来畑地として利用されてきた台地北東部の一隅に開田工事が実施された。ところが工事中、畑の下から多数の土器片と数軒の住居跡が確認された。昭和52年3月、この状況が地元の下野考古学研究会メンバーによって確認され、同会は直ちに対策を講ずるよう宇都宮市教育委員会に要望した。これを受けた市教育委員会は、現地を調査し、本遺跡が極めて重要であることを確認した。そして地元関係者と協議の上、田植えに支障をきたさないことを条件に発掘調査を実施することに決定した。

発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体者となり、その委託をうけた久保が担当者となって実施した。また、調査員は宇都宮大学考古学研究会の会員が中心となったが、同研究会は3月より愛宕塚古墳の発掘調査に入っていたことから、調査日程はこれとの兼ねあいで4月～5月と7～8月の2次にわたることとなった。以上が調査経過のあらましであるが、詳しくは報告書（昭和54年宇都宮市教育委員会発行）を参照されたい。

第2章 住居跡と出土遺物

発掘調査を実施したのは、遺跡北東隅の一隅約2,000m²の範囲である。調査の結果古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡18軒、ほぼ同時代と思われる各種穴跡16口、その他数条の溝などが確認された（第78図参照）。また、遺物としては、旧石器や弥生土器の出土があり、本遺跡が各時代にわたる遺跡であることも確認された。ここでは、これらのうち特に古墳時代の住居跡と出土遺物を中心に、その概略をまとめておくこととする。

1 住居跡

確認された18軒の住居跡の内容は第12表に示したとおりであり、3・17号を除くすべてが古墳時代のものと思われる。これらはかなり重複が多く、その関係を示すと次のようになる。

18号→2号（拡張）、6号→5号→4号、11号→10号・17号、8号→7号、13号→12号、15号→12号・14号

第4編 権現山北遺跡

No.	規模(m)	主軸方向	壁溝	柱穴	カマド・炉	貯蔵穴	時期	備考
1	6.80×6.55	ほぼ北	有	4	炉・北寄	南東隅	古墳時代中期	
2	7.90×7.90	N -15°- E	有	9	炉・北寄	南東隅	古墳時代中期	焼失
3	3.90×2.90	N -13°- E	無	0	カマド・北	—	平安時代	
4	6.20×6.20	N -20°- W	有	4	カマド・北	—	古墳時代後期	焼失 張出有り
5	6.60×6.50	N - 8 °- E	有	4	—	南西隅 西壁際中央	古墳時代中期	焼失
6	(5.40)×5.40	N - 6 °- E	有	4	—	南東隅	古墳時代中期	
7	6.90×6.80	N -27°- W	有	4	炉・北寄	南壁際東寄 西壁際北寄	古墳時代中期	焼失
8	7.80×7.70	ほぼ北	有	4	炉・北寄	北東隅	古墳時代前期	
9	5.45×5.40	N - 5 °- E	無	5	カマド・北	南東隅	古墳時代後期	焼失
10	4.40×4.30	N -13°- E	有	4	カマド・北	北東隅	古墳時代後期	
11	5.50×4.90	N -7.5°- E	有	0	炉・中央	南東隅	古墳時代中期	
12	6.70×6.70	N -25°- W	有	4	カマド・北	—	古墳時代後期	焼失 張出有り
13	6.80×6.75	N - 5 °- E	有	不明	カマド・北	—	古墳時代後期	焼失 張出有り
14	3.93×2.80	N -13.5°- W	有	0	炉・南西寄	南西隅	古墳時代中期	焼失
15	—	—	—	—	炉	—	不明	
16	4.95×4.90	N -19°- W	一部有	4	カマド・北	南東隅	古墳時代後期	焼失
17	3.10×(2.00)	ほぼ北	無	0	カマド・北	—	平安時代	
18	6.70×6.60	N -15°- E	有	5	炉・北寄	南東隅 南壁際東寄	古墳時代中期	拡張して2号となる。

第12表 権現山北遺跡住居跡一覧

以上の重複関係を基本とし、これに出土土器の年代を加味すると、本集落の古墳時代住居跡群は前・中・後の3時期に分けることができる。ここでは、それぞれの住居跡を明らかにするとともに、時期毎の特徴をまとめる。

古墳時代前期 8号住居跡1軒が確認されただけである。平面形が隅丸方形であり、他の時期のものとは異なる。柱穴は4本で、やや北壁寄りに炉がつくられていた。

古墳時代中期 1号・2号(18号)・5号・6号・7号・11号・14号の7軒が確認されている。平面形は14号が長方形、他は方形である。面積には大小があり、最大は2号で一辺7.9m、最小は14号で3.93×2.8mである。炉は1号・2号・7号などでみられるようになり北壁寄りであるが、14号は確認されていない。柱穴は、11号・14号に確認されない以外は、すべて4本である。なお、1号には東壁から柱穴に向かう間仕切り溝がみられる。

古墳時代後期 4号・9号・10号・12号・13号・16号の6軒が確認されている。平面形はいずれもほぼ方形であり、面積は12号が最大で6.7×6.7m、10号が最小で4.4×4.3mである。いずれも北壁のほぼ中央にカマドがつくられ、4号・16号などには切り石の使用もみられた。柱穴はすべて4本である。なお、4号・12号・13号の南壁中央には、張り出し部分があった。

2 出土遺物

住居跡からの出土遺物は、土器、石製模造品、鉄製品である。石製模造品については、後述するため、ここでは主に土器について概要を述べる。なお各土器の特徴については、報告書の土器観察表を参照されたい。

古墳時代前期の土器 8号住居跡の出土土器は土師器甕、埴、高坏、埴、器台であり、甕はS字口辺である。なお、9号住居跡南P₁₀出土土器も同時期であろう。

古墳時代中期の土器 1号・2号・5号・6号・7号住居跡などの出土土器は土師器壺・甕・甗・埴・高坏・埴などであり、高坏や埴の発達が目につく。5号と6号が重複し、時期的には少なくとも2段階に分かれるものとみられる。また、この時期には須恵器の伴出がみられる。1号で壺類と甗の口辺部片および甕の胴部片(第87図22~25)、2号で坏(第89図16)、7号で蓋(第102図28)の出土があった。土師器の様相から概ねこの時期の後半段階に伴うものとみられる。なお、1号および7号の須恵器は、昭和54年の報告書に掲載し得なかったものであり、今回観察表(第14表)とともに正式に報告するものである。

古墳時代後期の土器 この時期は、土器様相から明らかに二分される。まず、後期初頭に位置付けられるのが16号住居跡出土土器の土師器壺・甕・小形甕・埴・甗・坏・高坏などである。このうち主体を占めるのは坏類であり、須恵器の器形的影響を受けた所謂模倣坏が定着している。なお、須恵器の伴出もみられる(第112図26)。

つぎに4号および12・13号住居跡出土の土師器が、一つの時期として設定できる。器種は、甕・甗・小形甕・鉢・埴・坏・高坏などであり、長胴化した甕と模倣坏が大きな特徴となっている。模倣坏は前述した16号よりも新しい段階の須恵器を模したものであり、非常に規格化された作り

である。なお、この4号に代表される一群は、形式的に16号から連続するものとはみられず、後期の後半段階に位置付けられるものである。

第3章 まとめ

今回の発掘調査は、権現山古墳の北方に広くひろがる権現山北遺跡のうち、開田により消滅することになった北東端の一角(60×40m)を対象としたが、約2,000m²の小範囲に竪穴住居跡18、穴跡19、溝3が確認された。それに伴って多くの土師器・須恵器・石製模造品などが出土した。また発掘調査区内からは、先土器時代の石器や縄文式土器・弥生式土器も採集された。おそらく本遺跡は、先土器時代から平安時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であると推測される。

発掘によって確認された住居跡18軒は、古墳時代前期1(8号)古墳時代中期8(1・2・5・6・7・11・14・18号)古墳時代後期6(4・9・10・12・13・16号)平安時代2(3・17号)不明1(15号)に区分されるが、このうち2・4・5・7・9・12・13・14・16号跡は焼失住居であり、丁度半数の9軒が火災に遭遇したことになる。また発掘区の西側や南側の隣接地区からも表土を少し掘りかえすとかなり多くの炭化木材が出土することから、台地上の集落の大半が何回にもわたって類焼したことが知られる。本遺跡の立地する低台地上からは東方はるかに筑波山を、北西方のかなたに男体山を見ることができ、目をさえぎるものがないが、同時に風当りも強く、一軒で失火をおこせば忽ち集落の大半が類焼したであろうことは容易に想像される。集落間の争いによる焼失、あるいはアイヌの風習のように病死者が出ると自ら火をつけるなどの理由も考えられるが、立地条件からみて自然の影響が大きいといってよいのではなかろうか。

住居跡は古墳時代中期のものが8軒でもっとも多い。一般にこの時期の集落の特徴として、①単純遺跡が多い。②前後の時期の集落が存在するのにこの時期の住居跡のみ欠落する遺跡が多い。③大規模集落があまり認められない。④同時期の切り合い関係はあまりみられないなどの現象が指摘されているが、本遺跡のものはやや趣を異にする。①と②とは関連をもつ現象であるが、前の章で明らかにしたように、本遺跡では集落の連続性が認められ、①・②の特徴とは異なる。③については、発掘地区が遺跡全体からみれば北東部の一角に限られていることや、この時期のものも2期以上に細分されることなどから明言はしがたいが、確認された住居跡群のうちこの時期のものが約半数を占めていることから、同期にかなりの集落が営まれたことを推測することも可能であろう。④については、2号跡と18号跡、5号跡と6号跡の間にそれぞれ重複や切り合い関係が認められ、これまたこの時期の一般的特徴とは異なる。古墳時代中期の一般的特徴を高橋一夫は「古墳時代前期において、生産に対して人口が飽和状態に達し、この時期には生産性を高める農業技術や農具を持ちえず、周辺におそらく世帯を単位として分散(分村)していった。」^{註1}結果生じたものと考えたが、本遺跡のように4つの特徴の範疇に入らないものについても「広大なバックマーシュを持ち、人口が増加すればさらにそれに対して生産を上げられるところでは分村の必

要もなく、大規模な集落も維持ができたであろう。^{註2}」と示唆に富んだ指摘をしている。本遺跡の存在する低台地の周辺は水田の好適地が広がり、弥生時代以来連続して農耕が営まれ古墳時代後期まで分村することはなかったものと思われる。ただ今回の発掘によって奈良時代の住居跡が一軒も確認されず、表面採集によっても同期の土器が認められないことは注目される。発掘区域を拡張すれば確認される可能性もあるが、移住したことも考えられる。本遺跡の北東約1kmのあたりは律令制下に条里が施行されたことが知られており、^{註3}奈良時代には風当たりが強く火災に遭いやすい台地上から、新たに整備された水田の近くの微高地に移住したのかもしれない。今後の検討課題である。

古墳時代中期について多いのは古墳時代後期のもので6軒をかぞえる。このうち特に注目されるのは4号住居跡である。火災に遭い、とるものもとりあえず避難したのであろうか、常住の生活をそのまま示すかのように、日常雑器である大量の土師器が散乱することなく、当時置かれてあった位置・状態のまま発見された。祭具である石製模造品も土器群からは離れた位置から20個以上も出土し、鉄鏃・鉄鎌など、鉄製品も3点を数える。一般に焼失住居跡からは遺物が多く出土するが、4号跡は特に顕著で同期の他の住居跡との格差は大きい。大家族の家父長の住居であったことをおもわせる。本跡は竪穴住居内での日常生活の状況を示す好資料というだけでなく、当時の家族構成を示唆する重要な資料といえるであろう。

本遺跡を特徴づける遺物としては滑石製の石製模製品がある。住居跡18軒のうち10軒から出土している。内わけは古墳時代中期6軒、古墳時代後期2軒、平安時代2軒である。とくに多いのは古墳時代中期で、確認された住居跡8軒のうち6軒(1・2・5・6・11・18号)から出土している。これに対して古墳時代後期には6軒のうち2軒(4・12号)から出土しただけである。ただ出土量からみれば、古墳時代中期に比して後期の場合は、4号跡から20個以上、12号跡からも13個というように大量であることが特徴である。屋内祭祀を反映する石製模造品が、本遺跡の周辺雀宮一帯からかなり採集されることは古くから

知られているところであるが、^{註4}今回の発掘結果から石製模造品の使用の推移をたどれば、古墳時代中期後半に多くの個々の住居が個別に屋内に石製模造品を保有し、後期になると、少数の大量保有住居と全く保有しない多数の住居とにわかれるようである。住居跡出土の石製模造品についてはすでにいくつかのすぐれた研究^{註5}があり、高橋一夫は、「和泉・鬼高期に家父長層の竪穴から出土し、鬼高Ⅱ式期に減少し、真間期に消滅する。」とし、^{註6}鬼高Ⅱ式期すなわち古墳時代後期における減少の原

住居跡 No.	勾 玉	管 玉	白 玉	小 玉	土 玉	剣	有 孔 円 盤	不 明	合 計
1号	2			6		1			9
2号			2						2
3号			(1)						(1)
4号			8			4	8		20
5号								1	1
6号			2						2
11号	1		2						3
12号		1	1	9	1		1		13
17号							(1)		(1)
18号		1	9						10

第13表 石製模造品出土住居跡一覧

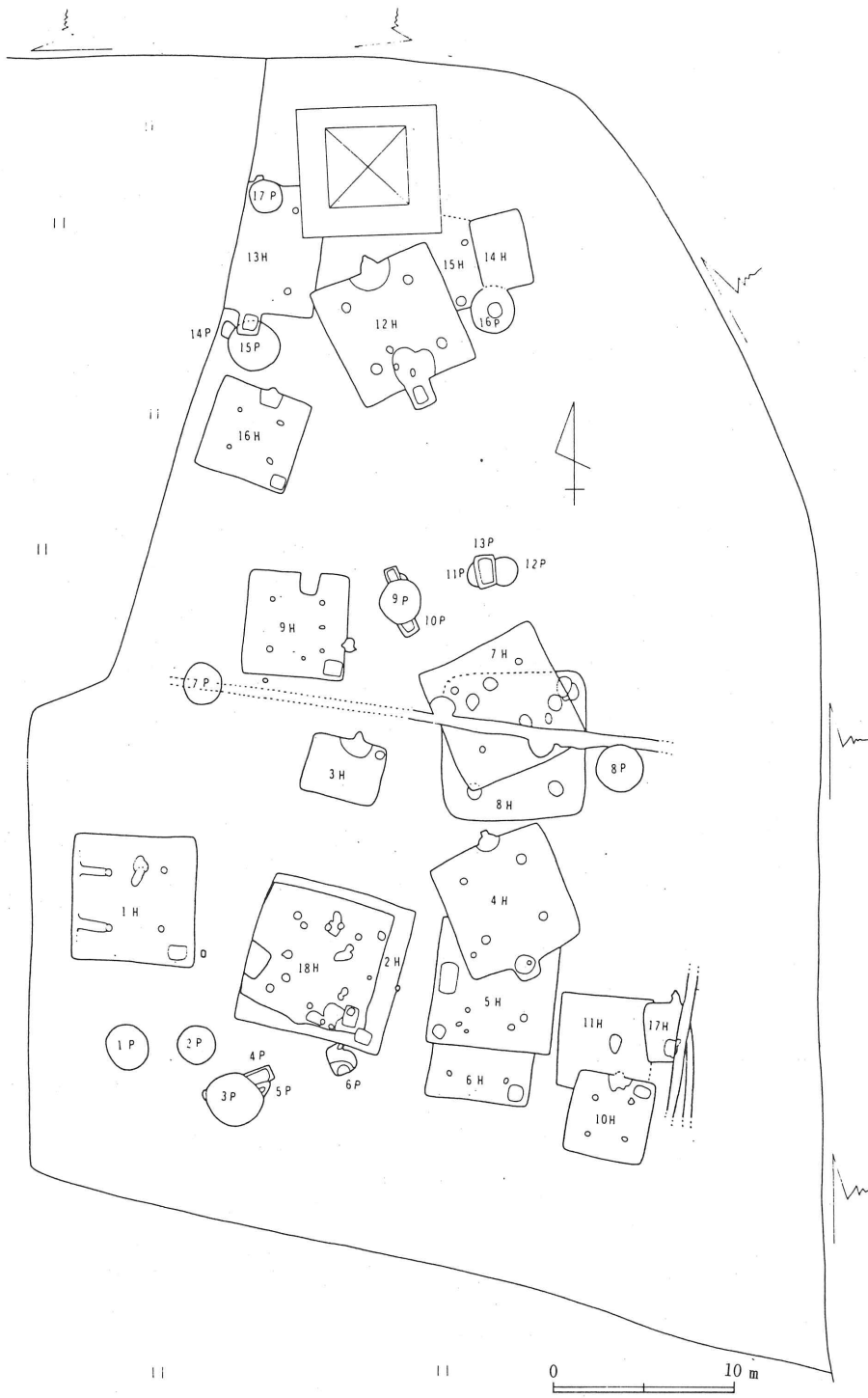
因を開発などによる地縁的な村落の形成とそれに伴う村社の発生とに求めた。一般に古墳時代中期から後期にかけての時期に最盛期があり、奈良時代にはほぼ消滅することはよく知られることであるが、今回の発掘結果からみると、古墳時代後期後半に該当する4号跡から最も多く出土しており、この時期に減少するとはいいがたい。本遺跡の場合、高橋の指摘する「開発などによる地縁的な村落の形成」は北東にひろがる条里の存在からみて奈良時代以降のこととする方が妥当であろう。本来支配者階級の独占的な呪具であった鏡・玉・剣が、滑石製の小形模造品であるとはいえ、被支配者階級の住居に保有されるようになったのは、古墳時代の社会の中での大きな変化であることはまちがいないが、模造品減少の時期のずれは、地域により社会の発展のずれがあることを反映しているのであろう。

なお平安時代とみられる2軒の竪穴(3・17号)からも石製模造品が出土しているが、両住居跡に伴うものかどうかは不明である。

住居跡出土の遺物でもっとも量の多いのは土器であるが、そのうち特に注目されるのは2号・7号および16号住居跡出土の須恵器と17号住居跡出土の土師器である。前者は形態・焼成からみて恐らく畿内からはこぼれてきたものと思われ特に2号の坏は関東地方では最も古い段階に位置付けられるものである。後者は坏の外面に「大大上輻念念右」とも見える意味不明の7文字の墨書がある。赤外線フィルムで撮影し、赤外線テレビでも観察したが文字そのものは明確にはならず、習書によるものか呪的なものか或いは他の意図によって書かれたのかすべて不明である。今後の検討を俟ちたい。

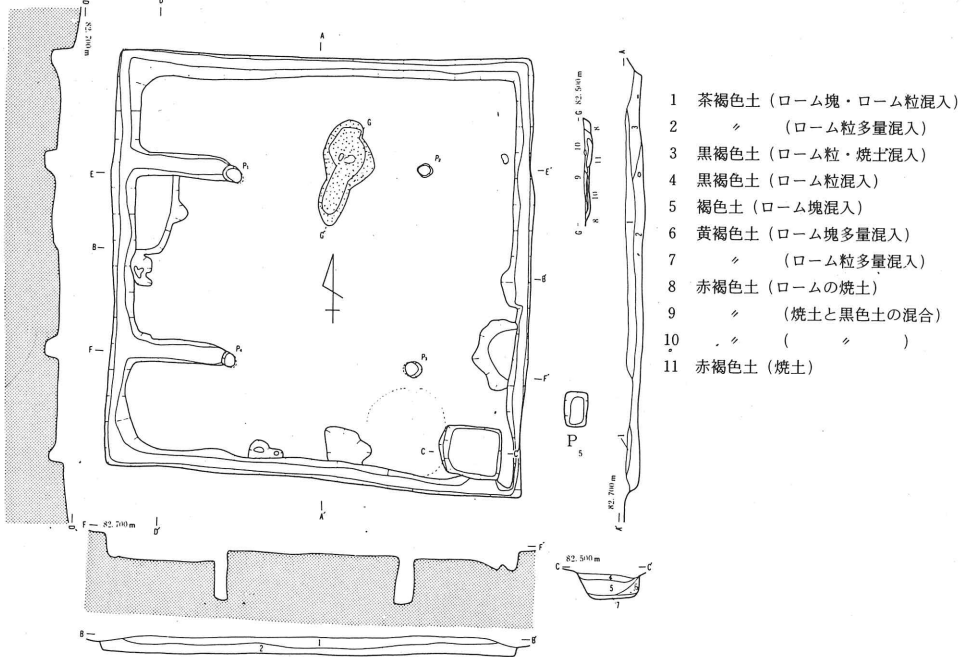
(註)

- 1 高橋一夫「和泉・鬼高期の諸問題」原始古代社会研究2 1975年
- 2 前掲註1
- 3 岡田隆夫「下野の条里について」県史だより第32号 1976年
- 4 寺内武夫・篠崎善之助「下野中原遺跡調査概報一第二回一」考古学10-10 1939年
- 5 原島礼二「日本古代社会論」現代歴史学の課題(上) 1971年
高橋一夫「石製模造品出土の住居跡とその性格」考古学研究18-3 1971年
金子裕之「古墳時代屋内祭祀の一考察」国史学84号 1971年
梶山林継「住居跡発見祭祀遺物の研究」国学院大学日本文化研究所紀要35輯 1975年
- 6 前掲註1
- 7 東京国立文化財研究所の石川陸郎氏のお世話になった。心から謝意を表する。

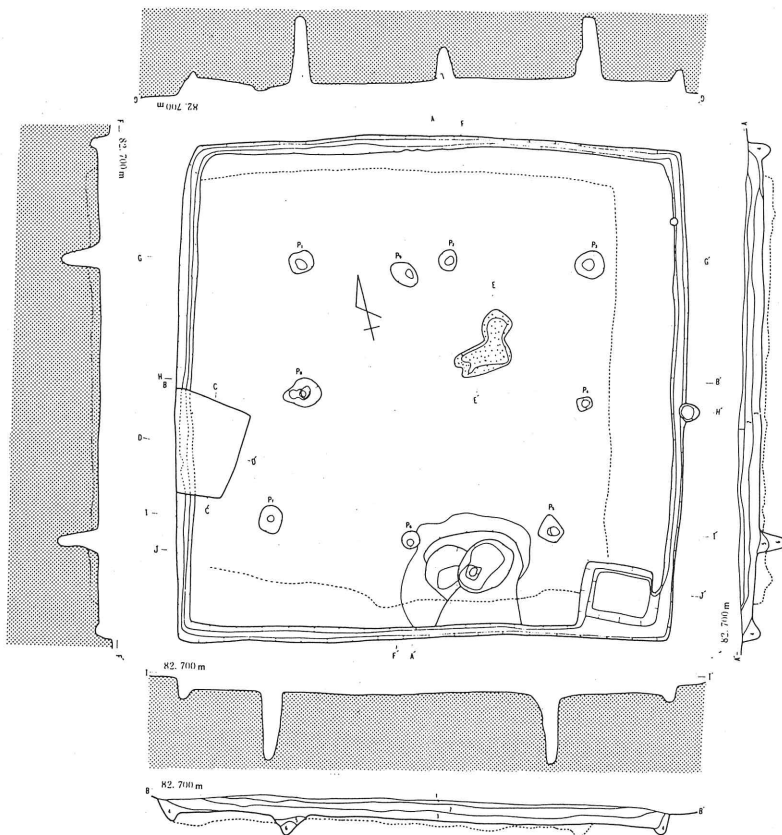


第78図 権現山北遺跡分布図

第4編 権現山北遺跡

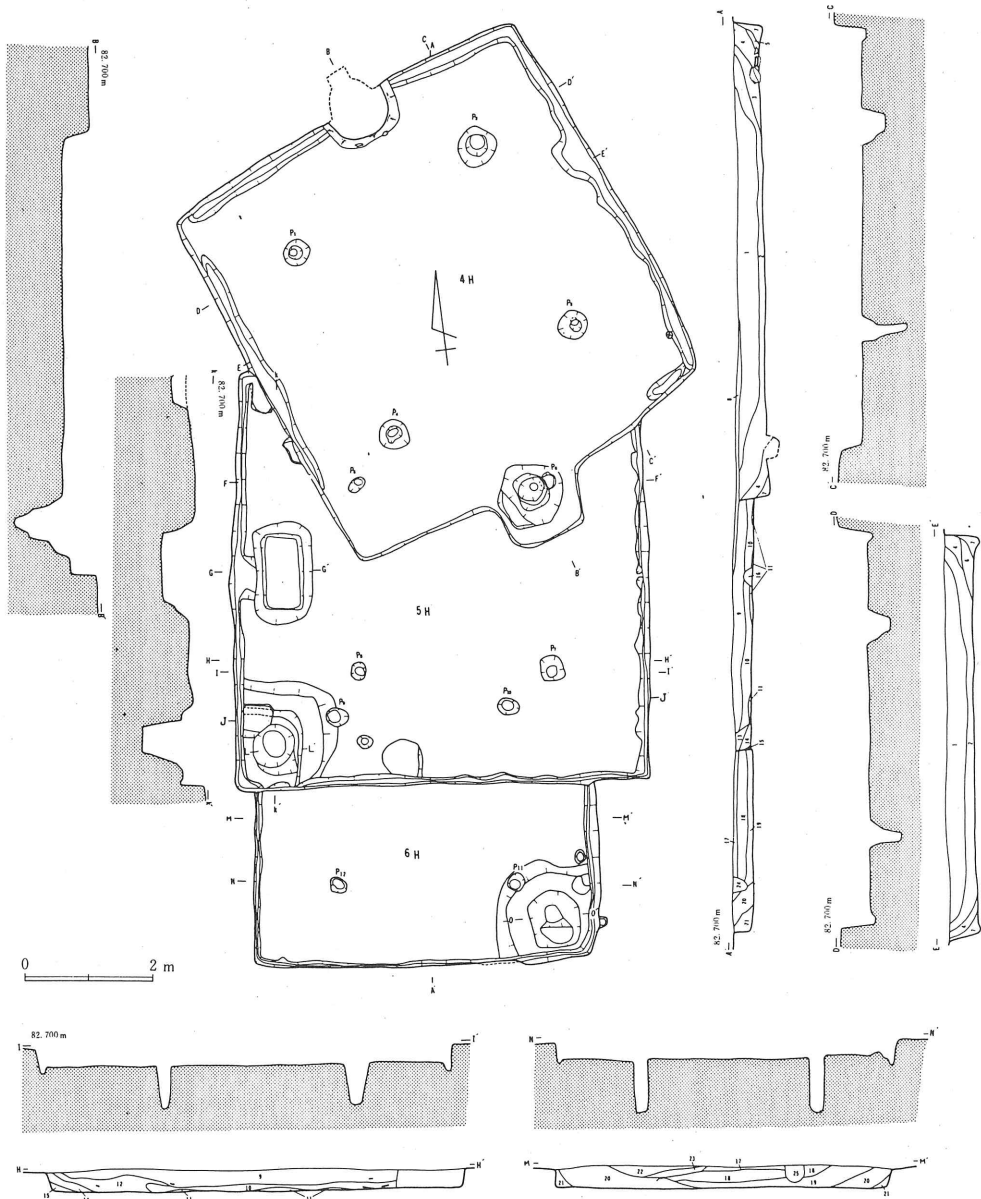


- 1 黒褐色土 (ローム粒微量混入)
 2 黒褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物微量混入)
 3 茶褐色土 (ローム粒・焼土・炭化物混入)
 4 暗褐色土
 5 褐色土 (ローム塊・ローム粒多量混入)
 6 茶褐色土 (ローム粒多量混入, もろい)



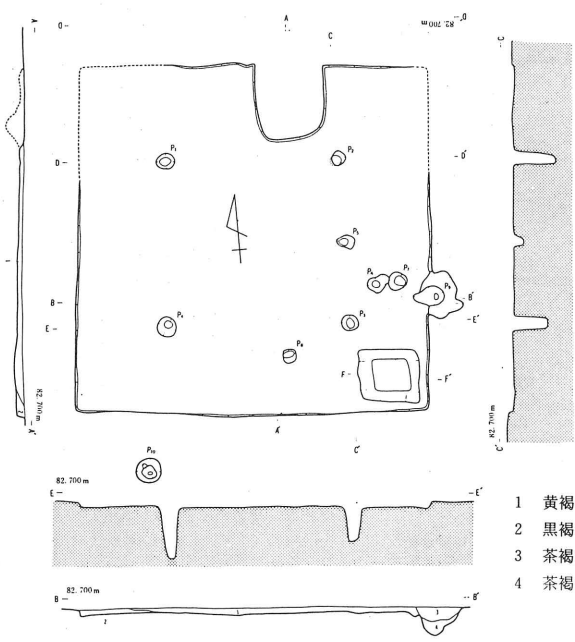
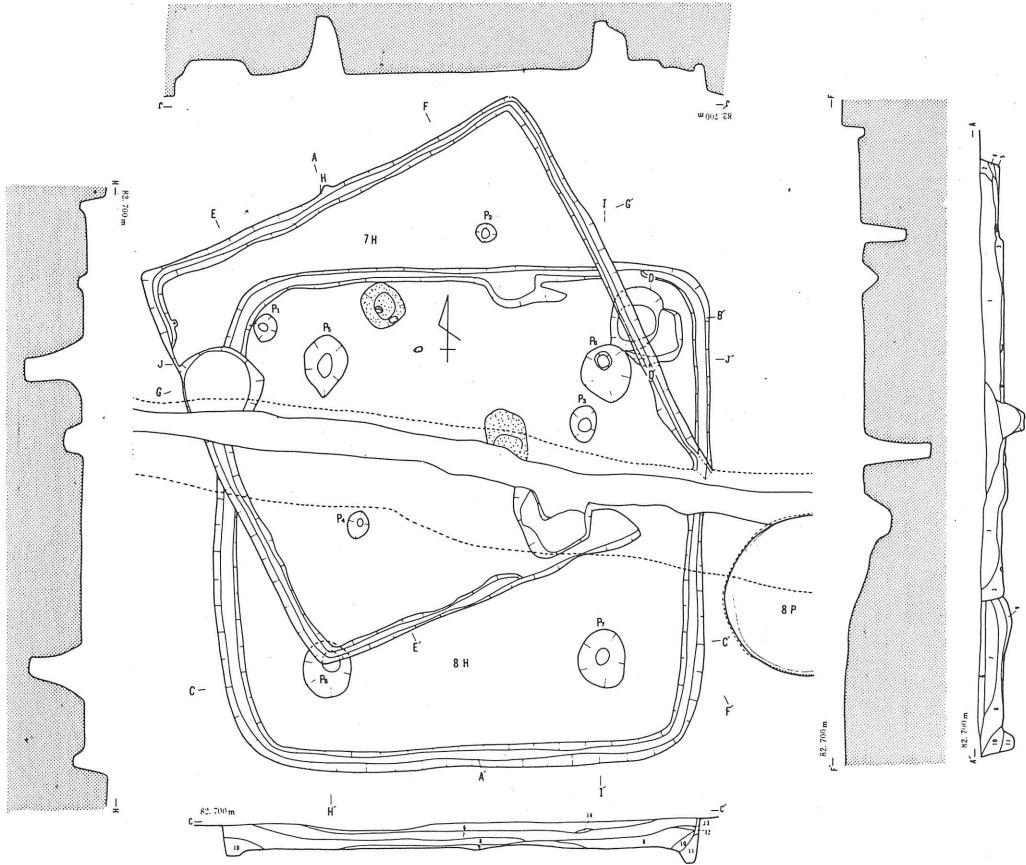
0 2 m

第79図 権現山北遺跡1号住居跡(上), 2号住居跡(下)実測図



- | | | |
|----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------|
| 1 黒色土 | 10 黒褐色土 (ローム粒多量,
焼土・炭化物少量混入) | 19 黄褐色土 (ローム塊,
ローム粒少量混入) |
| 2 黒褐色土 (ローム粒多量混入・焼土・
炭化物少量混入) | 11 / (黄褐炭化物少量混入) | 20 黄褐色土 (ローム粒多量混入) |
| 3 淡褐色土 (焼土・炭化物多量混入) | 12 黒褐色土 (ローム塊・
ローム粒多量, 炭化物少量混入) | 21 黒褐色土 (ローム粒多量,
焼土微量混入) |
| 4 暗褐色土 (ローム粒若干混入) | 13 黒褐色土 (ローム粒混入) | 22 黄褐色土 (ローム塊・
ローム粒混入) |
| 5 暗赤褐色土 (焼土多量混入) | 14 黒色土 (/) | 23 黒色土 (小ローム塊・
ローム粒混入) |
| 6 褐色土 (焼土・炭化物多量混入) | 15 / (粘性強) | 24 赤褐色土 (ローム粒混入) |
| 7 黄褐色土 (小ローム塊多量混入) | 16 黄褐色土 (ローム粒多量混入) | 25 黒褐色土 (/) |
| 8 暗褐色土 | 17 黒褐色土 (ローム粒微量混入) | |
| 9 黒褐色土 (ローム粒混入) | 18 黄褐色土 (ローム塊,
ローム粒多量混入) | |

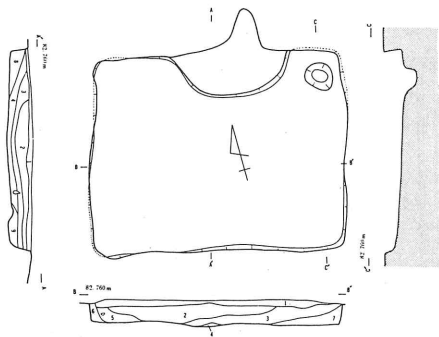
第80図 権現山北遺跡4～6号住居跡実測図



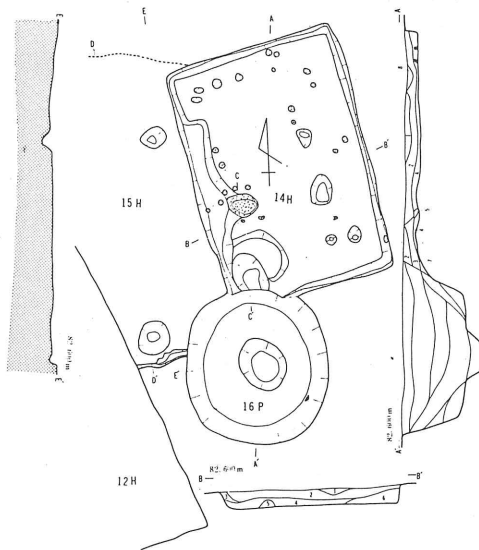
- 1 暗褐色土 (ローム粒多量混入)
- 2 暗褐色土 (焼土・炭化物混入)
- 3 褐色土 (ローム塊, 焼土・炭化物混入)
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土 (焼土・炭化物混入)
- 6 茶褐色土 (ローム粒混入)
- 7 黒褐色土 (シ)
- 8 茶褐色土 (シ)
- 9 黄褐色土 (ローム粒多量混入)
- 10 黒褐色土 (ローム多量混入, 粘性強)
- 11 黄褐色土 (ローム粒多量混入, 粘性強)
- 12 シ (ローム塊, ローム粒混入)
- 13 ローム塊
- 14 焼土

- 1 黄褐色土 (ローム塊, ローム粒多量混入)
- 2 黒褐色土 (ローム粒少量混入)
- 3 茶褐色土 (シ)
- 4 茶褐色土 (ローム粒ほとんど混入しない)

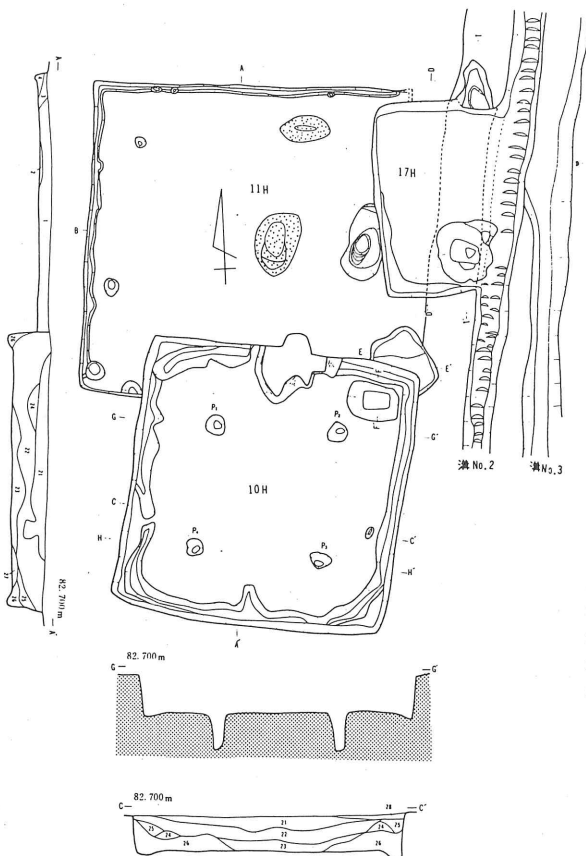
第81図 権現山北遺跡 7・8号住居跡 (上), 9号住居跡 (下) 実測図



- 1 黒色土 (ローム塊混入, 客土)
- 2 黒褐色土 (ローム粒多量混入)
- 3 ♡ (ローム粒, ローム塊混入)
- 4 ♡ (ローム塊多量混入)
- 5 黒色土 (ローム粒微量混入)
- 6 暗黄褐色土 (ローム塊多量混入)
- 7 暗茶褐色土 (♡)
- 8 黒褐色土 (♡)
- 9 ♡ (焼土混入)



- 1 黒色土 (ローム粒微量混入)
- 2 ♡ (ローム粒少量混入)
- 3 茶褐色土 (ローム粒, 焼土混入)
- 4 黒色土 (焼土・炭化物混入)
- 5 焼土
- 6 黄褐色土 (ローム塊少量混入)
- 7 ♡ (ローム塊多量混入)
- 8 黒褐色土 (ローム粒, 焼土混入)

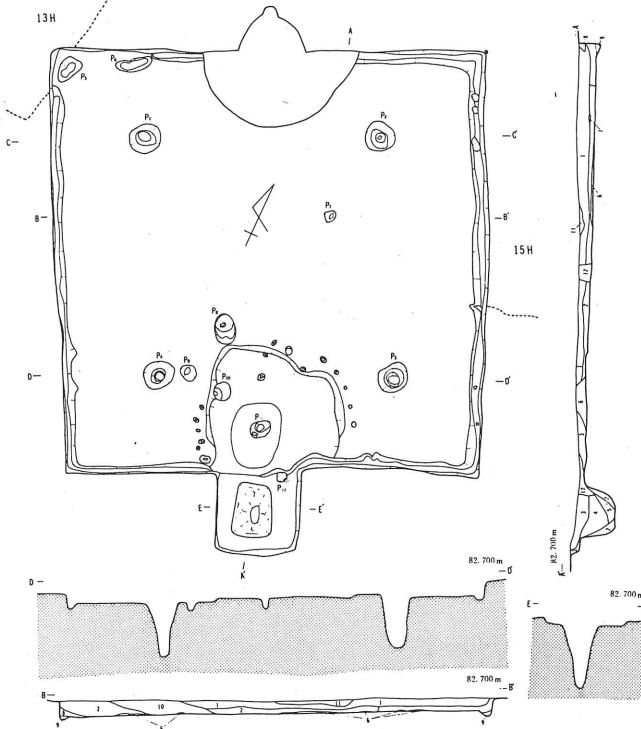


- 1 黒褐色土 (ローム混入)
- 2 黄褐色土 (ローム塊混入)
- 3 黒褐色土 (ローム粒, ローム塊混入)
- 4 黄褐色土 (ロームブロック多量混入)
- 21 黒褐色土 (ローム粒, ローム塊微量混入)
- 22 茶褐色土 (ローム粒, ローム塊少量混入)
- 23 ♡ (ローム粒, ローム塊多量混入)
- 24 黒褐色土 (ローム粒, ローム塊微量混入)
- 25 茶褐色土 (ローム塊多量混入)
- 26 黄褐色土 (ローム粒, ローム塊多量混入)
- 27 赤褐色土 (ローム塊, 焼土, 炭化物微量混入)
- 28 黒色土 (客土層)

0 2m

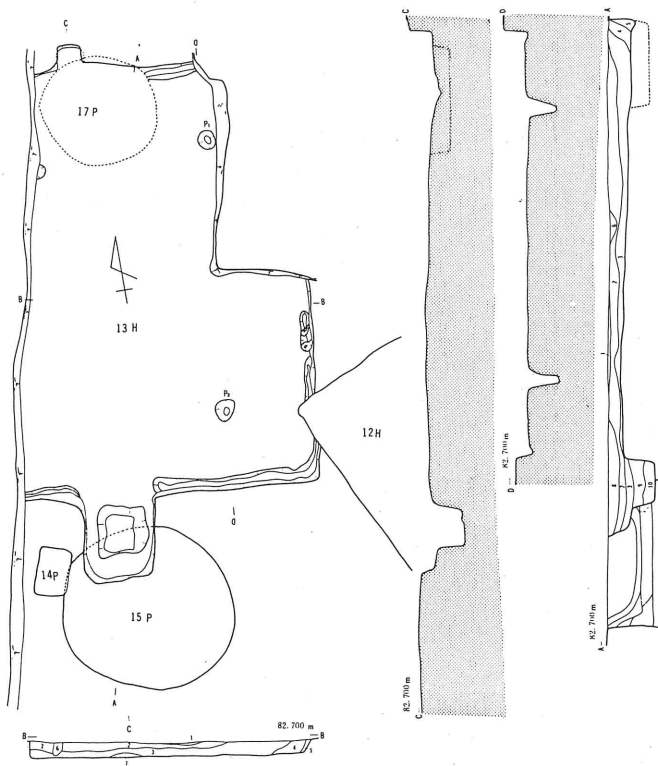
第82図 権現山北遺跡 3号住居跡 (上左), 14・15号住居跡 (上右),
10・11・17号住居跡 (下) 実測図

第4編 権現山北遺跡



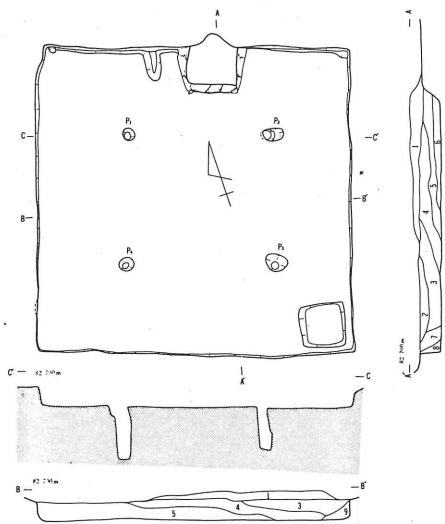
- 1 褐色土 (ローム粒, 小ローム塊, 焼土混入)
- 2 褐色土 (ローム粒混入)
- 3 褐色土 (ローム粒, 焼土, 炭化物混入)
- 4 黒褐色土 (ローム塊多量, 炭化物少量混入)
- 5 / (焼土混入)
- 6 黄色土 (ロームが焼けたもの)
- 7 焼土
- 8 黄色土 (ローム塊)
- 9 灰褐色土
- 10 褐色土
- 11 黄褐色土 (焼土混入)
- 12 焼土

- 1 茶褐色土 (ローム粒混入)
- 2 黒褐色土 (/)
- 3 黄褐色土 (ローム多量, ローム塊混入)
- 4 黒色土 (ローム粒混入)
- 5 黄色土 (ローム)
- 6 攪乱
- 7 黄色土 (ローム塊)
- 8 黒褐色土 (ローム粒多量混入)
- 9 黒色土 (ローム塊混入)
- 10 / (粘性弱)

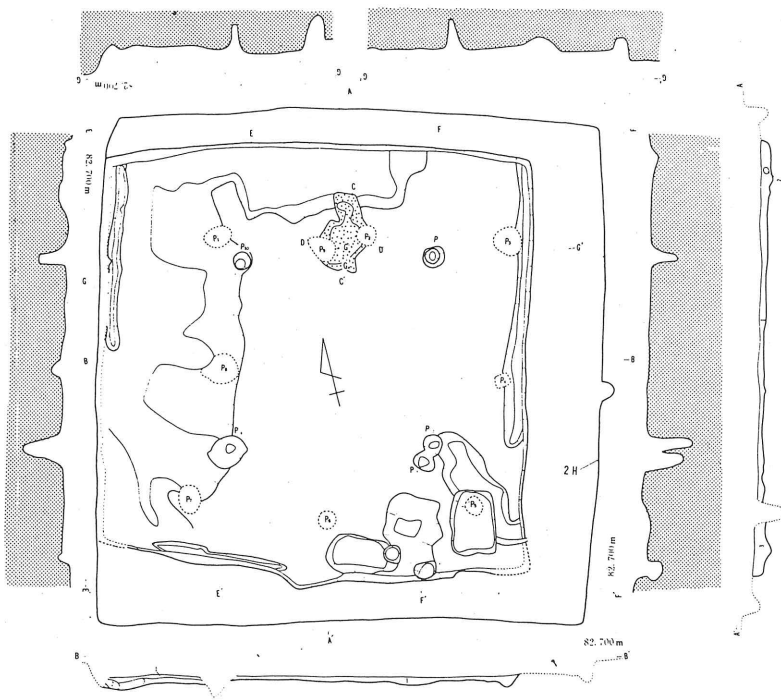


0 2 m

第83図 権現山北遺跡12号住居跡(上), 13号住居跡(下)実測図



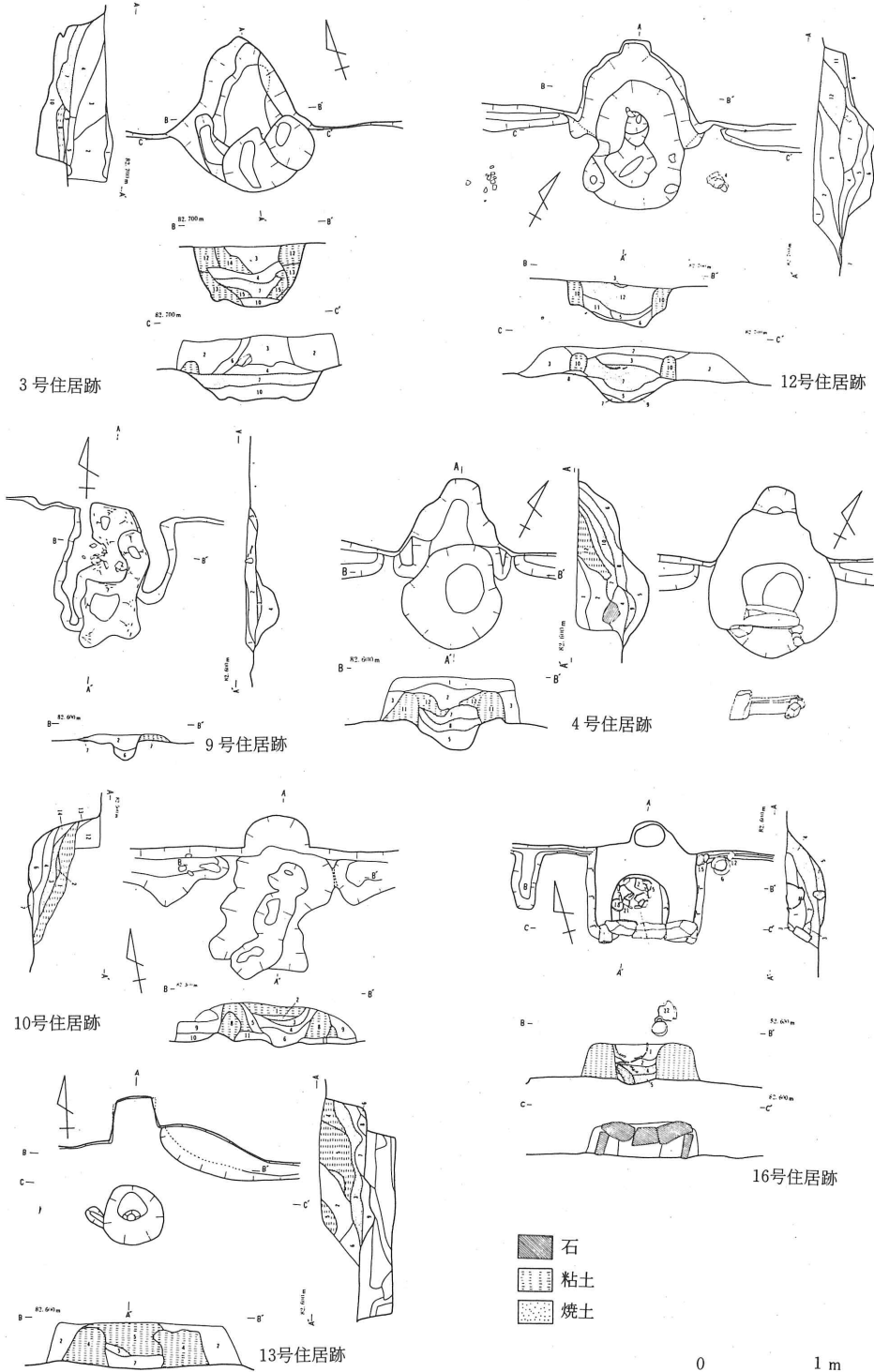
- 1 暗黄褐色土 (攪乱)
- 2 暗褐色土 ((ローム粒多量混入, 粘性強)
- 3 ♪ (小ローム塊, 焼土・炭化物多量混入)
- 4 淡黄褐色土 (ローム粘性強)
- 5 黄褐色土 (ローム塊混入)
- 6 黒褐色土 (ローム塊, 焼土, 炭化物混入・粘性強)
- 7 黒色土 (ローム粒混入)
- 8 暗黄褐色土 (ソフトローム混入)
- 9 黒褐色土 (♪)



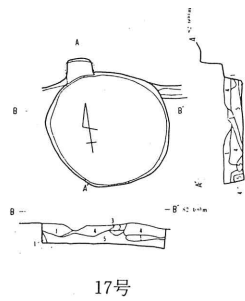
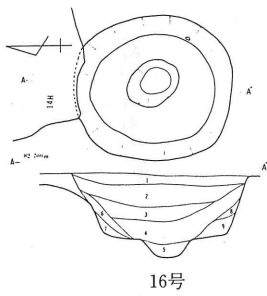
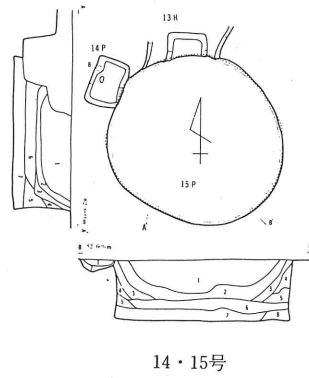
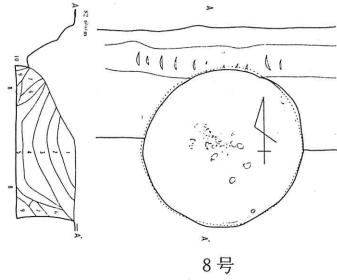
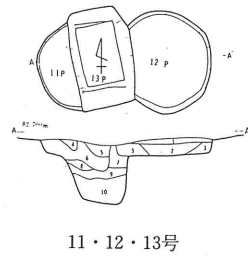
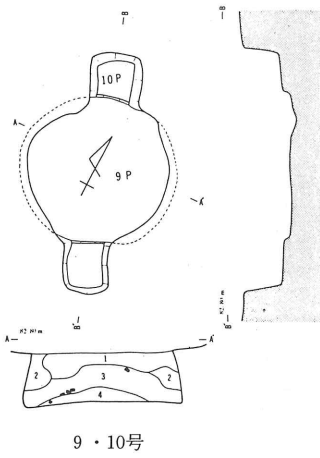
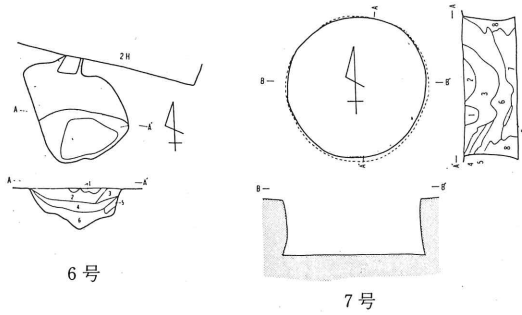
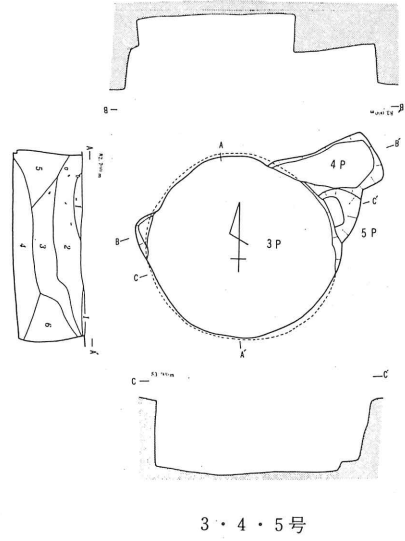
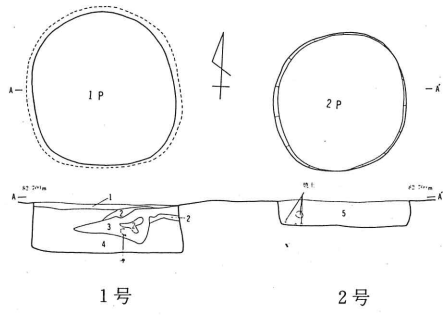
- 1 黒褐色土 (ローム粒, 小ローム塊混入)
- 2 黄色土 (ローム塊)
- 3 黒色土 (ローム少量, ローム塊混入)

0 2m

第84図 権現山北遺跡16号住居跡 (上), 18号住居跡 (下) 実測図

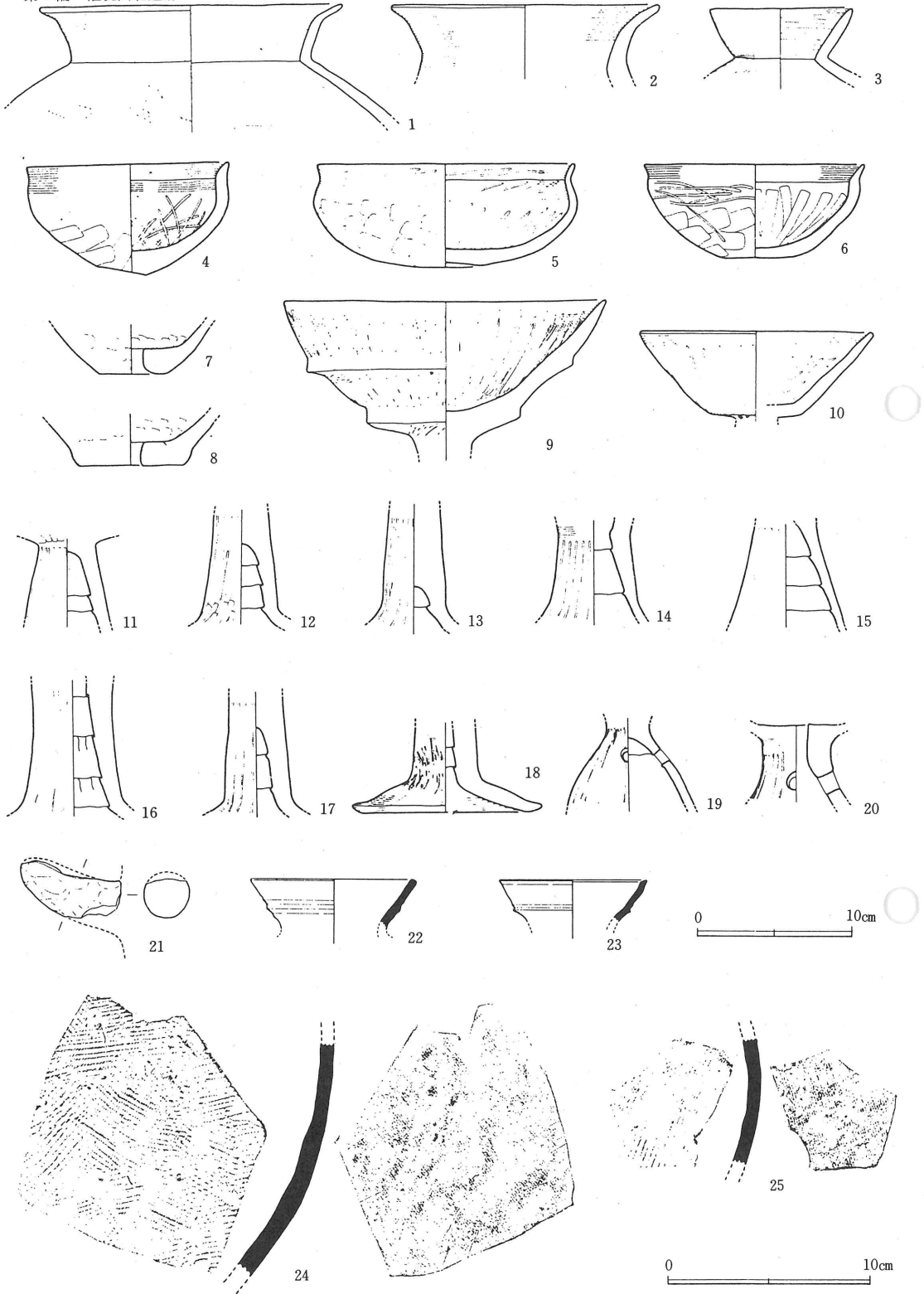


第85図 権現山北遺跡カマド実測図

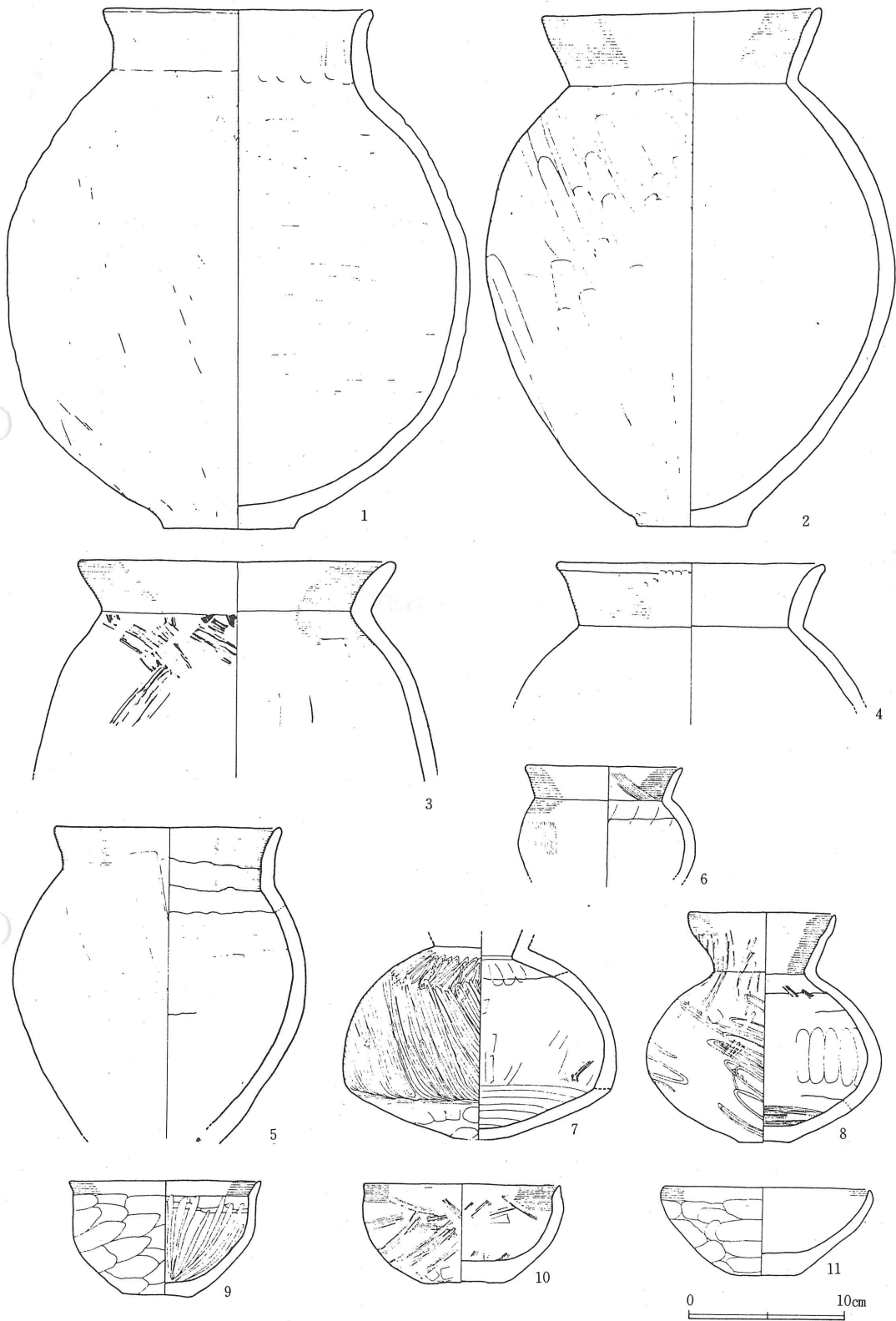


第86图 権現山北遺跡穴跡実測図

第4編 権現山北遺跡

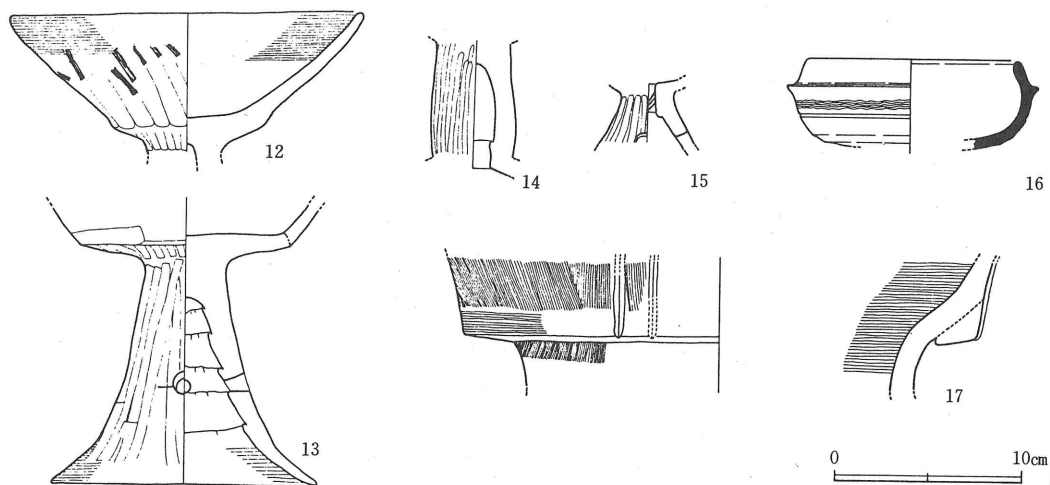


第87図 権現山北遺跡1号住居跡出土土器実測図



第88図 権現山北遺跡 2号住居跡出土土器実測図(1)

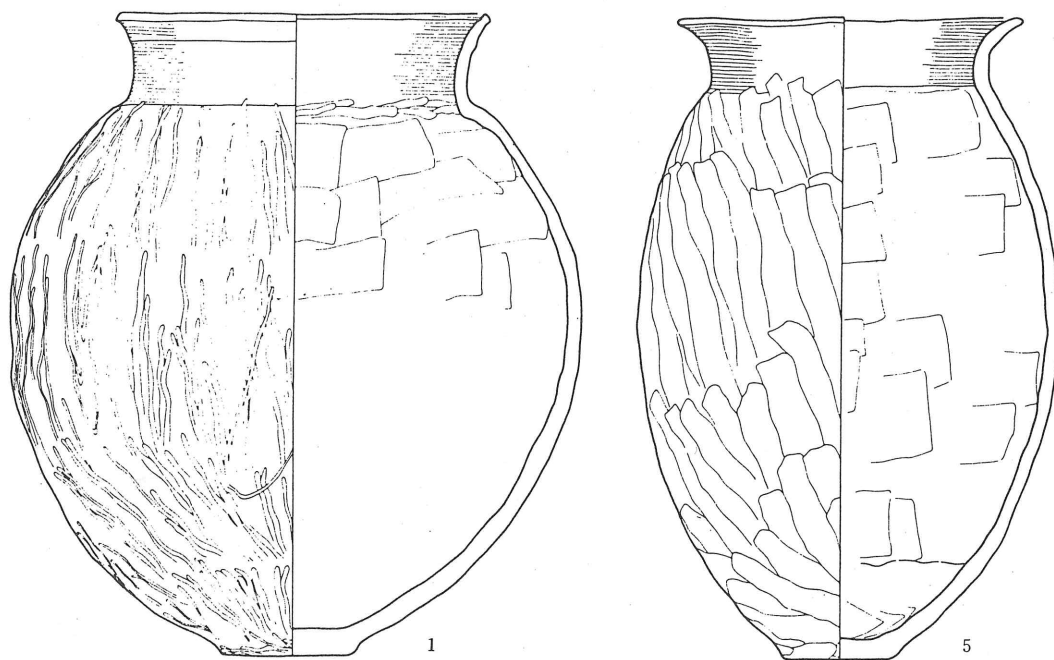
第4編 権現山北遺跡



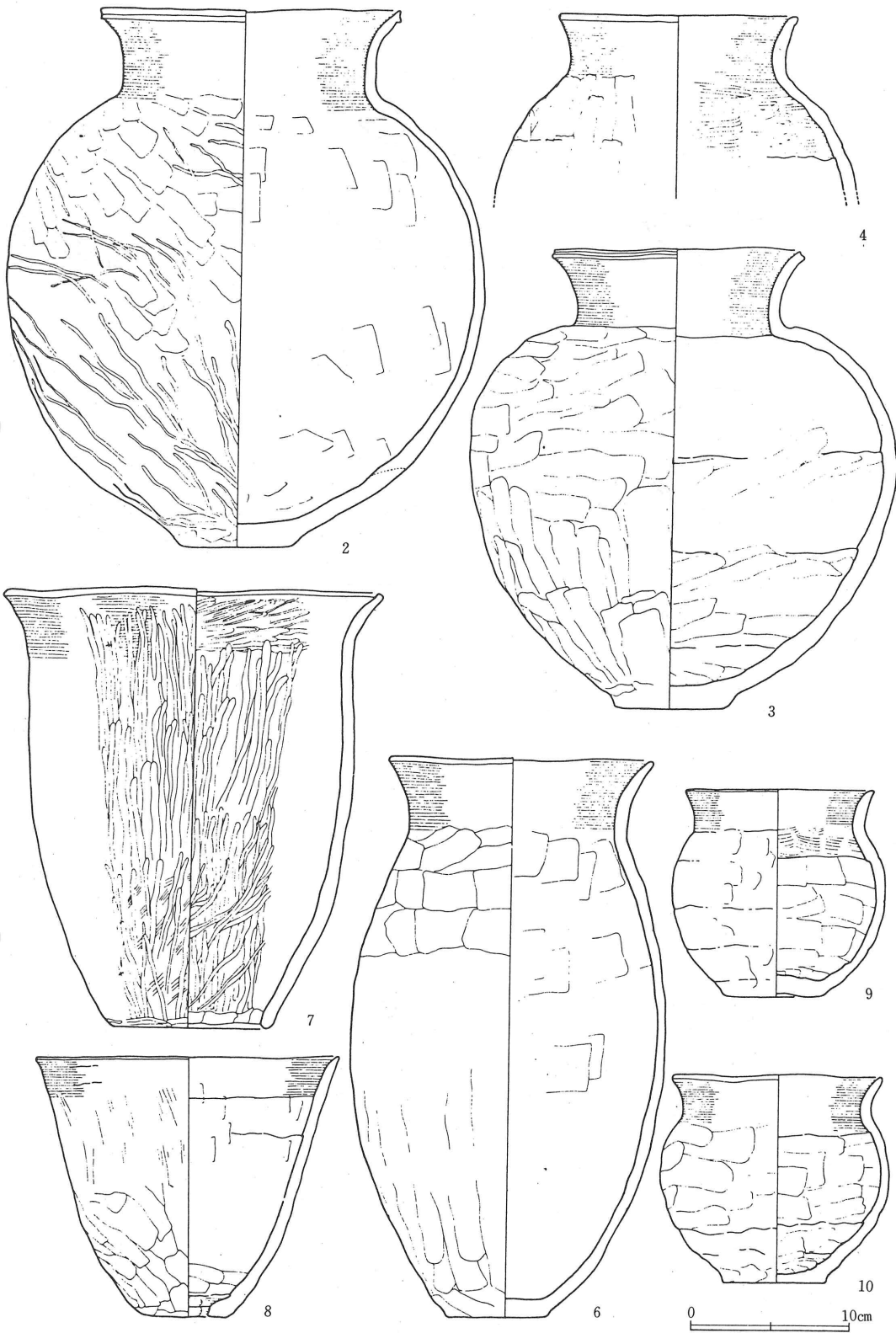
第89図 権現山北遺跡 2号住居跡出土土器実測図(2)



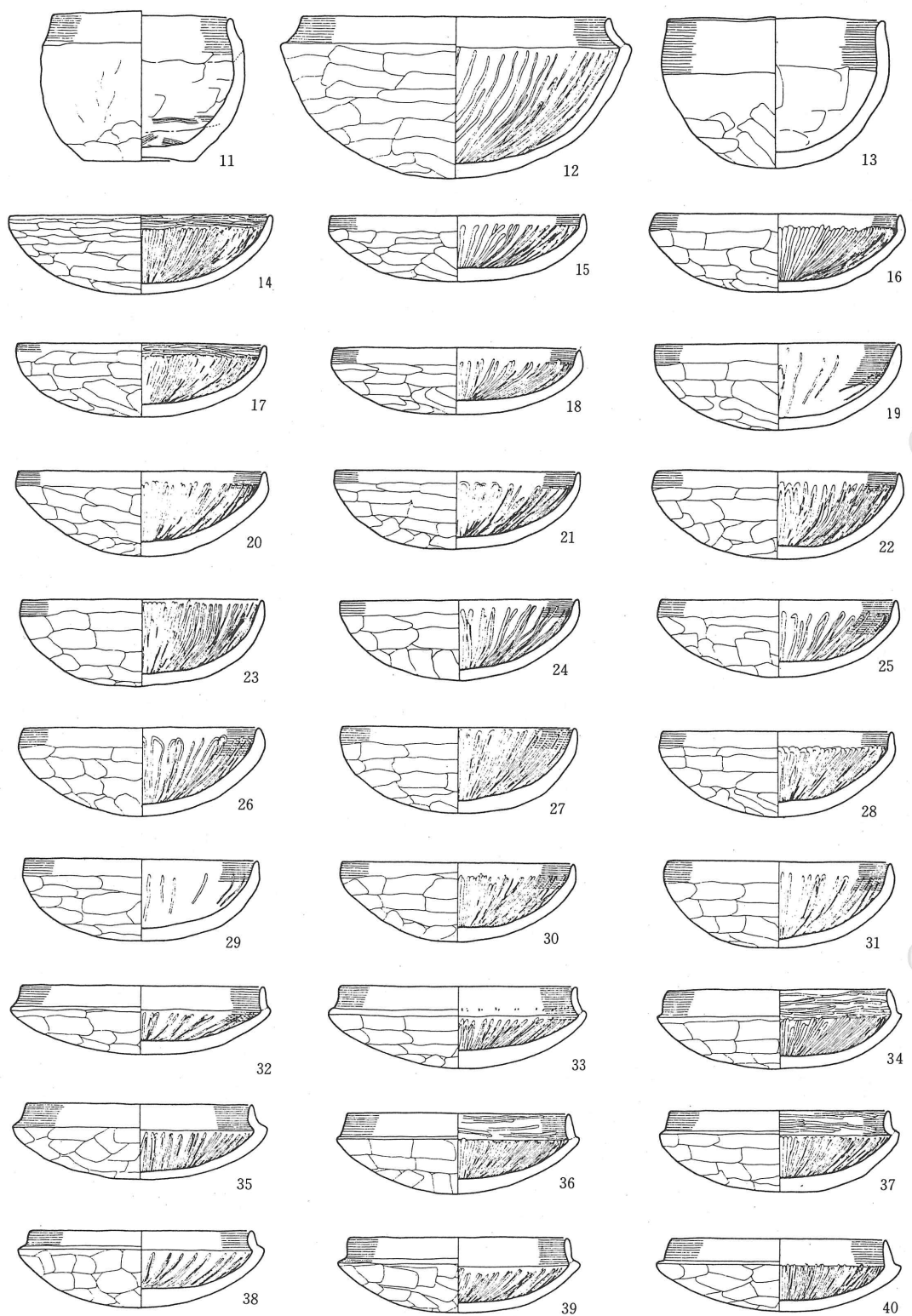
第90図 権現山北遺跡 3号住居跡出土土器実測図



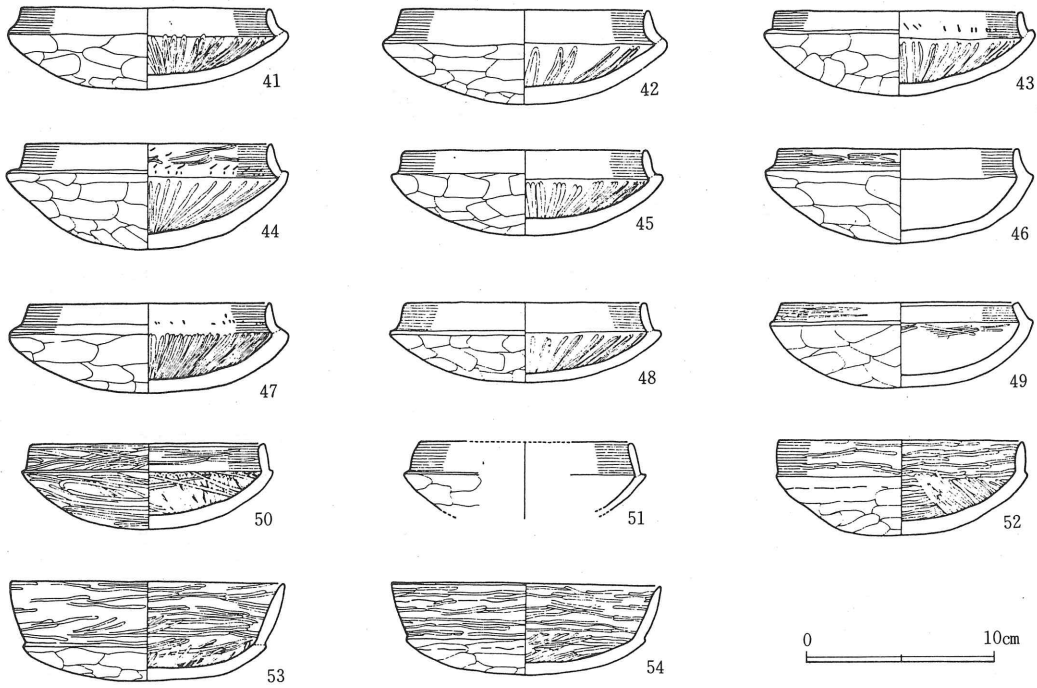
第91図 権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(1)



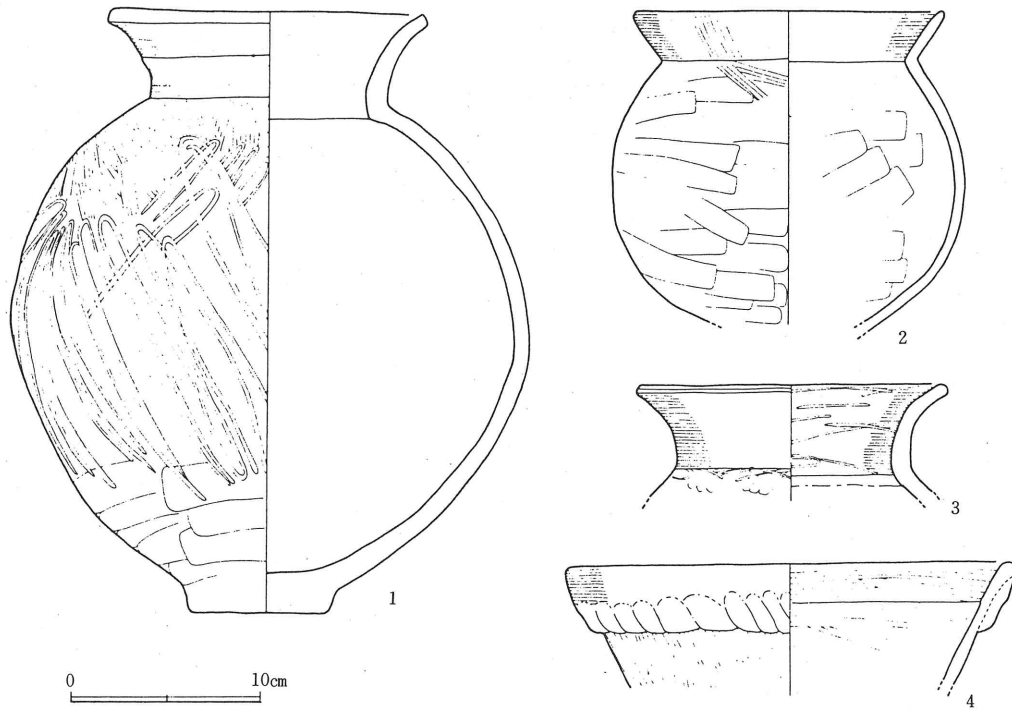
第92図 権現山北遺跡4号住居跡出土土器実測図(2)



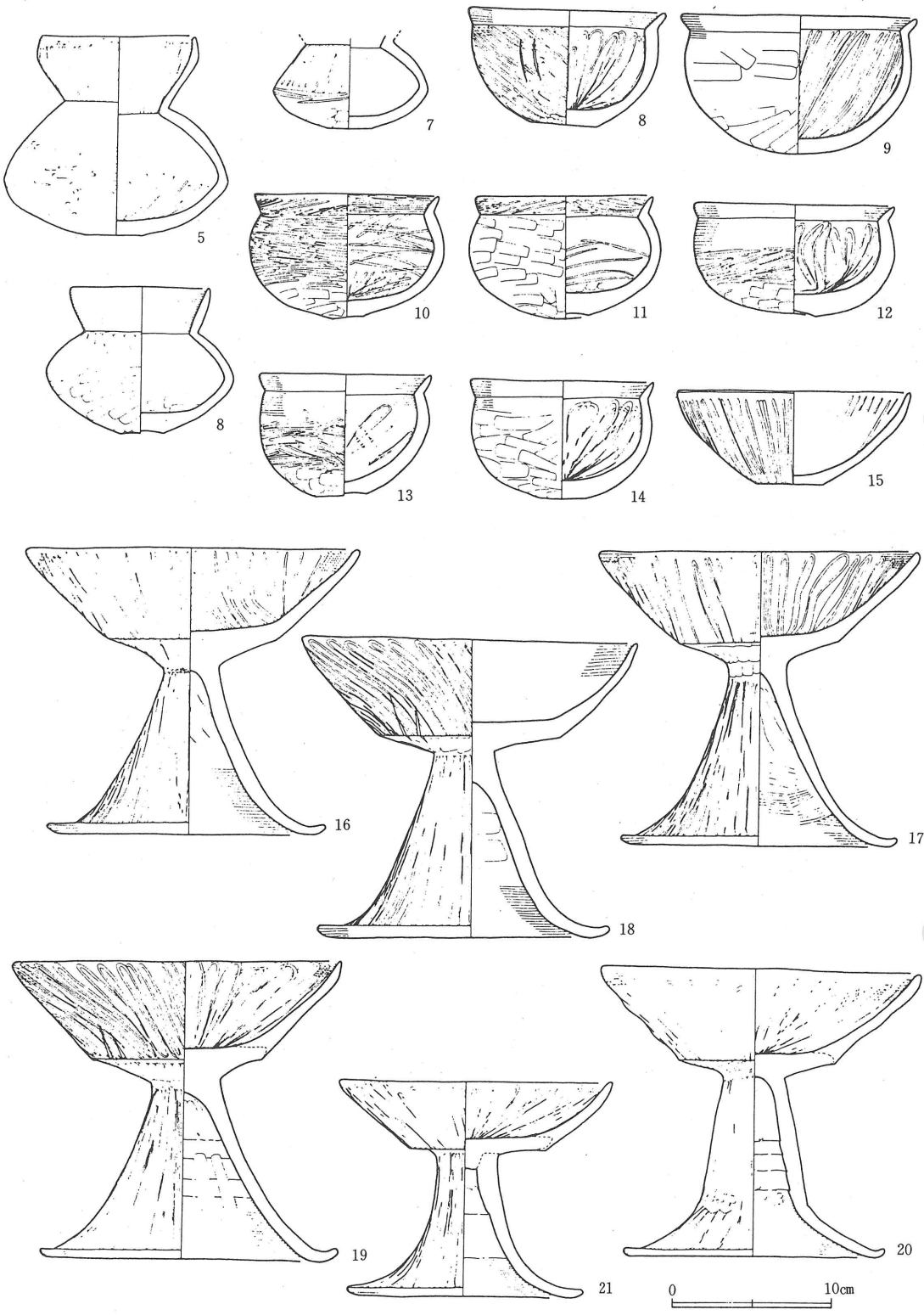
第93図 権現山北遺跡4号住居跡出土土器実測図(3)



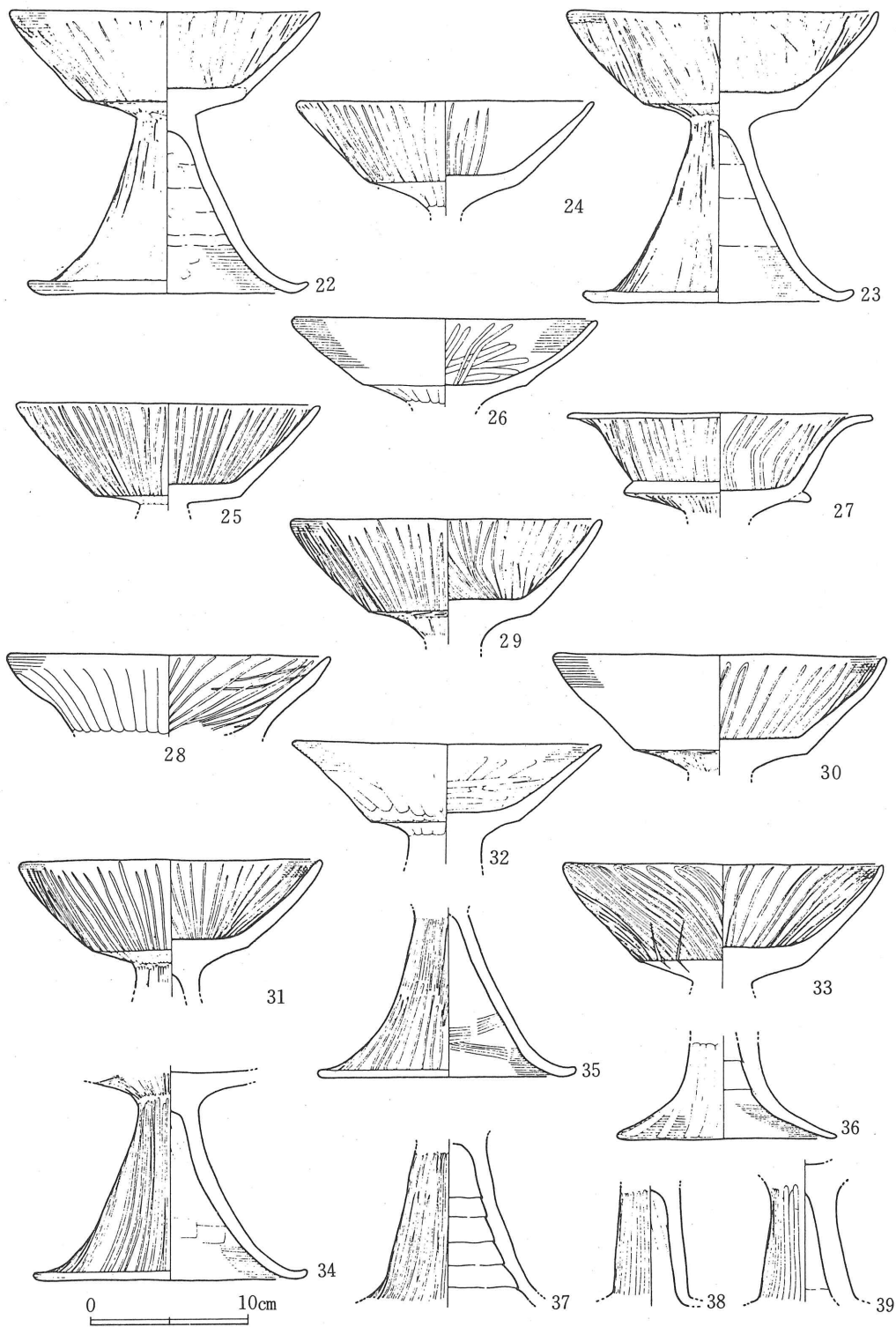
第94图 権現山北遺跡 4号住居跡出土土器実測図(4)



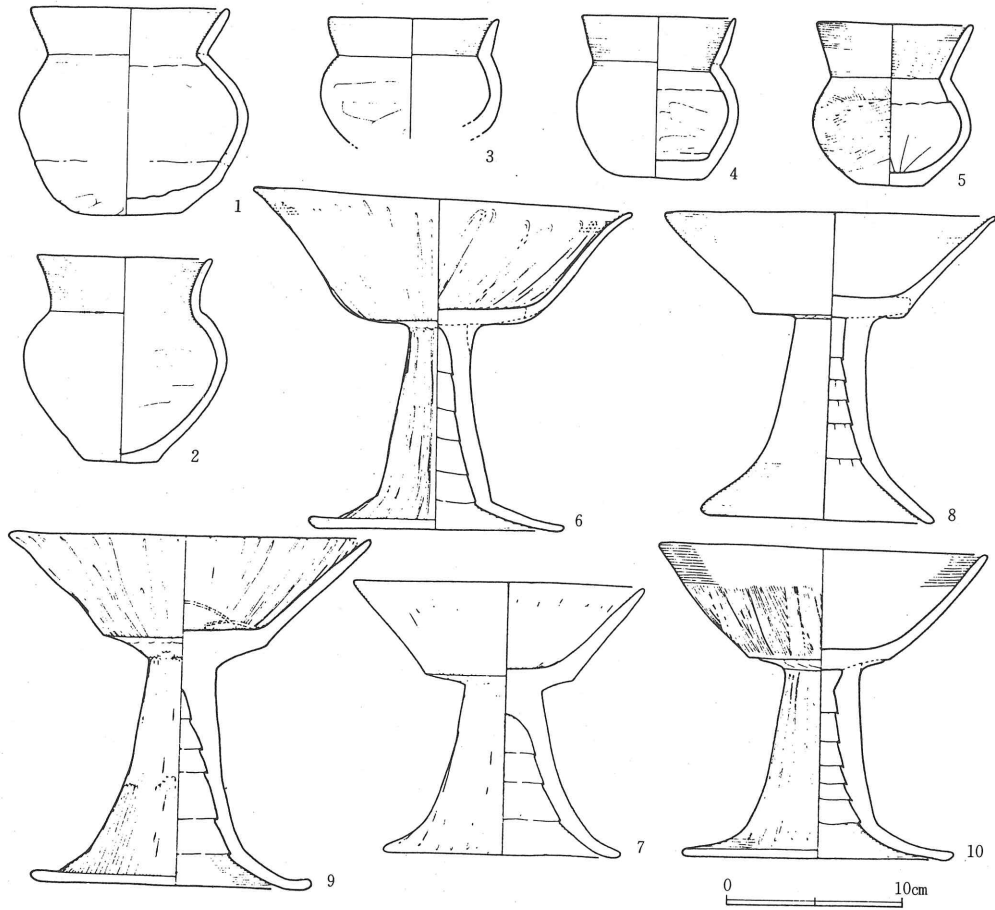
第95图 権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(1)



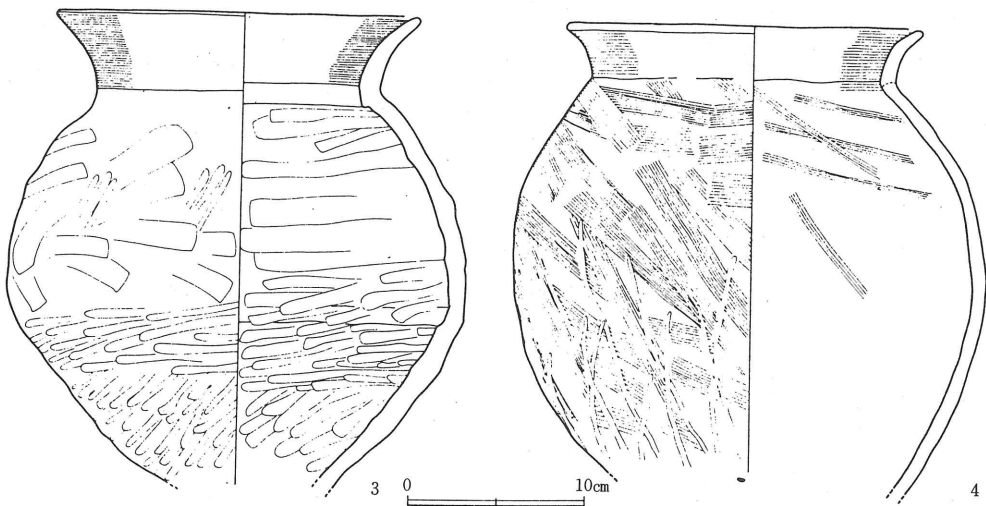
第96図 権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(2)



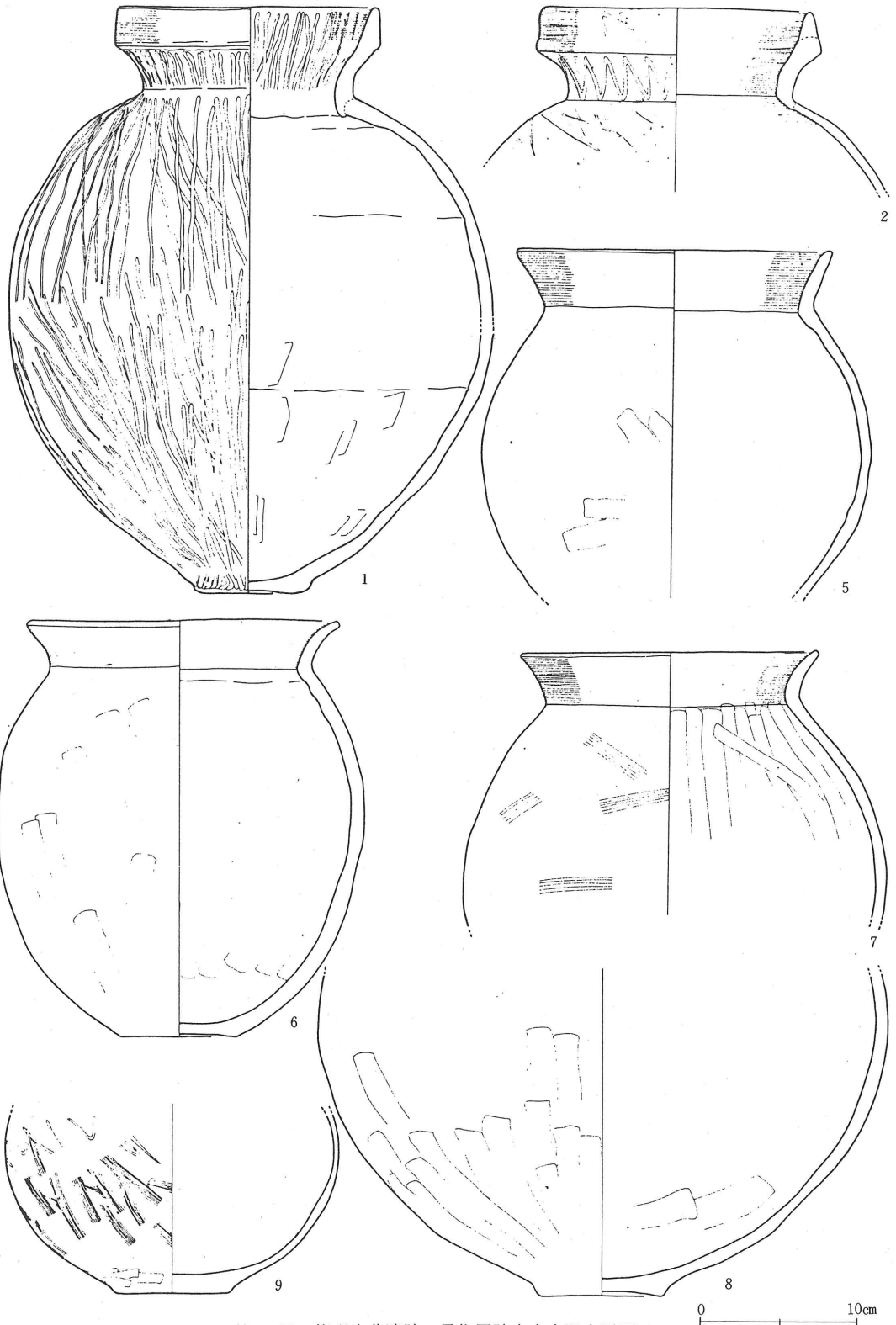
第97图 権現山北遺跡 5号住居跡出土土器実測図(3)



第98図 権現山北遺跡6号住居跡出土土器実測図

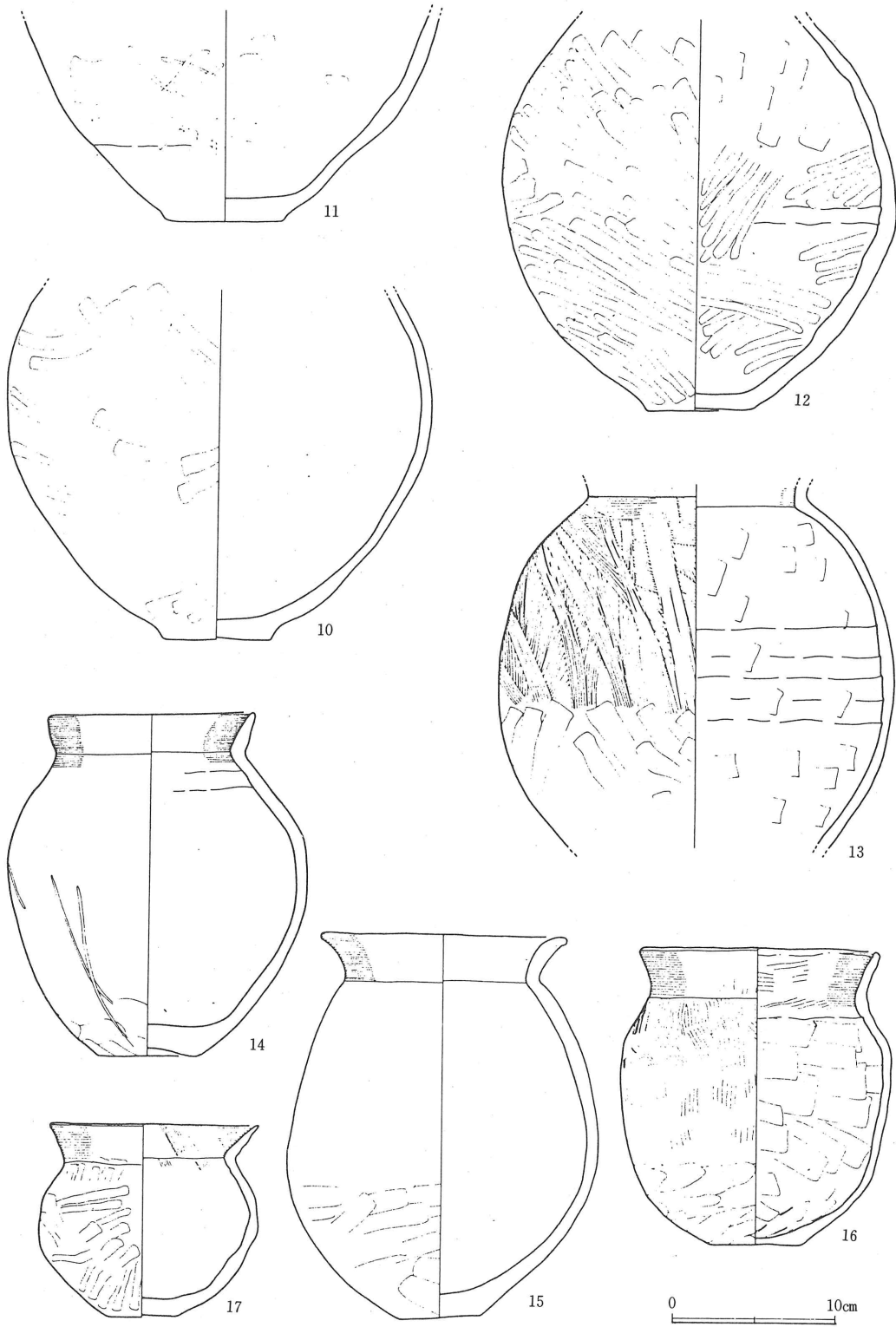


第99図 権現山北遺跡7号住居跡出土土器実測図(1)

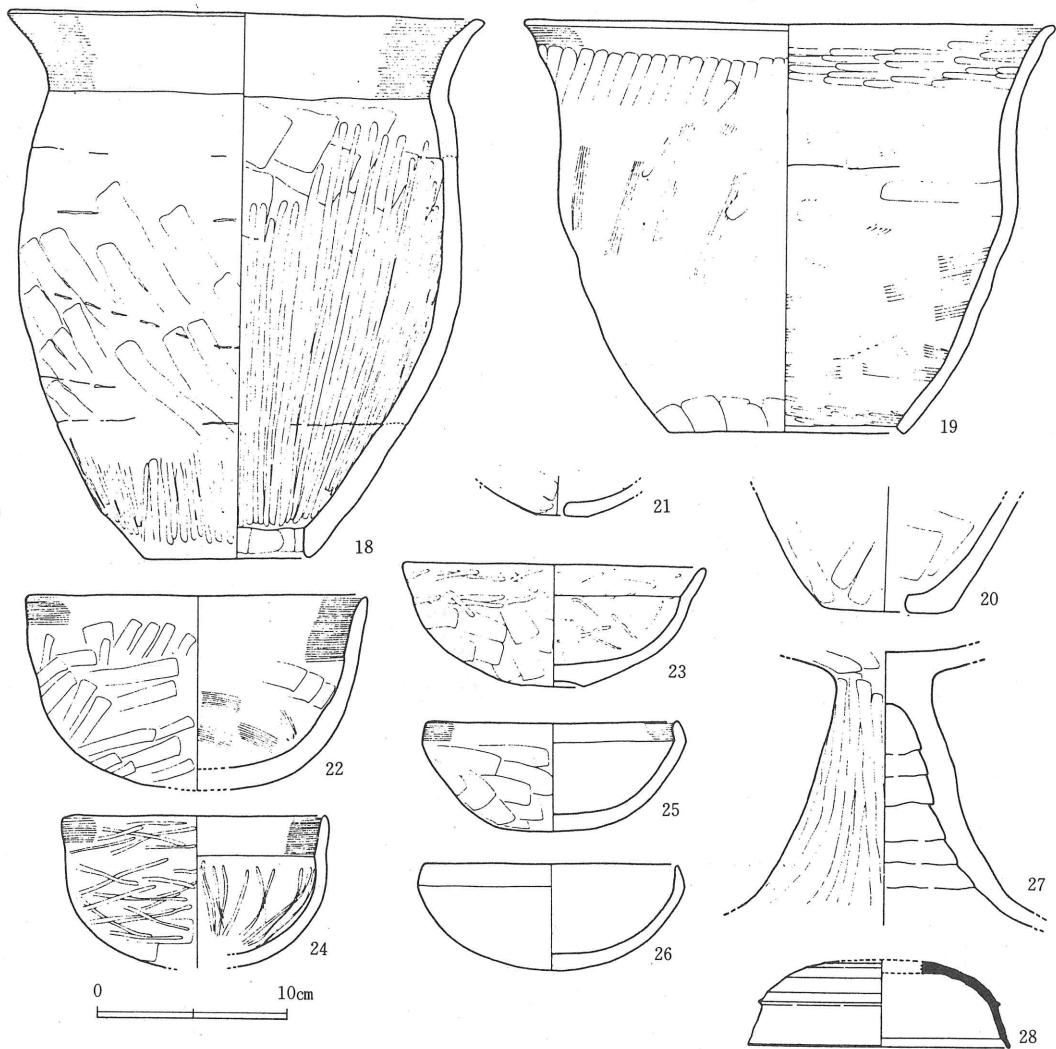


第100图 権現山北遺跡7号住居跡出土土器実測図(2)

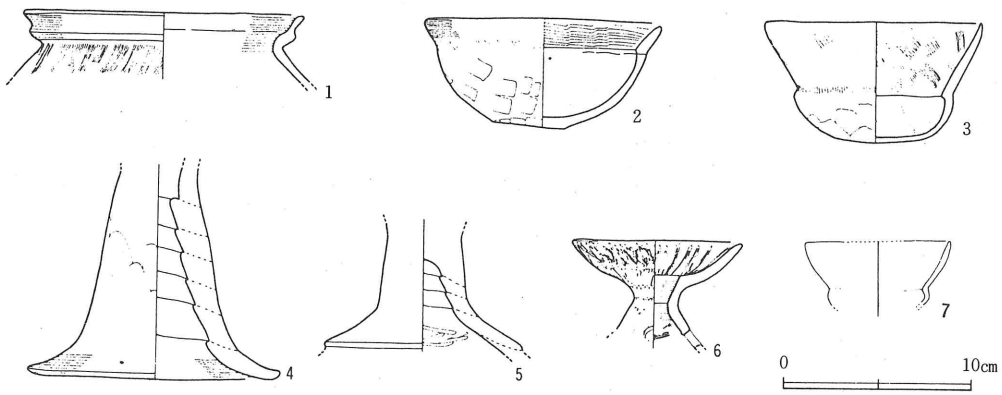
0 10cm



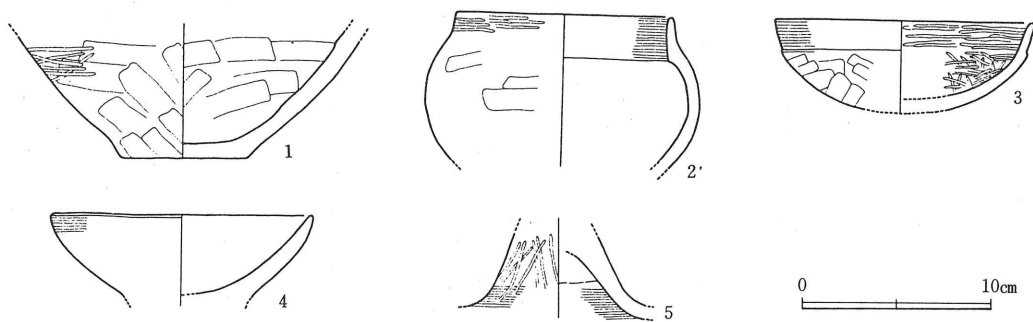
第101図 権現山北遺跡7号住居跡出土土器実測図(3)



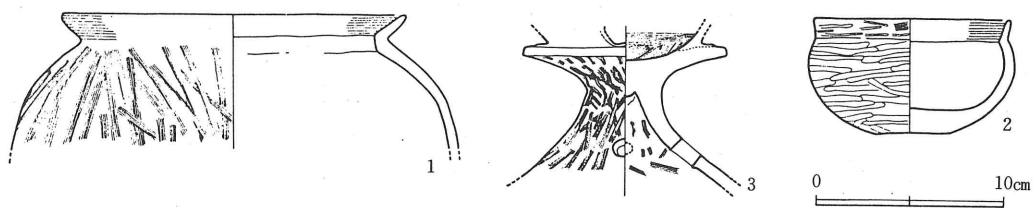
第102图 権現山北遺跡7号住居跡出土土器実測図(4)



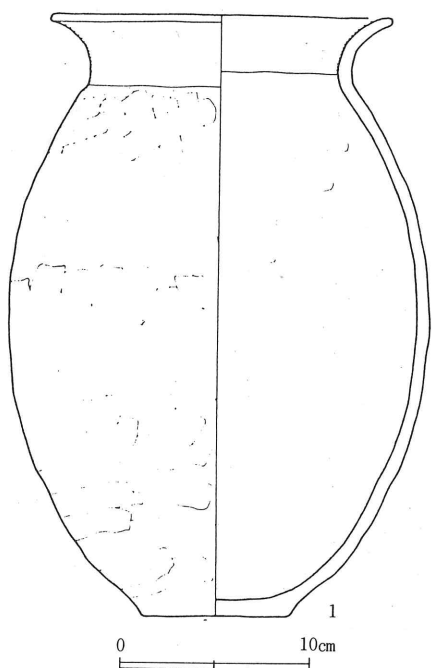
第103图 権現山北遺跡8号住居跡出土土器実測図



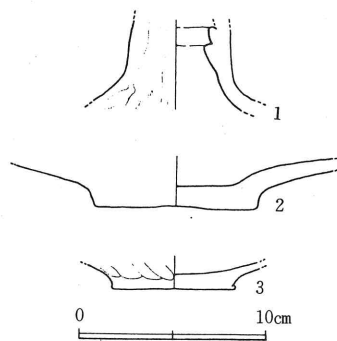
第104図 権現山北遺跡9号住居跡出土土器実測図



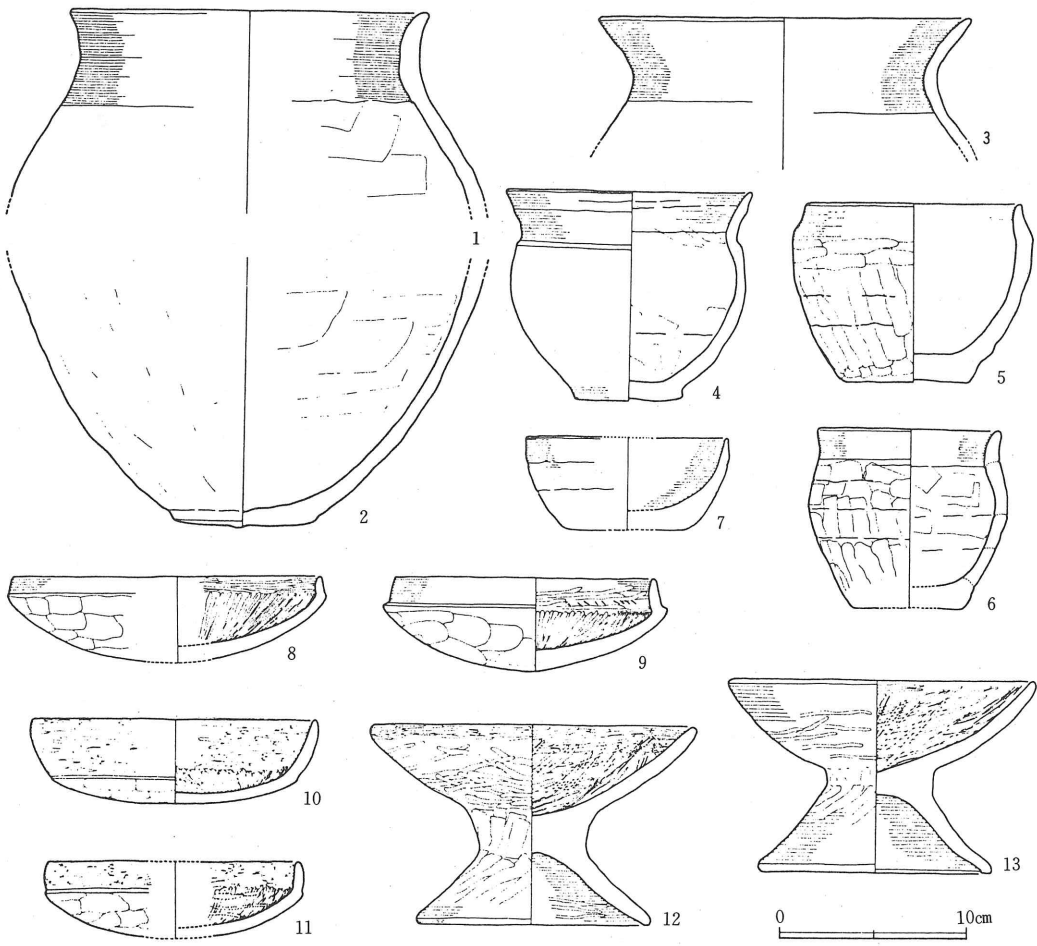
第105図 権現山北遺跡9号住居跡南P10出土土器実測図



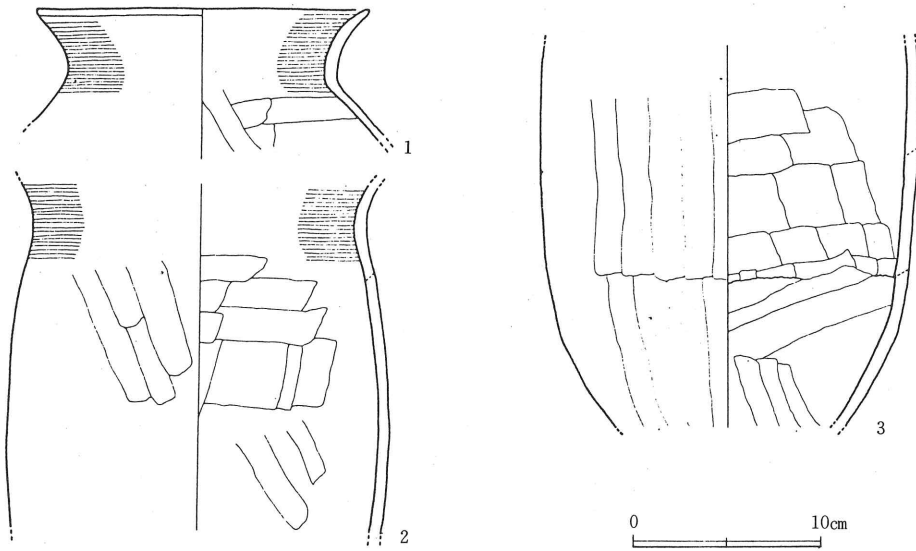
第106図 権現山北遺跡10号住居跡出土土器実測図



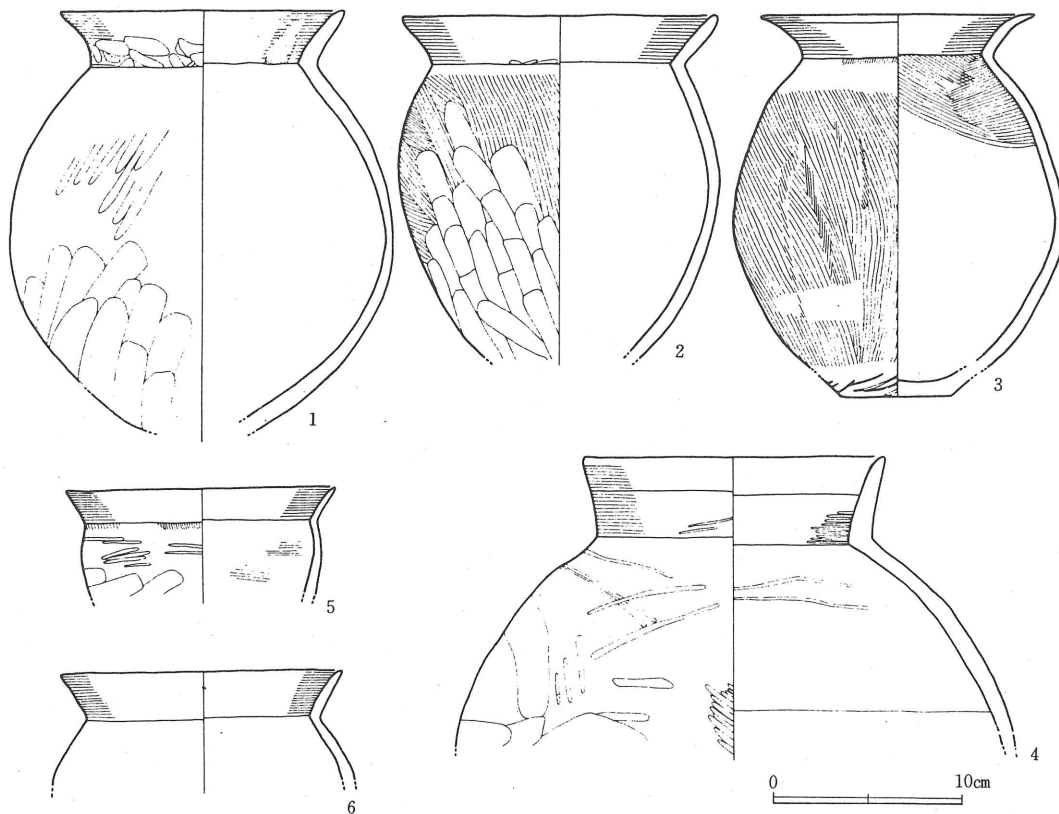
第107図 権現山北遺跡11号住居跡出土土器実測図



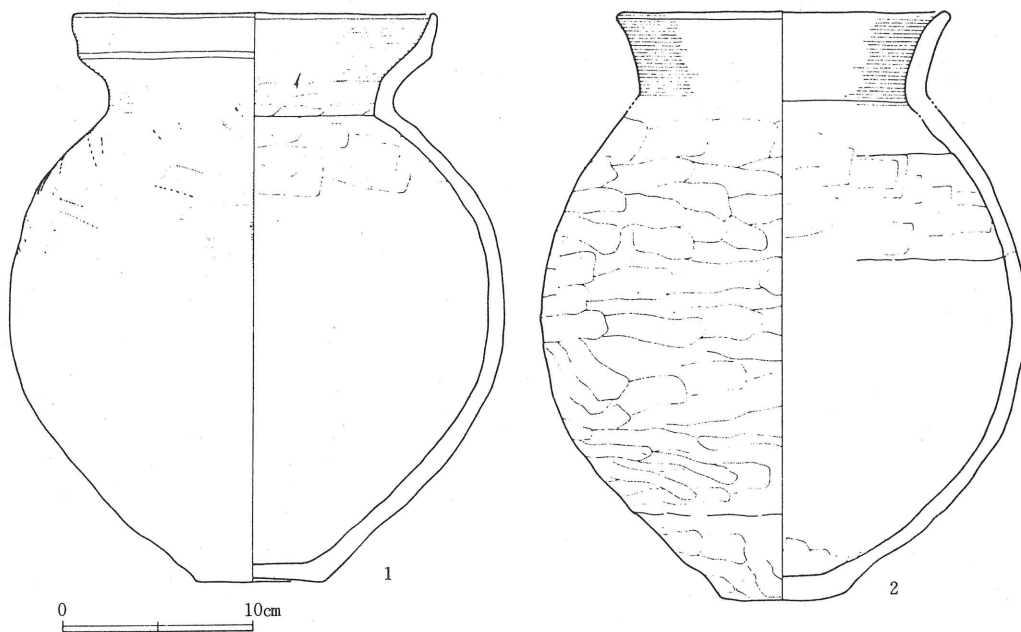
第108図 権現山北遺跡12号住居跡出土土器実測図



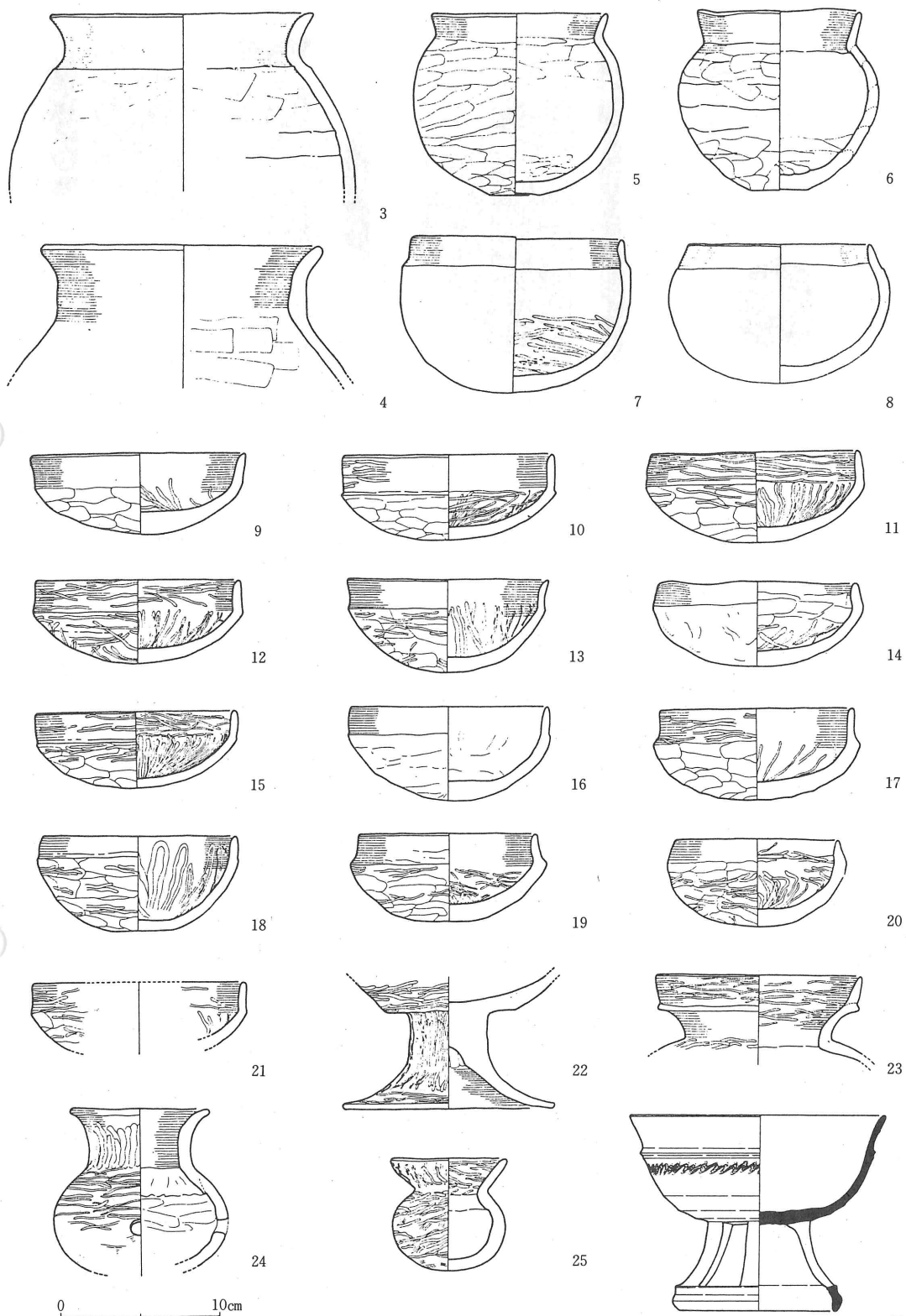
第109図 権現山北遺跡13号住居跡出土土器実測図



第110図 権現山北遺跡14号住居跡出土土器実測図

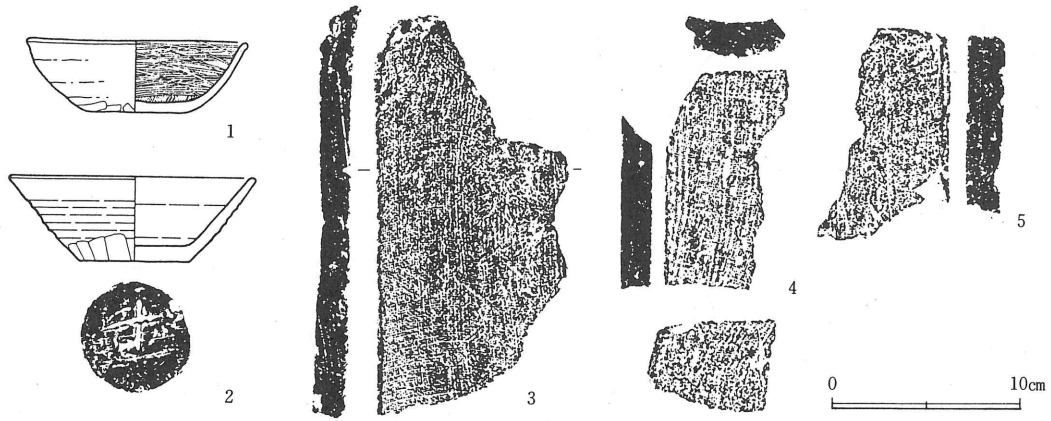


第111図 権現山北遺跡16号住居跡出土土器実測図(1)

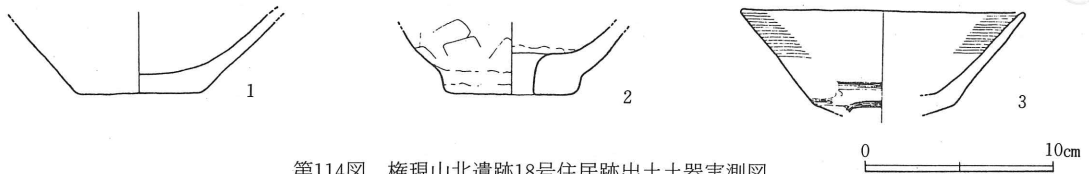


第112图 権現山北遺跡16号住居跡出土土器実測図(2)

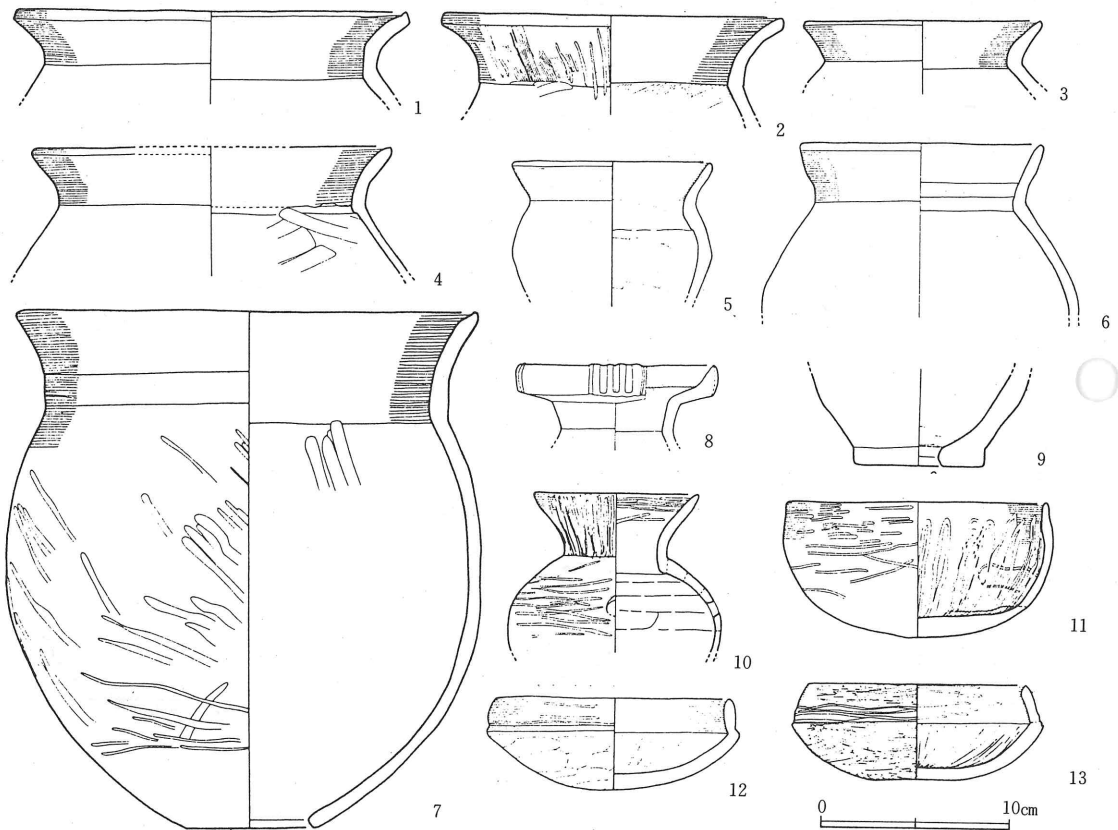
26



第113図 権現山北遺跡17号住居跡出土土器実測図・瓦拓影図

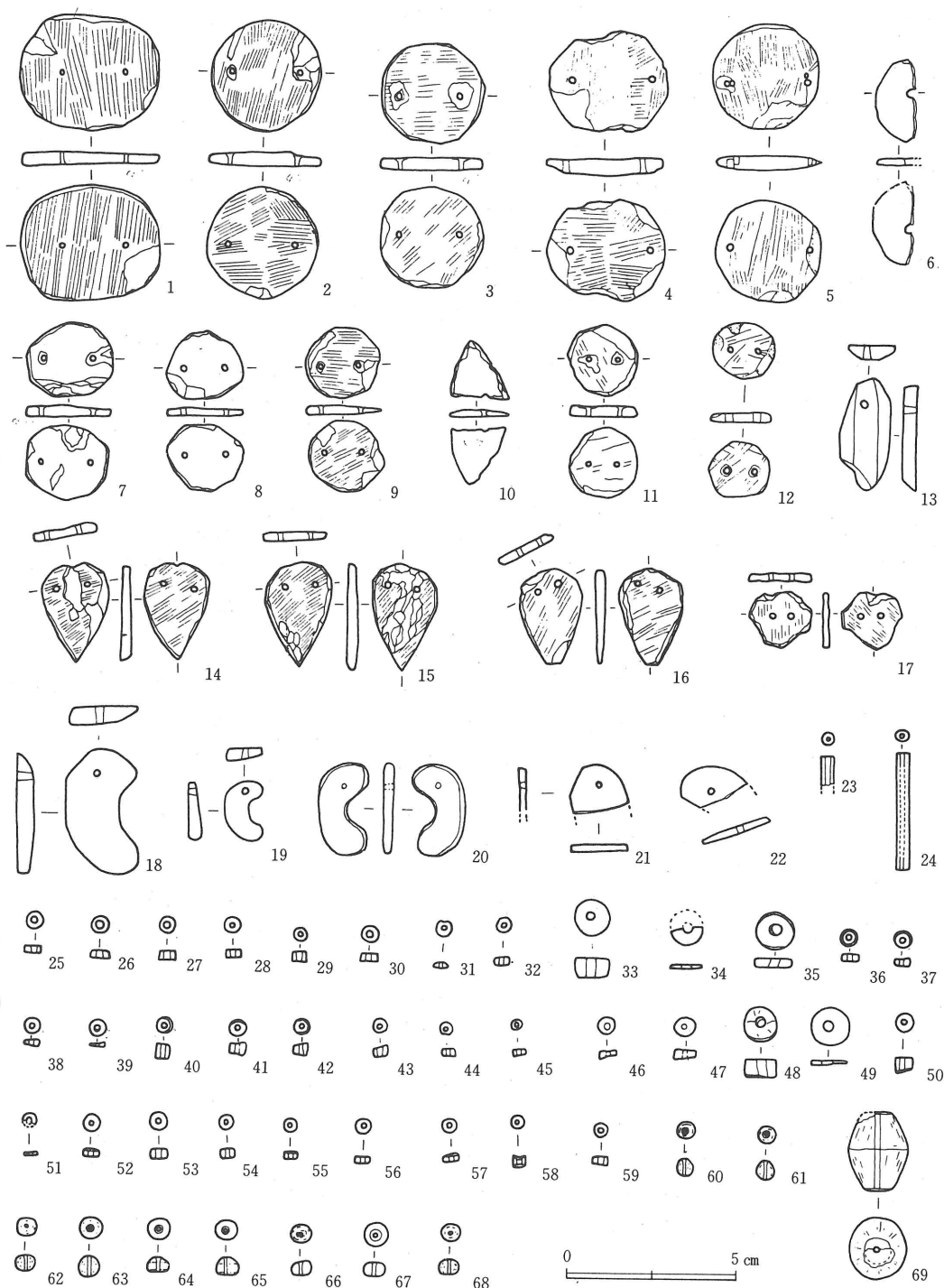


第114図 権現山北遺跡18号住居跡出土土器実測図



第115図 権現山北遺跡穴跡出土土器実測図

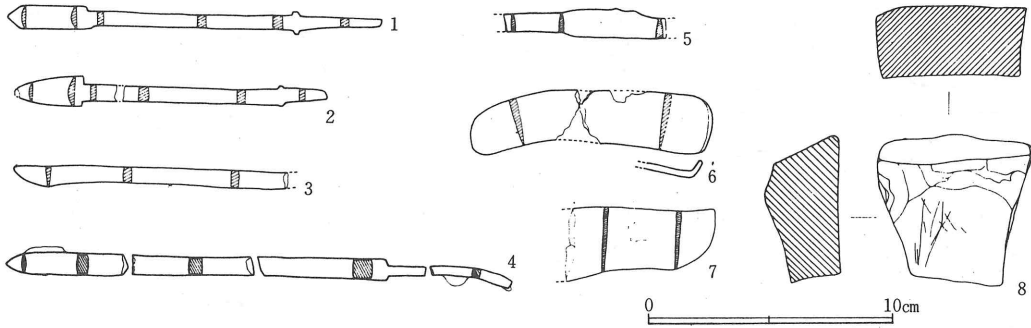
(1~4・10~11 15号穴跡, 5・6・8・12・13 17号穴跡, 7 8号穴跡, 9 3号穴跡)



第116図 権現山北遺跡出土石製模造品(1~59)・土玉(60~69)実測図

(13・18・19・25-30-1号住, 31・32-2号住, 33・34-3号住, 1-3・6-10・14-17・35-42-4号住,
21-5号住, 43-45-6号住, 20・46・47-11号住, 11・23・48・49・60-69-12号住, 4-17号住, 24・50-58
-18号住, 12-2号穴跡, 5-3号穴跡)

第4編 権現山北遺跡



第117図 権現山北遺跡出土鉄製品・砥石実測図

(1・2・6-4号住居跡, 3-10号住居跡, 4-18号住居跡
5-3号住居跡, 7-17号住居跡, 8-14号住居跡)

番号	器種	大きさ	器形の特徴	調整の特徴	胎土・焼成・色調
第87図 22	(壺)	(10.5) — —	口辺部は、やや角ばる。口辺外面に三条の凸線がめぐる。	ロクロ、ナデ。	胎土は精選され、焼成は良好。 青灰色。
第87図 23	甗	(9.5) — —	口辺部は内傾する平坦面となり、口辺外面に鋭い稜。	ロクロ、ナデ。	胎土は精選され、焼成は良好。 青灰色。
第87図 24・25	甗			内面はナデ。外面は細かい平行タタキ。	胎土に砂粒を含む。 焼成良好。 淡青灰色。
第102図 28	蓋	(14.0) (4.6)	口辺部は内傾し、縁部は丸い。 口辺外面に鋭い稜。	甲は外面回転ヘラ削り。 その他ロクロナデ。	胎土は精選され、焼成良好。 青灰色。

第14表 権現山北遺跡出土須恵器観察表(追加分)

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

第1章 愛宕塚古墳

1 墳丘と周湟

(1) 墳形

本墳は前方後方墳であることが確定した。確認された後方部各部位での墳裾の所見を総合すると、①後方部西側及び東側の墳裾が一直線上に並ぶこと。②G-B4に於いては南東隅を確認し、G-E4に於いても土橋こそあるものの、図上では後方部西側・南側の墳裾線がほぼ直角に交差し、南西隅を想定できること。以上より後方形であることがわかる。墳丘の規模は、全長約50、後方部長約29、後方幅25、前方部長20.6、前方部前端幅19.8、くびれ部幅8.9mである。主軸は後方部のそれと一致せず、西に2～3°振れている。

(2) 周湟

周湟外側の立ち上がりを確認したトレンチは数少ないが、おおよその形状を確認することができた。墳丘東側では、後方部墳裾から一定幅をもって直線と考えられ、前方部東側のT-11まで延びる。G-B0では幅3～4mの狭い周湟が確認されたが、隅を確認できず、T-11との間は明確にできなかった。発掘調査前の測量図を見ると、G-B0東の隅が東へ延びたあと北へ折れ曲がっており、根切り溝の影響を考慮したとしても、基準G-X0付近に隅があると推定される。一方、後方部西側からくびれ部ではT-12-13・9で確認したが、その南ではT-23ではなくT-21拡張部で確認した。したがって、西の周湟外側の立ち上がりは後方部からくびれ部付近までは直線と考えられるが、前方部にいたって急激にすぼまり後述する造出をかすめるようにしてG-F1南西にいたると考えられる。前方部前端に対応する周湟は、前方部南東隅のG-B0で幅の狭いものが確認されているが、南西隅寄りでは明確ではない。

周湟の掘削はローム層まで及んでいるが、部分的にはさらに下位の鹿沼軽石層まで及んでいる。後方部東側の周湟底は比較的フラットであるのに対して、西側は土橋があることとあいまって、凹凸が激しい。なお、墳裾はローム層を削り出して形成されていたが、掘削に用いた工具の痕であろうか、細かい凹凸が認められた。

(3) 土橋・造り出し

土橋は後方部西側に2本、西側くびれ部に1本の計3本が確認された。いずれも全容を知ることとはできないが、土橋1・2はほぼ平行して周湟外側にのび、墳丘立ち上がりに接合すると考えられる。土橋3は小規模なものであるが、その位置と土器の集中出土位置に近接することにより祀りに関係するものであろう。

造り出しは前方部西辺の中ほどにつくられている（第10図）。これも全容を知ることはできないが、南北8.5m・東西6.0mの方形と推定され、頂部は南北6m・東西4mの平坦面をなす。T-3で確認された壙穴は、人為的な埋積状況を示し、トレンチ断面の観察より、古墳築造と同時期と考えられた。造り出し上での位置は、中央ではなくやや西寄りに位置する。T-21・23・G-F1の所見より造り出し南西隅に土橋が取りつく状態が推定される。

(4) 墳丘の築造

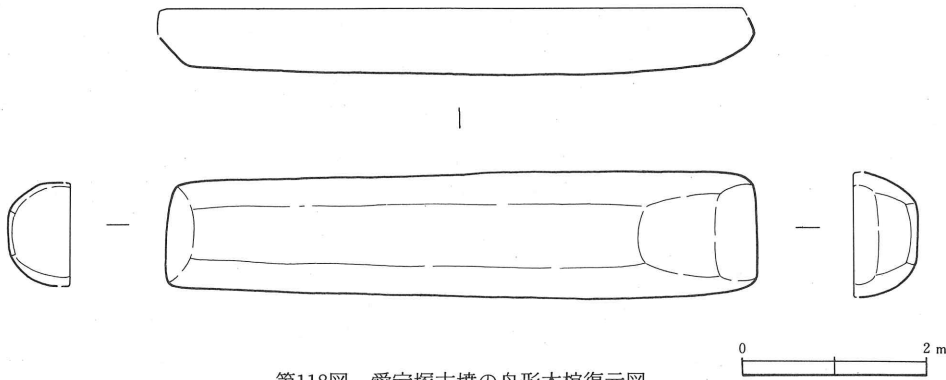
前述した5本のトレンチの所見から墳丘の築造順序をまとめると次のようになる。ただし、後方部と前方部は当初別々に造られていた。

- 1 地山をほぼ平坦にならす。後方部中央付近は、竪穴住居を埋めて標高84.4m前後の高さに、また前方部はやや高くなり84.6m前後に、それぞれ整地されている。
- 2 砂粒を含んだ黒色土を全面に敷き、つき固める。後方部では周縁を高くしている。その上面の高さは後方部中央付近では84.5m、前方部ではやや高く84.7mである。後方部ではその上に、茶褐色土を敷いている。
- 3 周囲に盛土し、つぎに中央部に盛土して、約86.0mの高さで平坦にし、つき固める。
- 4 中央部が高くなるように小墳丘をつくる。つぎに周囲から盛土し高さ約87.0mあたりからは、ローム塊を多量に含んだ茶褐色土と単純な暗茶褐色土を交互に盛土していく。ここで墳丘の盛土をほぼ完了する。
- 5 主体部の壙穴を掘る。
- 6 壙穴南外側から棺を壙穴内に移送
- 7 棺を安置する。
- 8 壙穴を埋める。
- 9 南側をのぞく墳丘全面に20cmほどの高さに盛土し、墳形を整える。

2 埋葬主体部

(1) 木棺の形式

愛宕塚古墳には、残された痕跡から全長6.3・幅1.3～1.6mの木棺が埋葬されていたと推定された。木棺痕跡内はロームブロックを多量に含んだもろい充填土であり、つき固められた棺床とは容易に識別ができ、さらには痕跡の表面に木質の腐朽したものと考えられる黒色の物質が認められ、木棺の痕跡を確実に明らかにすることができた。この痕跡から埋葬に使われた木棺はどのような形態であったか考えてみよう。横断面を見ると底面は若干の平坦面があるが、U字形を呈するところから組合式木棺あるいは箱形木棺とは考えられない。小口部分の縦断面は、北では底面から角度をもって斜めに直線的に立ち上がるが、南は底面から序々に立ち上がりながら丸くなった舟底状である。縦断面にあらわれた底面は、わずかに南へ下がり、その形状は平面図コンターにもよくあらわれている。平面的には南小口端が幅広であり、縦断面にあらわれた傾斜とも



第118図 愛宕塚古墳の舟形木棺復元図

考えあわせると、半裁した丸太を用いた木棺であることがわかる。以上の所見から判断すると、小口が垂直に切り落とされた形状とは明らかに異なるから、割竹形木棺とは違う形式の木棺であることがわかる。縦断面にあらわれた形状を重視して、舟形木棺であると考えたい。しかも棺底が若干の平坦面をなすから、小口部分のみの加工にとどまらず棺全体にある程度の整形が施されたようである。第118図に棺身のみであるが復元図を提示する。

さて、このような木棺は本墳だけでなく東国の他の前期古墳にもつかわれており、宮城県遠見塚古墳^{註1}・茨城県狐塚古墳^{註2}・同県上出島2号墳^{註3}・千葉県新皇塚古墳^{註4}などが類例としてあげられる(第119図)。以上の木棺は従来割竹形木棺として報告されていたものであるが、U字形の横断面のみが強調され、縦断面にあらわれた棺端の形状は等閑視されてきた。一方、最近の研究で、木棺の形式は被葬者の地位の表れであり、古墳分布の拡大に伴い割竹形木棺を頂点とする首長層の身分秩序が形成されていたとする考えが提示された^{註5}。この考えに従えば、前述の木棺形状の差異は無視できないと考え、あえて別形式の舟形木棺と想定した。

(2) 被覆粘土について

木棺痕跡覆土の除去作業中に粘土を所々で確認できたが、厚さ2～3mm程度と非常に薄いうえ、部分的にしか存在せず、残念ながら面的広がりをつかむことはできなかった。断面図にあらわれた粘土は、縦断面北小口では木棺の腐朽による陥没で棺痕跡覆土に流れ込んだ状況であり、南小口では木棺痕跡面に密着した状況で確認され、先に述べた小口の形状を推測するてがかりとなっている。横断面ではやはり棺痕跡覆土に流れ込んだ状況と木棺の痕跡面に密着した状況が観察される。粘土の確認状況から判断すれば、棺床・小口などの限定された部分のみに用いられたとは考えられず、ごく薄くではあるが木棺の全面に被覆されていたと考えられる。しかし、典型的な粘土層である茨城県佐自塚古墳^{註6}・同鏡塚古墳^{註7}・千葉県新皇塚古墳と比較すれば本墳の粘土は木棺を被覆する層としての粘土とは見做しがたい。本墳の埋葬主体部は、粘土層とは断じ難く木棺直葬の範疇で考えるべきものであろう。

(3) 壙穴

壙穴壁体の横断面に見られる層序は壙穴中央に向かって立ち上がっており、このことから一旦

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

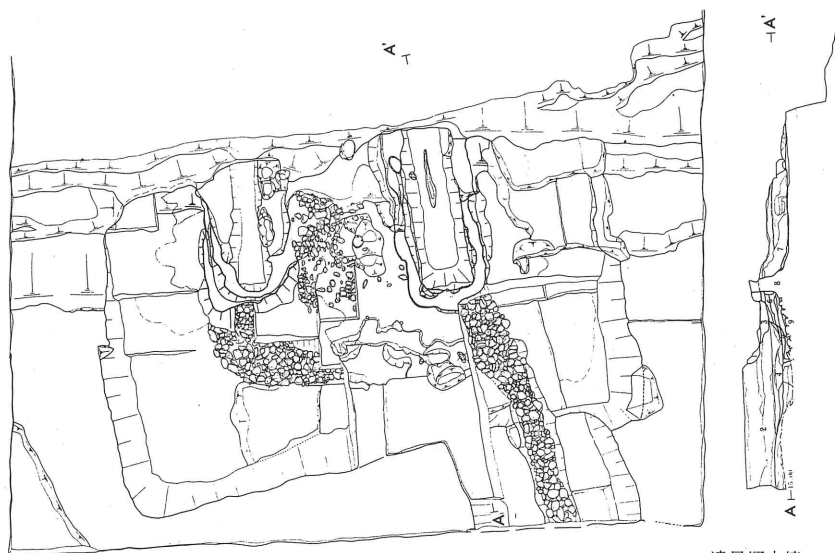
No.	古墳名	所在地	墳丘	埋葬施設	木棺	頭位	墓壇	備考	文献
1	遠見塚	宮城県仙台市南小泉	前方後円 110	西 粘土槨 1-2.0	割竹形 /-0.9	N-27°-E	方形 /-11.2	壇穴1口に 槨2口, 東 西槨とも排 水溝付設	34
				東 粘土槨 /-1.8	舟形 /-1.2	N-15°-E			
2	本屋敷1号	福島県浪江町北幾世橋	前方後方 36.5	直葬一棺側に薄く粘 土被覆小口に粘土塊	割竹形 7.4-0.9	N-94°-E	隅円方形 8.5-2.4	前方頂部に 箱式石棺1 基	31
3	狐塚	茨城県西茨城郡岩瀬町岩瀬	前方後方 36	粘土床一鹿沼土を使用	舟形 5.0-1.0	N-5°-W	不明		8
4	佐自塚	茨城県新治郡八郷町佐久	前方後円 58	粘土槨 8.4-4.2	割竹形 6.2-1.0	N-24°-E	不明	特殊器台	14
5	丸山1号	茨城県新治郡八郷町柿岡	前方後方 55	直葬一小口粘土塊	不明	N-34°-W	不明		3
6	桜塚	茨城県つくば市水守	前方後方 30	粘土槨 9.2-3.2	割竹形 6.7-0.8	N-15°-E	方形		25
7	山木	茨城県つくば市北条	前方後円 48	粘土槨 5.5-1.2	箱形 3.2-1.5	N-43°-E	不明		17
8	勅使塚	茨城県行方郡玉造町沖洲	前方後方 64	直葬一小口粘土	?	N-4°-W	不明		7
9	原1号	茨城県稲敷郡桜川村浮島	前方後方 29	直葬 4.9-2.0	箱形 3.7-1.2	N-82°-E	なし		18
10	上出島2号	茨城県岩井市上出島	前方後円 56	粘土槨 10.0-3.5	舟形 7.4-1.0	N-48°-E	不明		16
11	駒形大塚	栃木県小川町	前方後方 48	直葬一小口木炭 5.4-1.6	箱形 /-1	N-90°-W	不明		33
12	那須八幡塚	栃木県小川町	前方後方 48	直葬 6.6-1	箱形? 4.8-1	N-83°-W	不明		4
13	山崎1号	栃木県真岡市	前方後方 48	粘土槨一鹿沼土を使用 7.3-2.9	割竹形 3.1-1.1	N-20°-E	方形 7.1-3.2		30
14	茂原愛宕塚	栃木県宇都宮市茂原町	前方後方 50	直葬一薄い粘土被覆 6.2-1.4	舟形 6.2-1.4	N-2°-E	方形 8.8-3.8	壇穴南壁なし	本書
15	茂原大日塚	栃木県宇都宮市茂原町	前方後方 35.8	直葬 3.6-2.4	箱形	S-66°-W	不整形 3.6-2.4		本書
16	山王寺大塚塚	栃木県下都賀郡藤岡町	前方後方 90	粘土槨一鹿沼土を使用	箱形 /-1.0	N-65°-E	なし		19
17	朝倉2号墳	群馬県前橋市朝倉町	円 23	粘土槨 5.7-0.9	割竹形 4.9-0.5	N-72°-E	不明	葺石	10
18	前橋天神山	群馬県前橋市広瀬町	前方後円 126	粘土槨 8.8-3.3	箱形? 7.8-1.	N-45°-E	方形2段 22以上-1	葺石	9 24
19	北作1号	千葉県東葛飾郡沼南町片山	円 17	粘土床? 3.6-1.1	箱形? 2.6-0.8	N-90°-E	不明		5
20	飯合作1号	千葉県佐倉市下志津	前方後方 25	直葬 4.1-1.9	組合式 箱式 3.2-0.9	N-58°-E	なし	木口板痕	20
21	新皇塚	千葉県市原市菊間	前方後方 推60	南 粘土槨 11.8-1	舟形 9.8-0.9	N-88°-E	なし	2槨は重複 し南槨が先 行 掘込み棺床	15
				北 粘土槨 14.0-2.7	舟形 10.7-0.8	N-88°-E			
22	大底9号	千葉県千葉市大底	方 16	直葬 1.6-0.7	箱形 /-1	N-62°-E	なし		15

第15表 東国における前期古墳の埋葬主体部(1)

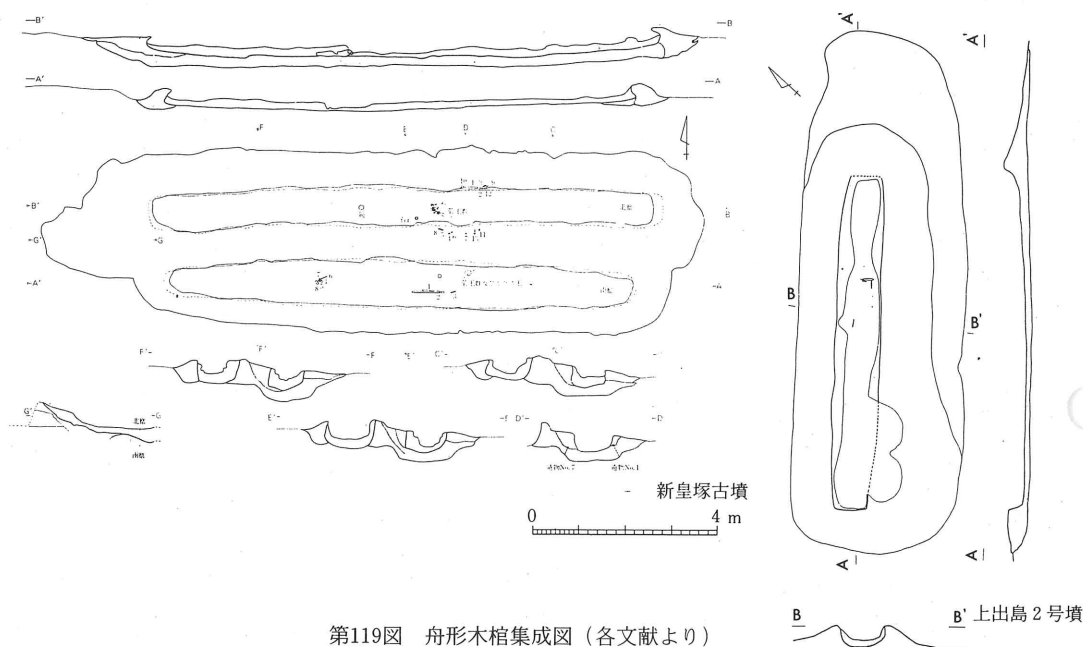
No.	古墳名	所在地	墳丘	埋葬施設	木棺	頭位	墓壇	備考	文献	
23	根田6号	千葉県市原市惣社	円 31	第1 主体	直葬 3.4-1	箱形 /-1	N-47°-E	なし	2施設の新旧は不明	32
				第2 主体	直葬 5-1	箱形 /-1	S-57°-E	なし		
24	神門3号	千葉県市原市惣社	前方後円 47.5	直葬 4.1-1.3	組合式 箱形 3.8-1.0	N-59°-E	なし	側板の内側に小口板	35	
25	鳥越	千葉県木更津市太田	前方後方 25	第1 主体	直葬 2.8-1.9	箱形 2.8-1.0	N-58°-E	不明	2施設の層位的新旧は不明 、第1主体は棺側粘土充填	22
				第2 主体	直葬 3.8-1.1	箱形 /-1	N-32°-E	不明		23
26	手古塚	千葉県木更津市小浜	前方後円 60	粘土槨 9.2-1.8	割竹形? /-1	S-61°-W	なし	排水溝あり	12	
27	能満寺	千葉県長生郡南町芝原長	前方後円 74	木炭槨 7.5-2.0	? 3.0-0.5	S-73°-E	不明		2	
29	山谷	新潟県西蒲原郡巻町福井	前方後方 38.2	直葬 4.8-1.4	割竹形?	S-80°-E	方形 7.3-6.0		36	
30	三王山11号	新潟県三条市上保内	造出付円墳 23.0	直葬 3.2-0.9	組合式 箱形 3.3-0.8	N-85°-W	方形2段 4.8-3.8		37	
31	森將軍塚	長野県更埴市森	前方後円 100	竪穴式石槨 11.1-5.8	箱形? 1.5-7.1	N-60°-E	方形2段 11.5-6.2	埴輪列、葺石、後円3段・前方1段築成	11	
									28	
32	弘法山	松本市出川丸山	前方後方 63	礫槨 8.8-5.5	? (報告者は棺なしと推定)	N-52°-E	方形 9-6	葺石、天井石なし	21	
33	三池平	静岡県清水市	前方後円 70	竪穴式石槨 5.6-3.7	割貫式石棺 2.4-0.8	N-36°-E	隅円方形 5.5-3.9	槨基底は礫敷、石棺は礫敷き前に据え付け、排水溝	6	
34	松林山	静岡県	前方後円 116.4	竪穴式石槨 /-1	木棺(形式不明) /-1	N-1°-E	不明	棺の残片遺存、圧力・熱を受ける	1	
35	新豊院山D-2号	静岡県磐田市向笠	前方後円 34.3	礫槨 5.7-2.7	箱形?	N-6°-W	隅円方形 6.6-5.0	槨は礫と粘土の混合、天井石なし	26	

第16表 東国における前期古墳の埋葬主体部(2)

後方部墳丘を積み上げた後、再び頂部を掘削して壇穴を形成したことがわかる。壇穴の基礎となるべき後方頂部は鹿沼土主体の黄色土と暗褐色土を交互に積み重ねて築造されており、比較的薄い層を丁寧に積み上げたようすがうかがえる。この互層は第27トレンチ断面にあらわれた第3・4層と同一であることが判明しており、墳丘築造の第3段目にあたる。この第3段目の築造には積み方もさることながら、鹿沼土を多量に用いた点に特別の配慮があったように思える。^{註8}最近調査された本県三王山南塚2号墳は、前方部が撥形に開く前方後方墳である。残念ながら埋葬主体部は旧陸軍の弾薬格納用壕で完全に破壊されていたが、後方頂部は鹿沼土を多量に積んで構築さ



遠見塚古墳



第119図 舟形木棺集成図（各文献より）

れていた。本県山王寺大樹塚古墳^{註10}・同山崎1号墳^{註11}・茨城県狐塚古墳では、鹿沼土で槨をつくっていた。栃木・茨城両県は赤城山の噴出による鹿沼土の分布域であり、この土が埋葬主体部に用いられていることは地方色と考えてよい。鹿沼土の使用がどのような意味を持ったのかは不明であるが、何らかの意図があったことを考えるべきであろう。

壙穴の平面形は方形を意図して構築されたのであろうが、南壁が存在しない特異なもので、この方向より納棺および埋土したものと考えられる。管見では確実な類例はみあたらず、わずかに千葉県水神山古墳^{註12}がその可能性を有するのみである。

(4) 棺床の掘込みについて

木棺の据え付けは、厚さ20cmほどローム土を壙穴内に埋め戻して棺床としている。この場合問題となるのは、埋め戻し土を掘込んで棺床とするのか、木棺を据え付けた後埋め戻すかである。調査ではこの点を明らかにできなかったが、おそらく前者であろうと推定される。木棺を安定させる礫・粘土などは確認されていない。

東国の前期古墳において、割竹形・舟形木棺を用いた埋葬主体部は棺床を掘込んだものが多く、これは壙穴の有無、粘土槨・木棺直葬などの型式を問わない。畿内の古式とされる竪穴系埋葬主体部では、①壙底に直接粘土床をつくる、②壙底に礫を敷き粘土床をつくる、③壙底を掘込んで粘土床をつくるという3型式が考えられている。この中で、③が最も新しく出現するとされており^{註13}、東国前期古墳の掘込み棺床はこの影響下にあると考えられ、時期もおおのずと押さえられよう。しかし、岩崎卓也氏が指摘するように、東国においても割竹形・舟形木棺を用いた埋葬の出現以前に丈の短い木棺が採用されるのは確かであり、決して畿内と比べ古墳の出現が大きく遅れるものではあるまい。

(註)

- 1 結城慎一・山口宏 1987『史跡遠見塚古墳保存修理事業報告書』仙台市教育委員会
- 2 西宮一男 1969『常陸狐塚』岩瀬町教育委員会
- 3 大森信英他 1975『上出島古墳群』岩井市教育委員会
- 4 齋木勝・種田齋吾 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会
- 5 都出比呂志 1986『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学国史学研究室
- 6 斉藤忠 1974『佐自塚古墳』『茨城県資料』考古資料編 古墳時代
- 7 大場磐雄・佐野大和 1956『常陸鏡塚』(1982 復刻版 常陸書房)
- 8 周湟の掘削は、後方部西側では鹿沼軽石層まで及んでおり、この排土を用いたと考えられる。
- 9 山ノ井清人・水沼良浩氏のご好意により実見。
- 10 前沢輝政 1977『山王寺大塚塚古墳』早稲田大学出版部
- 11 山ノ井清人 1984『山崎第1号墳』『真岡市史』第1巻 考古資料編
- 12 甘粕健他『我孫子古墳群』東京大学考古学研究室
- 13 都出比呂志 1983『埴輪編年と前期古墳の新古』『王陵の比較研究』京都大学考古学研究室
例として、大阪府弁天山C1号墳・奈良県メスリ山古墳主室・岡山県金蔵山古墳中央石槨等があげられる。
- 14 岩崎卓也 1989『古墳分布の拡大』『古代を考える 古墳』吉川弘文館
下野においては、駒形大塚古墳・茂原大日塚古墳があげられる。

(参考文献)

- 1 後藤守一他 1939『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』
- 2 大塚初重 1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第1巻第3号
- 3 後藤守一・大塚初重 1957『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会
- 4 三木文雄他 1957『那須八幡塚古墳』小川町古代文化協会
- 5 滝口宏・金子浩昌他 1961『印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(付編)』千葉県教育委員会
- 6 内藤晃・大塚初重他 1961『三池平古墳』庵原村教育委員会
- 7 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第2巻第3号
- 8 西宮一男 1969『常陸狐塚』岩瀬町教育委員会
- 9 尾崎喜左雄 1971「後閑天神山古墳」『前橋市史』第1巻
- 10 尾崎喜左雄 1971「朝倉2号墳古墳」『前橋市史』第1巻
- 11 岩崎卓也他 1971『長野県森將軍塚古墳』更埴市教育委員会
- 12 杉山晋作 1973「千葉県木更津市手古塚古墳の調査速報」『古代』第56号
- 13 斎木勝・種田齊吾 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会
- 14 斉藤忠 1974「佐自塚古墳」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代
- 15 三森俊彦・阪田正一 1974『市原市大庭遺跡』(財)千葉県都市公社
- 16 大森信英他 1975『上出島古墳群』岩井市教育委員会
- 17 上川名昭他 1975『茨城県筑波町山木古墳』茨城考古学会
- 18 茂木雅博 1976『常陸浮島古墳群』浮島研究会
- 19 前沢輝政 1977『山王寺大塚塚古墳』早稲田大学出版部
- 20 沼沢豊他 1978「佐倉市飯合作遺跡」(財)千葉県文化財センター
- 21 斉藤忠・大塚初重他 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会
- 22 梶山林継 1980「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』No171
- 23 梶山林継 1980「鳥越古墳の調査(1)」『宇麻具多』創刊号
- 24 松島栄治 1981「前橋天神山古墳」『群馬県史』資料編3 原始古代3 古墳
- 25 増田精一他 1981『筑波地域古代史の研究』筑波大学
- 26 磐田市教育委員会 1982『新豊院山古墳群D地点調査報告』
- 27 梶山林継 1982「鳥越古墳の調査(2)」『宇麻具多』第2号
- 28 岩崎卓也 1982「森將軍塚古墳」『長野県史』考古資料編 全1巻(2)主要遺跡(北・東信)
- 29 甘粕健・小野昭他 1984『山谷古墳』巻町教育委員会
- 30 山ノ井清人 1984「山崎1号墳」『真岡市史』第1巻 考古資料
- 31 伊藤玄三他 1985『本屋敷古墳群の研究』法政大学
- 32 米田耕之助 1985「根田遺跡」『(財)市原市文化財センター年報』昭和60年度
- 33 三木文雄他 1986『那須駒形大塚古墳』吉川弘文館
- 34 結城慎一・山口宏 1987『史跡遠見塚古墳保存修理事業報告書』仙台市教育委員会
- 35 浅利幸一 1988「神門古墳群」『第3回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』昭和62年度(財)市原市文化財センター
- 36 荒木勇次 1989「山谷古墳」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 37 荒木勇次 1989「三王古墳群」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会実行委員会

3 愛宕塚古墳出土の鏡について

本鏡は面径7.2cm、古墳時代前期の小形倣製鏡の一種である。縁から順に素文縁（平縁）、直行櫛歯文帯、三重の圈線、四単位の主文様、さらに二重の圈線を経て鈕にいたる。4単位の主文様はやや細身の線式で変形のS字状文ないし蕨手状文で意匠自体が非常に崩れている。倣製鏡においてここまでデフォルメされた文様の祖型を追求することは容易なことではない。またその追求自体それほど歴史的あるいは技術的に意味をもつものとは思われない。製作者はおそらく4単位の主文様は何を表現したものであったかについては全く無頓着であつたろう。もちろん使用時においても同様であり、鏡それ自体に意義があつたのであろう。しかし、ここでは先学に導かれながら、本鏡の祖型になった可能性のある鏡及び類似例をあげ、若干の検討を加えることによって本古墳の歴史的な位置づけを考えるささやかな一要素としてみたい。

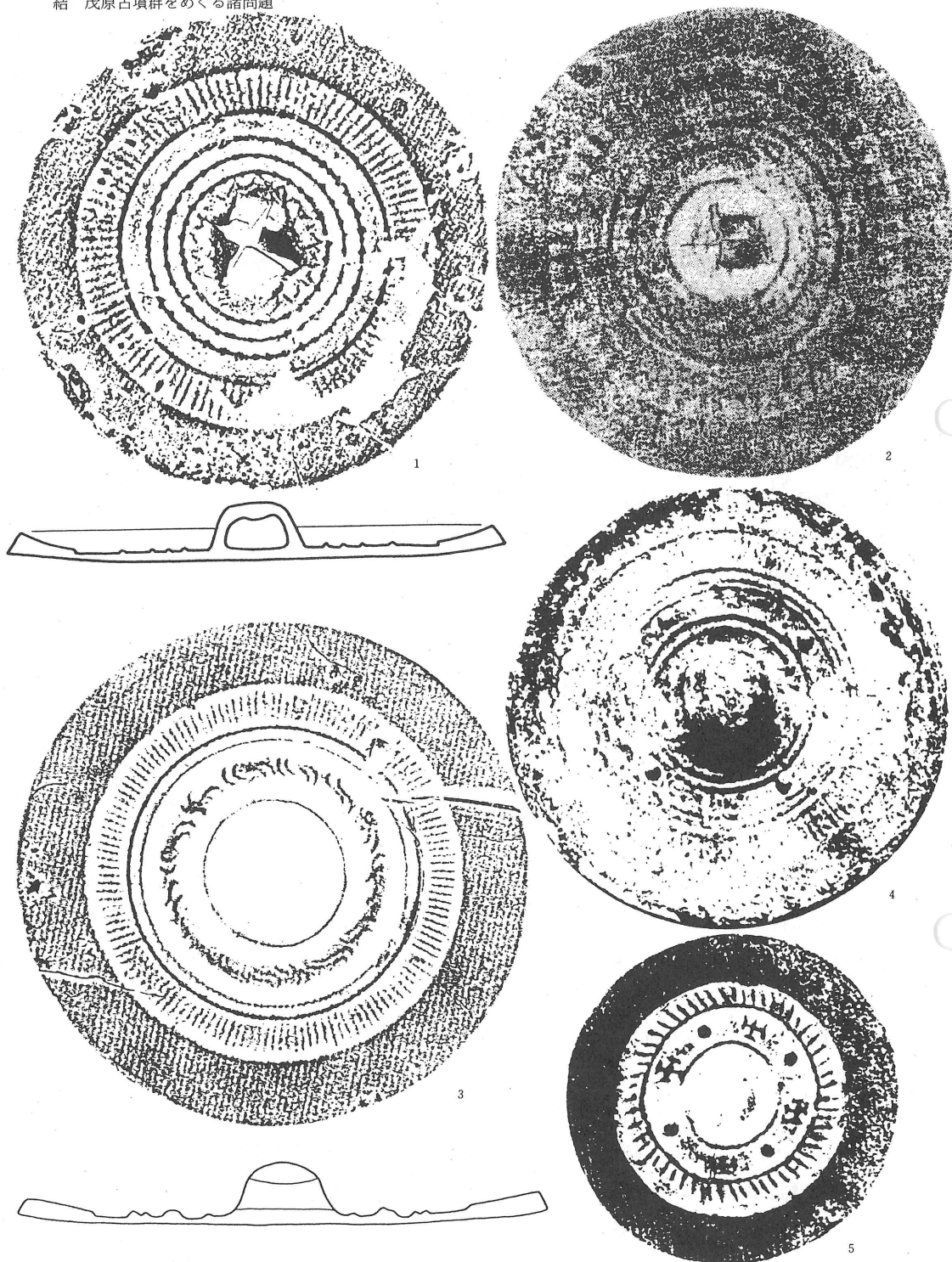
中国鏡あるいは先行する弥生時代の小型倣製鏡で4単位の変形S字状文をもつ鏡としては

- ① 四蛇鏡^{註1}（蟠蛇文鏡・虺龍文鏡・四虺文鏡）
- ② 四螭文鏡^{註2}
- ③ 四獸文鏡
- ④ 弥生時代の「S字状文倣製鏡」^{註3}

があげられる。

まず④については高倉洋彰氏の論考^{註3}があり②四螭文鏡には内行花文がみられること、①四蛇鏡には通常四乳を配することに注目しつつ「四乳四S字状文の完成には、四蛇鏡が大きく寄与しているものの、その基盤は内行花文日光鏡系の倣製鏡にある」としている。意匠が酷似する②四螭文鏡の影響についてはこの鏡が前漢の初めから中期と年代が古過ぎること、その間をつなぐ鏡がないこと、国内で出土していないこと、以上3点を理由に排除している。愛宕塚鏡と①四蛇鏡・④「S字状文倣製鏡」の間には後二者が乳をもち櫛歯文が斜行するのに対し前者は乳を欠き櫛歯文も直行する点で大きな差異をみせる。また④「S字状文倣製鏡」は一例を除き内行花文を伴うとされており明らかに祖型とは考えられない。しかし、「日光鏡の倣製は、文字の抽象化が獸形文、S字状文などを生み、銘文の字間の渦文が蕨手状文を発生させた」とすれば^{註4}愛宕塚鏡が日光鏡のモチーフの末裔である可能性は残されている。③四獸文鏡については可能性があるがあまりにも「獸」が形骸化しており^{註5}彼我を結び付ける論証は難しい。祖型となった鏡を確定することは予想どおり難しいのでいったん視点を変え、類似例について検討してみたい。

東国出土の本鏡に類似する例としては茨城県勅使塚古墳出土の重圈文鏡^{註6}があげられる。面径7.8cmでやや幅広の素文縁（平縁）で直行櫛歯文帯をもち三重圈線を主文様とする。愛宕塚鏡の内区の四単位変形やS字状文を除けば大きさ、意匠ともよく似ている。^{註7}重圈文鏡については小林三郎氏の論考があり「古墳時代倣製鏡としては初現的」とされる。さらに重圈文鏡の「母型」としては^{註8}「前漢代に製作されたであろう「日光鏡」や「明光鏡」の類あるいは「四蛇鏡」と呼ばれ



1. 茨城県勅使塚古墳出土 2. 栃木県足利市藤本地内出土 3. 栃木県朝日観音1号墳出土 4. 大阪府御旅山古墳出土 5. 大阪府亀井遺跡出土

第120図 愛宕塚古墳出土鏡関連鏡 (S = 1/1)

るような類のものでなかったか^{註8}と推定している。年代については古墳出土の6例、集落出土5例をあげ、初期の古墳及び弥生時代最終末～土師式土器の初期の集落から出土しているとする。その後の集成を経た見解もほぼ同様である。前記した勅使塚古墳の他に三重県嬉野町向山古墳、大阪府富田林市板持3号墳、愛媛県今治市雉之尾1号墳(第18表)と前期古墳それも愛宕塚古墳と同じ前方後方墳から出土していることが注意される。^{註10}現段階では、愛宕塚鏡を重圏文鏡と同系列の鏡として理解することはそれほどの外れではなかろう。一部残る変形S字状文は大阪府御旅山古墳の重圏文鏡にみられる四乳とともにその祖型として四蛇鏡ないし日光鏡をあてる小林氏の見解が正鵠を得ていることを示すものと思料される。ひとまず愛宕塚鏡を重圏文鏡の系統で理解する立場に立ってその系譜についての先学の研究を再び瞥見してみよう。

小林氏は「重圏文鏡が小形の内行花文鏡などと共に弥生時代からの「小銅鏡」の系列の中にあるらしい」と推定しさらに珠文鏡の一部(A類)も同列に扱った。^{註8}その後ややニュアンスを変え古墳時代初期の段階の小形の倣製鏡は「弥生時代小形倣製鏡群と直接的に系譜をたどることのできる材料は無いと云ってよい」あるいは「直接的に関連しないだろうと推測される」^{註12}とする。

一方高倉氏は、重圏文鏡の祖型として「平縁の幅広化した重圏文日光鏡を原鏡として瀬戸内～近畿で独自に鑄造されたと考えられる」重圏文日光鏡系倣製鏡(第Ⅲ型b類)を考えている。^{註4}大阪府鷹塚山鏡(弥生後期末)を初期のものとし、斜行櫛歯文の直行化、鈕の周囲の櫛歯文帯の省略、面径の縮少が進み最終的には櫛歯文鏡への変容を想定する。なお、製作地については予察的に「近畿一帯と考えることも可能」としている。先行する論文の中では弥生時代末から古墳時代初頭の小形倣製鏡に関して「各地の古墳時代倣製鏡の技術的基盤をなし、相互に密接な関係を有する」^{註13}と述べ小林氏とはやや見解を異にする。^{註14}

森岡氏は高倉氏の業績を継承しつつ弥生時代から古墳時代前期の倣製鏡を4期区分した。^{註15}第1期(弥生後期初～前半)、第2期(後期中頃～後半)は北九州に制作の中心があり第3期(後期末)、第4期(古墳時代前期)は「倣製第3期の鏡づくりの主役はあくまで近畿弥生人と思われ、古墳時代には小形鏡の製作を受継いだ」とする。^{註16}ここで注目しておきたいのは第4期において畿内が「重圏文系の小形鏡製作を一つの柱」^{註15}としていたと推定している点である。愛宕塚鏡を理解するための重要な視点と思われる。

管見ではあるが、前方後方墳から出土する鏡を一覧(第17・18表)するとおおまかに類型化が可能である。つぎに時間軸を加味して検討すべきであるが筆者の力量の及ぶ所ではない。また前方後円墳など他の墳形の前期古墳出土の鏡を集成して比較検討し、前方後方墳出土鏡の特質を見出すべきであるがこれも現段階では無理である。ただし集成作業段階では小形倣製鏡を副葬する比率が前方後円墳に比べて大きいように思われた。舶載か倣製かあるいは鏡種の違いを畿内との関係の反映とする立場に立てば前方後方墳の被葬者は「疎」ということになる。しかしその内部にも鏡の組成に差異がある。三角縁神獸鏡を副葬する古墳が13もあり前方後円墳の被葬者と同等あるいはそれ以上のつながりをもつ首長も想定される。ただしこの場合、築造時期の違いを十分

No	古墳名	所在地	墳長	埋葬施設	鏡式	面径	做舶	備考	文献
1	茂原愛宕塚古墳	栃木県宇都宮市茂原町御馬前	50	木棺直葬	(小形做製鏡)	7.2	做		本書
2	大日塚古墳	〃	36	〃	素文鏡	2.4	〃		〃
3	那須八幡塚古墳	〃 小川町吉田・八幡	(68)	〃	饗鳳鏡	12.6	舶		1
4	駒形大塚古墳	〃 三輪・駒形	64	木炭槨	画文帯四獸鏡	13.2	舶		2
5	下侍塚古墳	〃 湯津上村湯津上	84	粘土槨?	盤竜鏡		做		3・4
6	上侍塚古墳	〃	114	〃?	振文鏡		做		〃
7	山王寺大塚塚古墳	〃 藤岡町姪沼	98	鹿沼土槨	四神像鏡	12.3	做		5
8	元鳥名將軍塚古墳	群馬県高崎市元鳥名町將軍塚	95	粘土槨	四獸鏡	7.1	做		6
9	北山茶臼山西古墳	〃 富岡市南後箇169	28	木棺直葬	方格規矩鏡他1	15.9	做	変形四獸鏡(9.7)	7
10	(下佐野遺跡A区4号)	〃 高崎市下佐野町	25.9	不明	内行花文鏡	8.0	做	周滄中出土	8
11	桜塚古墳	茨城県つくば市水守・桜塚	30	粘土槨	変形四獸鏡	13.5	做		9
12	勅使塚古墳	〃 玉造町沖州・下組	64	木棺直葬	重圈文鏡	7.8	做		10
13	丸山1号墳	〃 八郷町柿岡	55	〃	内行花文鏡	8.2	做		11
14	新皇塚古墳	千葉県市原市菊間	40	粘土槨	内行花文鏡(北)	10.2	做	珠文鏡(南) 7.3	12
15	鳥越古墳	〃 木更津市大田・鳥越	25	木棺直葬	方格規矩鏡	11.2	做		13
16	砧中学校7号墳	東京都世田谷区成城1丁目	65	粘土槨	乳文鏡	4.8	做		14
17	真土大塚山古墳	神奈川県平塚市大野町真土		〃	三角縁神獸鏡他1	22.1	舶・做	四獸鏡(7.75)	15
18	小平沢古墳	山梨県中道町上向山	52	不明	斜縁二神二獸鏡	13.2	舶		16-17
19	弘法山古墳	長野県松本市出川丸山	63	磯槨	四獸鏡	11.65	舶		18
20	午王堂3号墳	静岡県清水市庵原町	78.2	粘土槨	三角縁神獸鏡	22.5			19
21	東之宮古墳	愛知県大山市北白山平	75	竪穴式石室	三角縁神獸鏡5他6		舶・做	(注2)	20-21
22	宇都宮古墳	〃 小牧市小木	62	〃	三角縁神獸鏡	21.8	舶		22
23	北山古墳	岐阜県大野町上磯	83	横穴式石室	内行花文鏡	12.8	舶		23-24
24	粉糠山古墳	〃 大垣市青墓町・小金	100	不明	乳文鏡		做?		25
25	高塚古墳	〃 〃 矢道町・権現前	58	竪穴式石室	三角縁神獸鏡	19	做		26
26	西寺山古墳	〃 可児市中恵土	(60)	〃	(?)				27
27	東寺山1号墳	〃 御嵩町伏見・土居内	(41)	粘土槨	四獸鏡				27
28	向山古墳	三重県嬉野町上野・松阪市小野	71.4	粘土槨	内行花文鏡他3	6.9	做	重圈文鏡・振文鏡2	28

第17表 鏡が出土した前方後方墳一覽(1)

No	古墳名	所在地	墳長	埋葬施設	鏡式	面径	做舶	備考	文献
29	筒野1号墳	三重県嬉野町一志・筒野	39.5	粘土槨	三角縁神獸鏡2他2		做・舶	位至三公鏡・四獸鏡	28
30	国分尼塚1号墳	石川県七尾市国分町ノ部	53	〃	龜鳳鏡	15.7			29
31	国分尼塚2号墳	〃	33	木棺直葬	(小形做製鏡)	10.1	做		29
32	長法寺南原古墳	京都府長岡京市長法寺南原	58~60	竪穴式石室	三角縁神獸鏡4他2		舶	盤竜鏡・内行花文鏡	30
33	芝ヶ原古墳	〃 城陽市寺田大谷	後方部21	木棺	四獸形鏡	12.0	做		31
34	板持3号墳	大阪府富田林市板持	(40)	粘土床	重圈文鏡	8	做		32
35	西山古墳	奈良県天理市和之内町	183	(竪穴式石室)	神獸鏡他1			鏡式不明	33
36	新山古墳	〃 広陵町大塚・新山	127	竪穴式石室	三角縁神獸鏡9他25		舶・做	(注3)	33
37	新沢千塚109号墳	〃 橿原市川西町カサ松	28	木棺直葬	画文帯神獸鏡他2	20.9	舶・做	珠文鏡・変形獸文鏡	34
38	権現山51号墳	兵庫県揖保郡御津町中島	(43)	竪穴式石室	三角縁神獸鏡5		舶		35
39	普段寺1号墳	鳥取県西伯郡会見町天方	23	木棺直葬	三角縁神獸鏡	23.5	舶		36
40	薬師山古墳	高根県松江市西川津町・前菅田	不明	不明	四乳鏡	9.5	做		37
41	金崎1号墳	〃 〃 金崎	36	竪穴式石室	内行花文鏡	6.9			37
42	松本1号墳	〃 三刀屋町給下	50	粘土槨	獸帯鏡	13	做		38
43	岡田山1号墳	〃 松江市大草町・有	24	横穴式石室	内行花文鏡	10.6	舶		39
44	古天神古墳	〃 〃 杉谷	27	石棺式石室	変形五獸鏡	13.6	做		40
45	御崎山古墳	〃 〃 御崎	40	横穴式石室	珠文鏡	8.2	做		41
46	備前車塚古墳	岡山県岡山市四御神・湯迫	48.3	竪穴式石室	三角縁神獸鏡12他1		舶	内行花文鏡	42-43
47	七つ丸1号墳	〃 〃 津島・西坂	45.1	〃	龜鳳鏡・方格規矩鏡			変形獸帯鏡(第二)	44
48	用木3号墳	〃 山陽町河本・野山	42	木棺直葬	四獸鏡	15.3	做		45
49	久米三成4号墳	〃 久米町中北下・三成	35	箱式石棺	変形四獸鏡	12	做		46
50	下原観音山古墳	〃 鏡野町下原・才の峠	51	竪穴式石室	三角縁神獸鏡他2	23	舶	菅田方形帯神獸鏡	46-47
51	岡高塚古墳	〃 勝央町岡・高塚	65(52)	〃	三角縁神獸鏡?				46
52	権原寺山古墳	〃 美作町権原下	54	〃	変形四獸鏡	13.8	做		48
53	丹田古墳	徳島県三加茂町西庄加茂山	(35)	〃	獸形鏡 or 神獸鏡	11.4			49
54	雉之尾1号墳	愛媛県今治市桜井国分	30.5	木棺直葬	重圈文鏡	5.7	做		50
55	妙法寺2号墳	福岡県那珂珂川町恵子・妙法寺	18	〃	三角縁神獸鏡	21.9	舶		51

(注1) 17真土大塚山古墳・50下原観音山古墳については前方後円墳とする見解もある。なお、大阪府紫金山古墳については前方後方墳とする意見もあるが本表からは割愛した。

(注2) 方格規矩鏡1, 四獸鏡4, 三獸鏡1

(注3) 画文帯神獸鏡3, 方格規矩鏡4, 雁鏡1, 直弧文鏡3, 内行花文鏡14

第18表 鏡が出土した前方後方墳一覧(2)

吟味すべきであることは改めて記すまでもない。前方後方墳の被葬者をおしなべて前方後円墳の被葬者の下位に置くことはやや短絡的にすぎる。集成作業を通して古墳時代前期における二重の意味で重層的な社会が想定された。

やや冗長に過ぎたきらいがあるが 1) 茂原愛宕塚鏡は重圏文鏡の範疇で理解される 2) 製作の中心は畿内地方であった可能性が高い。したがって愛宕塚鏡は畿内勢力との係わりで理解される 3) 主文様の変形S字状文は重圏文鏡の祖型を日光鏡ないし四蛇鏡にもとめる諸先学の見解が正鵠を得ていることの証左となる可能性がある。 4) 前方後方墳出土の鏡の集成から小形倣製鏡がかなりの割合で見られることが判明 5) 古墳時代前期における前方後方墳の被葬者にはそれぞれ畿内勢力との関係に違いがあり一律に扱うことは危険である。前方後円墳の被葬者との関係も勘案すると二重の意味で重層的な社会が想定される 以上5点を確認してささやかな検討結果としたい。

(註)

- 1 鏡の名称については研究者それぞれの独自の分類・命名があり、統一した呼称がなく混乱がみられる。本項では比較的研究者間で多く使用されている「四蛇鏡」を用いる。これは後藤守一が「変形蟠蛇文鏡」(『日本考古学大系 漢式鏡』雄山閣 1926年 第693図)とし、その後「四蛇鏡」(『古鏡聚英』上篇 1942年 図版第14の1)に改称した鏡式である。樋口隆康の「四乳虺龍文鏡」(『古鏡』新潮社 1979年 図版26・27)、澄田正一の「四虺文鏡」(「四虺文鏡について」『日本古文化論叢』吉川弘文館 1970年)と対応する。
- 2 高倉洋彰氏論文中の呼称(注3)に従った。ただし、この「四蟠文鏡」という名称を①で示した「四蛇鏡」にあてる研究者もおり(『明治大学考古学博物館蔵品図録1 鏡』1988)混乱は否めない。
- 3 高倉洋彰 1981「S字状文倣製鏡の成立過程」『九州歴史資料館研究論集』7 九州歴史資料館
- 4 高倉洋彰 1985「弥生時代小形倣製鏡について(承前)」『考古学雑誌』70巻3号 日本考古学会
- 5 同様な例は後藤守一が「獸形鏡(四獸鏡)」(前掲『漢式鏡』第321図)と判断したものと鈴鏡などにみられる。
- 6 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』2-3 明治大学考古学博物館編1988『明治大学考古学博物館蔵品図録1 鏡』
- 7 小林三郎・清水康二両氏の御教示によると千葉県能満寺古墳出土鏡も類似しているとのことである。2面出土したうちの1面で報文(大塚初重1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第3冊)では獸形鏡とされ、面径8.6cm、三角縁の素文縁でその内側に楕歯文帯、さらに2重圏線がめぐり主文様は「線描的な獸形」という。縁の形態は全く違うが意匠は類似するようである。残念ながら断面形のみで拓影等の提示はない。今回写真を提示していただいたが詳細については能満寺鏡の正式報告を待って検討したい。
- 8 小林三郎 1979「古墳時代初期倣製鏡の一側面」『駿台史学』46
- 9 小林三郎 1982「古墳時代倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊
- 10 栃木県内の出土例としては、足利市藤本地内出土鏡が知られる(山田郡教育会『群馬県山田郡誌』1939年)。現在確認できないが、図から判断して素文縁の内側に鋸歯文がめぐりその内側に三重の圏線がみえる。なお面径は二寸四分(7.9cm)、出土地は「矢場川村大字矢場藤本區古墳群中」で「内區の部に珠文、外區に鋸歯文だけ残れり」との説明がある。圏線は、小さな珠文が連続したようにみえる茨城県勅使塚鏡に類似するものであろう。足利市藤本町には古墳時代前期の前方後方墳である藤本観音山古墳があり、本鏡も矢場川(旧渡良瀬川)流域に営まれた前期古墳から出土したものと指定される。
- 11 『羽曳野壺井御旅山前方後円墳発掘調査概報』1968

【南河内石川流域における古墳の調査】府報22 1970

なお、前段階に大阪府亀井遺跡出土鏡（高島徹他 1983『亀井』大阪府教育委員会）を想定すれば四乳の流れもスムーズであろう。

- 12 小林三郎 1989「小形内行花文鏡について」『下佐野Ⅰ遺跡 寺前地区(2)』群馬県教育委員会
- 13 高倉洋彰 1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58巻3号 日本考古学会
- 14 両者の見解の相違は、高倉氏が技術的側面を重視するのに対し、小林氏が鏡の意匠、系譜自体を問題としたためと史料されるが本論から逸れるので言及は控えたい。
- 15 森岡秀人 1989「銅鏡」『季刊考古学』第27号 雄山閣
- 16 前項15に同じ。ただし「仿製第4期は国産小形鏡の一系でも断絶でもない複雑な様相を帯びる時期」とも述べ、断言は避けている。
- 17 大まかにはまず 1) 舶載鏡のみ 2) 舶載鏡+倣製鏡 3) 倣製鏡のみの3分類が可能である。さらにそれぞれ1面のみであるか複数副葬されたかの違い、直径5～8cmほどの小形倣製鏡の抽出、三角縁神獸鏡の有無及び倣製か舶載か等を要素とすることができる。予察的には、築造時期・被葬者の性格を反映すると考えている。

(参考文献)

- 1 三木文雄・村井崑雄 1957『那須八幡塚古墳』吉川弘文館
- 2 三木文雄編著 1986『駒形大塚古墳』吉川弘文館
- 3 栃木県史編さん委員会 1976『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- 4 斉藤忠・大和久震平 1986『那須国造碑・侍塚古墳の研究』吉川弘文館
- 5 前沢輝政 1977『山王寺大塚塚古墳の研究』早大出版部
- 6 田口一郎他 1981『元島名将塚古墳』高崎市教育委員会
- 7 田口正美編 1988『大島上城遺跡・北山茶臼山西古墳』群馬県教育委員会
- 8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1989『下佐野遺跡Ⅰ地区 寺前地区(2)』群馬県教育委員会
- 9 蒲原宏行・松尾昌彦 1982「桜塚古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学筑波古代地方史研究グループ
- 10 大塚初重・小林三郎 1964「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』2巻3号
- 11 後藤守一他 1957『常陸丸山古墳』丸山古墳顕彰会
- 12 斉木勝・種田吾吾・菊池真太郎 1974『市原市菊間遺跡』房総考古資料刊行会
- 13 稻山林継 1980「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』171 ニューサイエンス社
- 14 對比地秀行 1982「砧中学校7号墳」『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』世田谷区遺跡調査会
- 15 本村豪章 1974「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60巻1号 日本考古学会
- 16 小林広和・里村晃一 1978「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』30巻2号 信濃史学会
- 17 山梨考古学会編 1983『山梨の遺跡』山梨日日新聞社
- 18 斉藤忠他 1978『弘法山古墳』松本市教育委員会
- 19 清水市教育委員会 1974『午王堂山第3号墳予備調査概報』
- 20 高木志朗・宮川芳照・杉崎章 1968『上野古墳群』犬山市教育委員会
- 21 伊藤貞樹 1972「尾張の大型古墳」『考古学研究』19巻2号 考古学研究会
- 23 東海古墳文化研究会 1988「岐阜県西濃地方の前方後方(円)墳の測量調査」『古代』86 早稲田大学考古学会
- 24 岐阜県立博物館 1989『特別展 濃飛の古墳時代』
- 25 中井正幸 1988「岐阜県粉糠山古墳」『日本考古学年報』39 日本考古学協会
- 26 中井正幸 1988「岐阜県西濃地方の前方後方墳」『古代』86 早稲田大学考古学会
- 27 長瀬治義 1988「岐阜県東濃地方の前方後方墳」『古代』86 早稲田大学考古学会

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

- 28 下村登良男 1981「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会
- 29 和田晴吾 1984「石川県国分尼塚1・2号墳」『月刊文化財』254
- 30 都出比呂志 1983『長法寺南原古墳』大阪大学南原古墳調査団
- 31 川崎公敏・近藤義行 1987『芝ヶ原古墳』城陽市教育委員会
- 32 北野耕平 1967『富田林市板持古墳群調査概報』富田林市教育委員会
- 33 置田雅昭 1974「大和の前方後方墳」『考古学雑誌』59巻4号 日本考古学会
- 34 山田良三 1981「109号墳」『新沢千塚古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
- 35 1989年3月12日付「毎日新聞」「読売新聞」等各誌
- 36 鳥取県埋蔵文化財センター 1988「特集 会見町普段寺1号墳出土の三角縁神獸鏡」『鳥取埋蔵文ニュース』No.19
- 37 松本岩雄 1983「寺床1号墳関連資料一覧」『松江考古』第5号 松江考古学談話会
- 38 山本清 1963『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- 39 島根県教育委員会 1987『出雲岡田山古墳』
- 40 松本岩雄 1983『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅱ 島根県教育委員会
- 41 三宅博士・松本岩雄 1982『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅰ 島根県教育委員会
- 42 鎌木義昌・近藤義郎 1968「備前車塚」『考古学研究』14巻4号 考古学研究会
- 43 近藤義郎 1986「備前車塚古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 44 近藤義郎・高井健司編 1987『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査団
- 45 神原英朗 1975『用木古墳群』山陽団地埋蔵文化財調査事務所
- 46 河本清・柳瀬昭彦 1979『久米三成4号墳』岡山県教育委員会
- 47 鎌木義昌 1964『岡山の古墳』日本文教出版株式会社 なお『岡山県史』では「郷観音山古墳」(全長43m, 前方後円墳)との記載である。
- 48 近藤義郎 1986「橋原寺山古墳」『岡山県史』考古資料編 山陽新聞社
- 49 森浩一編 1971『同志社大学文学部考古学調査報告第3冊 丹田古墳調査報告』同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
- 50 八木武弘 1986「雉之尾1・2・3号墳」『愛媛県史 資料編』考古 愛媛県
- 51 沢田康夫 1981『妙法寺古墳群』那珂川町教育委員会

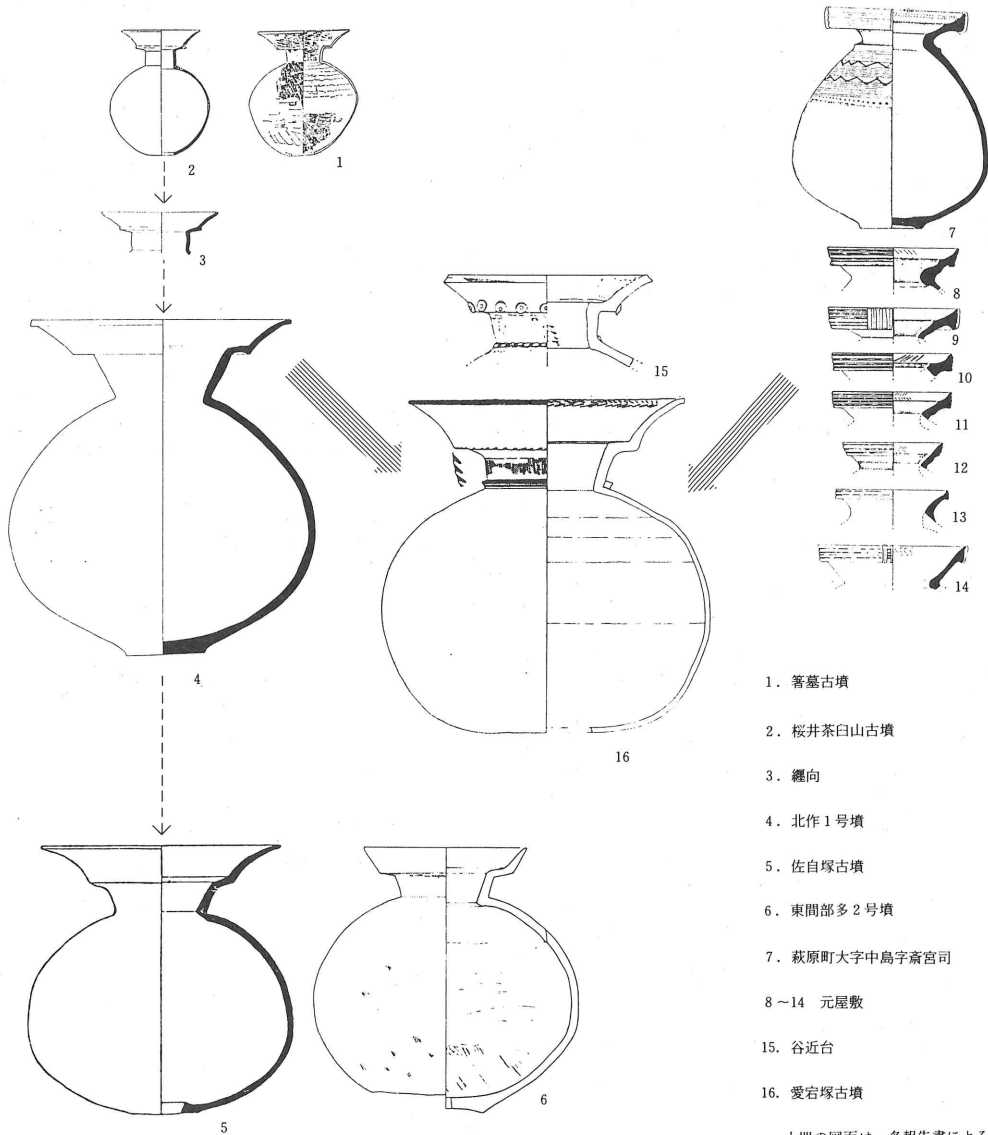
4 土師器の系譜

愛宕塚古墳から出土した土器類は、墳裾、墳頂より転落した状態、周湊内に安置された状態で確認された。そこで、東側周湊くびれ部(G-B4)から出土した2個の壺(有段口辺壺と広口口辺壺で、同形同大の広口口辺壺は西側くびれ部からも出土している。)について、土師器の系譜を中心に編年的な位置付けについて検討する。

(1) 有段口辺壺形土器 (第40図)

この土器は外反する口辺部を持つ壺である。筒状の頸部から段をもって広がりさらにそこから口辺部上面に綾杉の櫛目刺突文を巡らし、段部下縁にも櫛目の圧痕が施こされている。頸部には粘土紐をめぐらし斜めに櫛目文が施されあたかも綱を思わせる施文の土器である。有段口辺の壺は、桜井茶臼山古墳・箸墓古墳ほか、常陸狐塚古墳・佐自塚古墳・前橋天神山古墳・朝倉Ⅱ号墳・

北作1号墳・東間部多2号墳・神門3号墳など供物用土器として古墳に供えられる他に、住居跡からも確認されることは今さら論じるまでもなく、その系譜についてもそれぞれの地域の既存形態から生みだされたものとする考え方や、畿内第五様式あるいは東海西部地域の弥生終末期の土器群に求められるものと考えられてきた。現在、大和盆地東南部にある纏向遺跡の調査では、桜井茶白山古墳出土壺形埴輪の祖形と思われる有段口辺の萌芽がすでに纏向1式後半期に認められることが判明^{註1}し、また近年の寺沢薫氏の論考でも、いわゆる「茶白山形」有段口辺壺の出現が庄内3式にみられるが、大形化の兆候はすでに庄内0式(纏向1式併行)のなかで醸成されているとい^{註2}う。反面、関東地方における有段口辺壺の出現は弥生時代までは遡り得ず、当地方における初期



- 1. 箸墓古墳
- 2. 桜井茶白山古墳
- 3. 纏向
- 4. 北作1号墳
- 5. 佐自塚古墳
- 6. 東間部多2号墳
- 7. 萩原町大字中島字齋宮司
- 8~14 元屋敷
- 15. 谷近台
- 16. 愛宕塚古墳

土器の図面は、各報告書による。

第121図 二段口辺壺形土器の系譜

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

古墳の築造時期と相前後する時期であることが確認されており、大和地方に後出することは明らかである。有段口辺の底部穿孔壺は、古墳祭祀に深く関係した土器であり、作りのよく似た形状が九州地方から東北地方まで広く分布している。古墳祭祀とそれに係る祭祀用土器(小型丸底埴・小型器台・底部穿孔有段口辺壺)が大和の勢力のもとにつくられたものとするれば、愛宕塚古墳出土例も大和地方の強い影響を抜きにしては考えられないであろう。

墳丘上に樹立された壺形土器は、胴部、頸部、口辺部の変化によって細分化されるが、現状では箸墓古墳出土例^{註3}が最も古く、桜井茶白山古墳出土例^{註4}がこれに次ぐ時期のものであろう。両者は口辺部の段の作りに若干の違いが認められるものの、きわめて類似した形態を示し、纏向3式～4式(庄内晩葉～布留早葉)に位置付けられている。纏向4式(布留1式併行)以降、九州から東南北南部までが真の古墳時代を迎え、東国にも初期古墳が造営されることとなるが、有段口辺壺を出土した古墳を関東地方に求めると、北作1号墳例^{註5}、第121図-4は二点出土した内の一点で明らか有段口辺をなしている。口辺部は大きく広く外反し、口辺部下端の稜には刻目が見られる。下膨らみで刷毛目が残されている。壺形土器6点の他に、埴形4点、高坏3点、器台形3点が出土している。

東間部多2号墳例^{註6}、第121図-6は西側くびれ部周湟から出土している。胴部球形で、口辺の外反の度合もなだらかになり、短く直立気味に立ち上がっている。段の幅も北作1号墳例より短くなっている。

諏訪山29号墳例^{註7}、口辺部は頸部からほぼ水平に開いた後に外反気味に大きく開き、頸部には突帯がめぐっている。口辺部に比べて胴部が小さいが、口辺部の形状は愛宕塚古墳出土例に酷似している。この土器は後方部周溝のテラス面から出土している。

佐自塚古墳例^{註8}、第121図-5は口辺部が大きく外反し、北作1号墳出土例に近似するが、頸部が短く、口辺部のフラットな段を明瞭に残さなくなる。佐自塚古墳は全長8.4mの長大な粘土槨を有し、墳頂下から器台、高坏、小形埴が出土している。

常陸狐塚古墳からは、頸部から段をもって外反する口辺部、能満寺古墳からも同様の壺口辺部が、いずれも細片で確認されている。他にも原1号墳、勅使塚古墳などに見られるが、これらはむしろ南関東・後期弥生式土器からの系譜と思われる幅広複合口辺土器に近似している。この種の有段貼付け手法は久ヶ原・弥生町・前野町期に主流を占める、幅広の粘土紐を一部重ね合わせ、上方へ貼り付けることによって幅広の口縁面を表現する口辺部に祖形をもとめられよう。

愛宕塚古墳出土の有段口辺壺は、朝顔形円筒埴輪の起源との関連で論じられた桜井茶白山古墳出土の壺(器高35.3cm)や箸墓古墳出土の壺(器高45.2cm)に口辺部の形状が類似し、庄内期以降のこれらの土器群からの系譜が想定できる。そして、東国の古墳祭祀に使われたこの種の壺は、その形態からみると愛宕塚古墳・北作1号墳・諏訪山29号墳・常陸狐塚古墳出土例(布留中段階)は東間部多2号墳・佐自塚古墳(布留新段階)の前代に置かれるものであろう。しかしながら、愛宕塚古墳出土例のように有段口辺の内面に綾杉文を巡らす例は、畿内をはじめ東国でも類例の少ない

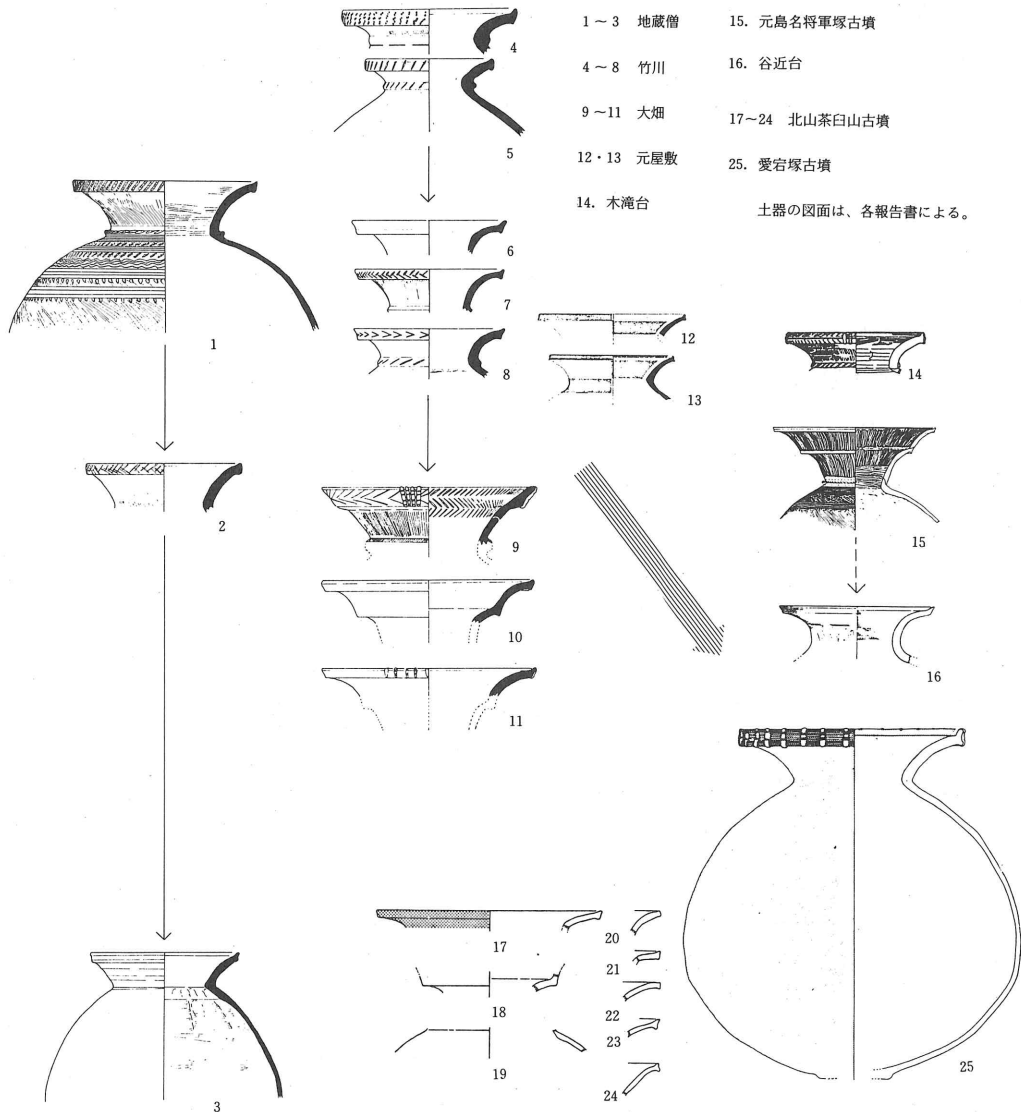
特異な土器であり、直接畿内地方に系譜を求めるわけにはいかない。口辺内面にヘラ描き（あるいは櫛刺突）綾杉文を巡らす作法は、弥生後期後半の一宮市下渡遺跡^{註9}・南木戸遺跡^{註9}・元屋敷遺跡^{註9}をはじめとして、古く尾張地方の弥生後期前半(山中期)から認められるところである。濃尾型壺(パレススタイルを言う)の文様は、口辺部内面および胴部上半に施紋されるのを原則としている。口辺部内面については、櫛・篋状工具の刺突、押圧による綾杉文を基調とする豊富な文様構成をとっている。

一宮市萩原町大字中島字齋宮司出土例^{註9}(第121図-7)は欠山新相の濃尾型壺で、口辺内面に櫛目の羽状文を施し、胴部上半に直線文と山形文を巡らしている。元屋敷遺跡出土例(第121図-8~14)も櫛目あるいはヘラ描きの羽状文が施されている。一方、鳥羽市大畑遺跡出土^{註10}の広口壺(第122図-9)でも、口辺部内外面に櫛目刺突による列点文を羽状に2~4段施している資料が知られている。愛宕塚古墳例にみられる綾杉文は、これらの文様とは微細な点で異なっているが、尾張~伊勢中北部の壺に施された文様の系譜内にあることは考えられよう。これら濃尾型壺の器面を飾った文様が、器形こそ変われ、有段口辺壺の口辺部にみられたことは、当時の活発な社会状況を反映したものとみることができ、少なくとも一地域の土器系譜からだけでは捉えられないことを示している。

(2) 広口口辺壺形土器 (第40図)

この土器は口辺部がくの字状に大きく外反し、口縁は幅広の帯状でその上下は若干出張っている。帯状口縁には細い粘土紐をタテに貼付し、その紐をタテに三分するように櫛目が二本、交差するようにつけられている。貼付文系の飾りが、弥生式土器の伝統を受け継いだ土師器の口辺部の文様として残されたものであることは明らかであり、また、口辺部を幅広にする広口壺の作法は東海地方とりわけ伊勢湾地方の後期弥生式土器に見られることから、貼付文系の装飾と同様に当地方との関連性が問題視されている。濃尾型壺について、欠山期(東牧式)には胴部器形は下ぶくれの無花果形が一般的となり、口辺端部を上下にのばして幅広の帯状口縁とし、ほとんどの場合、細線貼付文が施される。胴部文様は平行線と鋸歯状沈線文を重ねるように定形化する。ところが次の元屋敷期には、口辺形態は単純化し、口辺端部を下方へ引きのばして帯状口縁をつくる作法は簡略化され、胴上半部の文様も粗くなる傾向が看取できるとい^{註12}。濃尾型壺は、浅井和宏氏による最近の研究によって分類・編年が深まり、口縁部もその形態によって細分化されている。濃尾型壺の帯状口縁には確かに、垂直なもの(浅井第Ⅱ類a)と上端外傾するもの(第Ⅱ類b)とがみられ、第Ⅱ類bについても、口縁面に擬凹線文が施されたもの(第Ⅱ類b₁)と施されないもの^{註13}とがある。しかし、愛宕塚古墳出土例と比較してみた場合、そこにはかなりの空隙が感じられ、口辺部を幅広くみせる作法は、濃尾型壺よりむしろ伊勢地方の単口辺広口壺に近いと考えることができる。濃尾型壺に対応するものに伊勢地方の単口辺広口壺が存在するという指摘があり、三重県竹川遺跡などに良好な資料が多い。伊勢・尾張地方の類例をみてみよう。

地蔵僧遺跡例^{註14}、第122図-1・2・3は報文において広口壺Aと分類されたもので、1の帯状



第122図 廣口口辺壺形土器の系譜

口縁には櫛目刺突文を施す。頸部には突帯が巡り、体部も櫛描横線・刺突文・波状文で飾られている。2は1と同様に口辺部をわずかにつまみ上げて带状口縁を作り、面にヘラ刻みを施している。3も带状口縁を同様な作法によるが、装飾を省いている。1・2・3は时期的にそれぞれ、弥生時代後期・古墳時代前期前半・同前期後半に位置付けられている。

竹川遺跡例^{註15}、第122図-4～8例は遺跡破壊後の調査であったために、遺物と層位の関係は明瞭にできなかったが、その形状により弥生時代後期中葉(4・5)と同後期末葉に分けられている。特に後者の口辺部は折り返し状の複合口辺となるもので、櫛状工具により羽状に刺突文が施され

ている。これは第122図-1に口辺部形態は類似するが、文様も鑑みると(4・5)→(1)→(6・7・8)へと伊勢地方の流れを捉えることができる。また、田口一郎氏は元島名將軍塚古墳出土の二重口辺壺を「伊勢型二重口縁壺」と呼び、その祖形を、竹川遺跡などの弥生後期末の広口壺に認めている。^{註16}

大畑遺跡例^{註10}、第122図-9・10・11例は古墳時代前期に位置付けられるものである。9は「柳ヶ坪」型土器の名称で知られたもので、内外面に櫛状工具による刺突文を羽状に施している。11と同様に細線貼付文があり、さらに貼付文上を櫛目により押圧している点など、愛宕塚古墳出土例に共通した文様として考えることができる。

元屋敷遺跡例^{註9}、第122図-12・13は広口壺B類に分類されたもので、口辺部の形態・文様がA類の濃尾型壺に比して単純化した類を指して分けられている。本例は土師器として認められる土器群であり、綾杉文様などは施されていない。類似資料が群馬県北山茶臼山古墳から出土している。また、この種の带状口縁の面に細線貼付文の付けられた土器が大畑遺跡にみられる。

このように、伊勢地方で注目されるのは竹川遺跡などの弥生後期の広口壺であり、これが地蔵僧遺跡では古墳時代前期後半まで一貫した系譜が把握される。伊勢地方の広口壺は、濃尾型壺に比して带状口縁の発達が弱いようであり、この地方の影響は、尾張地方の元屋敷遺跡から群馬県元島名將軍塚古墳・北山茶臼山古墳、茨城県木滝台遺跡など、広く関東地方にまで及んでいる。一方、広口壺に細線貼付文の付くのは、大畑遺跡例にみられるように古墳時代に入ってから類例が増加している。愛宕塚古墳出土広口壺の带状口縁細線貼付文も、伊勢の「柳ヶ坪型土器」、濃尾の細線貼付文系の装飾を取り入れたものと推察される。

(3) まとめ

愛宕塚古墳出土の有段口辺壺の形状は、箸墓古墳・桜井茶臼山古墳にみられる庄内式の壺形土器の系譜に属するものであろうことは想像に難くなく、それを基調に口縁・頸部突帯に濃尾型壺の要素を取り入れたものであろう。口辺内面に篋描き(あるいは櫛目)羽状文を巡らす手法は、伊勢中北部並びに尾張地方の弥生後期前半から認められるところであり、これら濃尾型壺の器面を飾った文様が、異系譜の壺の口辺部文様として取り入れられたと考えられよう。一方、広口口辺壺は類例が少なく、その系譜については不明な部分が少なくない。しかし現状では、三重県竹川遺跡、同県地蔵僧遺跡、同県大畑遺跡などにみられる、带状口縁をつくる広口壺を基調に、「柳ヶ坪型土器」「濃尾型土器」の貼付文系の装飾が取り入れられた形が、本例と推察される。

愛宕塚古墳出土の壺は、在地の弥生式土器の中には系譜をもとめられず、他地域の土器群にその系譜を求めなければならない。しかしその地域を、特定することは困難で、本古墳出土土器には在来の土器作法に複数地域の影響を受けてつくられたものと考えられる。

今後は土器の系譜について、複数地域の故地を求め、それぞれの地域のどのような要素を受容し、在来の土器作法と融合したのか、つまり、在来土器作法に他地域の作法が、何時、何の為に将来されたのか、それら他地域の作法要素を受容することの有利性は那辺に存したのか、それは、

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

単に土器の作法変化としてのみの把握でなく、社会経済史的、政治史的要素とのからみで考察すべきことは論ずるまでもないが、単なる土器の形態、文様の変化、変遷のみに終始するものではなく、その背景の考究を最終目途とするもので、本稿では序説的な記述にとどめるものである。

(注)

- 1 石野博信・関川尚功『纏向』橿原考古学研究所編 1976
- 2 寺沢薫『矢部遺跡』橿原考古学研究所編 1986
- 3 笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要』27 1976
- 4 上田宏範・中村春寿『桜井茶臼山古墳附櫛山古墳』奈良県教育委員会 1977
- 5 滝口宏・金子浩昌ほか『印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化調査(付編)』千葉県教育委員会 1961
- 6 田中新史・須田勉ほか『東間部多古墳群』上総国分寺台遺跡調査団 1974
- 7 坂本和俊「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986
- 8 斉藤忠「佐自塚古墳」『茨城県史料』考古資料編・古墳時代 1974
- 9 澄田正一・大参義一ほか『新編一宮市史』資料編二 1967
- 10 下村登良男ほか『おばたけ遺跡発掘調査報告』鳥羽市教育委員会 1972
- 11 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』 1984
- 12 大参義一「弥生式土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』47号 1968
- 13 浅井和宏「“バレス・スタイル壺”小考」『マージナル』No 7, 愛知考古学談話会 1987
- 14 『地藏僧遺跡発掘調査報告』亀山市教育委員会 1978
- 15 山田友好・谷本鋭次『竹川遺跡』三重県文化財連盟 1972
- 16 田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981

(参考文献)

- 高橋一夫「関東地方における非在地系土器出土の意義」『草加市史研究』第4号 1985
- 比田井克仁「外来系土器の展開—古墳時代前期の東京を中心として—」『古代』第78・79合併号 1985
- 『古墳出現期の地域性』第5回 三重シンポジウム 1984
- 『欠山式土器とその前後』第3回 東海埋蔵文化財研究会 1986
- 『欠山式土器とその前後 研究・報告編』第3回 東海埋蔵文化財研究会 1987
- 『シンポジウム 関東における古墳出現期の諸問題』日本考古学協会編 1987
- 『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回 埋蔵文化財研究集会 1989

第2章 大日塚古墳

1 古墳の平面形態について

三木文雄氏は『那須八幡塚』における上侍塚、下侍塚の比較の中で、周湟形態及び立地状況の観点に加え、狭く低くかつ短いという特徴をもった下侍塚の前方部は、前方後方墳として形式化の方途をとったものとする見解から、「後方横巾に対しての縦の長さの大なるものが古い」という前方後方墳外形の推移を導き出した。^{註1}この考え方を基礎に『那須駒形大塚』で後方部形態を「縦長四角」、「四角」、「横長四角」と3つに類型化し、それぞれ具体的に古墳を提示して検討を加えている。結果として、後二者に属するものの多くは、全長が後方部幅の1.5倍前後で、前方部は幅が狭く、高さも低いとし、一方の前者については全長が後方部幅の倍か倍以上で、前方部の幅と高さは全長と後方部に対してバランスを保つように発達しているとしている。さて、これらの先後関係はというと当初の見解を匂わせながらも言明を避けている。^{註2}

視点を逆に前方部側に向けたのが、赤塚次郎氏の分類である。すなわち、従来の前方後円墳における前方部の発達の過程を基礎に、規模が45m以下で前方部が比較的小さいものをA型、墳丘長が45mを越え前方部が大きく発達したものをB型と2つに大別し、後者を定型化した大型前方後円墳と対比できるものであれば、前者を出現期古墳に見い出せるあいまい性を多分に残した墓形といえるとした。^{註3}

今、本茂原古墳群を構成する大日塚・愛宕塚両古墳をみると、三木氏の着目した後方部形態、赤塚氏の規模及び前方部からの分類によって、あい異なる分類にそれぞれ属することに気づく。そこで、両氏の分類を再検討するとともに、大日塚、愛宕塚両古墳の分類上の位置づけを試みたい。

ところで、三木氏のいう3つの類型には問題がないわけではない。同氏は基本的に古墳の計測値をもって縦長、横長に分類しているが、幅と長さの計測値間に大きな差があればいずれに属するか判断できるものの、同じ差であっても墳丘規模の大小によって分類が異なる不都合が生じてしまう。その不都合を解消するために、計測値の比をもって類型化したい。

では、報告書等によって墳丘各部の計測値がある程度明らかにされている32基の古墳（前方後方形周溝墓を含む）を資料として検討する(第19表)。

表により、後方部の長さについて第123図にグラフ化した。これによって後方部形態は、概ね次のようになる。

縦長長方形 愛宕塚・上侍塚・駒形大塚・八幡塚・亀の子塚・二子塚3号・山崎1号・大榭塚・本屋敷1号・勅使塚・山の根・山谷・東ノ宮・向山・西山1号・車塚・松本1号

正方形 大日塚・権現山・浅間山・二子塚1号・宝塚・原1号・鈴ノ宮7号・將軍塚・下郷SZ42・鷺山・尼塚1号・筒野・長法寺南原

横長長方形 丸山・弘法山

後方形形態からは、三木氏の示した分類のように、大別して上記3類型とすることができる。しかし、とりわけ縦長長方形のように一類型に収まっている、長さとの比は一定したものでなく、多様であることが示されている。つまり、縦長長方形の場合、長さとの割合が概ね10:8までを限度として、その範囲の中で多様性がある。

なお、各類型における量的な問題は、資料の制約上、ここでは不問としたい。

これらをさらに後方部長と前方部長についてグラフ化したものが第124図、後方部幅と前方部幅についてグラフ化したものが第125図である。これらのグラフから以下のような所見が得られ

番号	古墳名	所在地	全長	後方部長	後方部幅	前方部長	前方部幅
1	愛宕塚	栃木県宇都宮市	50	29.5	25.1	20.5	19.6
2	大日塚	栃木県宇都宮市	35.8	20.3	19.8	15.5	16.6
3	権現山	栃木県宇都宮市	63	34	35	29	20
4	上侍塚	栃木県那須郡湯津上村	114	60.5	58	53.5	52
5	駒形大塚	栃木県那須郡小川町	60.5	30	28	30.5	—
6	八幡塚	栃木県那須郡小川町	68	38	34	30	—
7	亀の子塚	栃木県芳賀郡芳賀町	56.3	33	31.5	23.3	17.3
8	浅間山	栃木県芳賀郡芳賀町	57	31	30.5	26	23
9	二子塚1号	栃木県芳賀郡市貝町	29	15	16	14	8
10	二子塚3号	栃木県芳賀郡市貝町	42.7	26	24	16.7	19.4
11	山崎1号	栃木県真岡市	27.7	17.5	16.4	10.2	8.7
12	大榭塚	栃木県下都賀郡藤岡町	96	48	38	48	38
13	本屋敷1号	福島県双葉郡浪江町	36.5	22	17.6	14.5	8.5
14	丸山	茨城県新治郡八郷町	55	30	34	25	22
15	宝塚	茨城県東茨城郡茨城町	39.3	20.5	19.5	18.8	16.5
16	勅使塚	茨城県行方郡玉造町	64	30	28	34	18
17	原1号	茨城県稲敷郡桜川村	29	11.5	11.5	11	7
18	鈴ノ宮7号	群馬県高崎市	21.0	12.3	11.7	8.7	6.9
19	将軍塚	群馬県高崎市	91	51	51	40	40
20	下郷SZ42	群馬県佐波郡玉村町	42	22.6	22.6	19.4	20.7
21	鷲山	埼玉県児玉郡児玉町	60	37.4	37.2	22.6	30
22	山の根	埼玉県比企郡吉見町	58	36	29	22	20
23	山谷	新潟県西蒲原郡巻町	38.22	26.26	22.40	11.96	16.10
24	弘法山	長野県松本市	66	41	47	25	22
25	東ノ宮	愛知県犬山市	78	43	39	35	33
26	尼塚1号	石川県七尾市	52.5	28	28	24.5	20
27	筒野	三重県一志郡嬉野町	39.5	26.8	26.8	13	8
28	向山	三重県一志郡嬉野町	71.4	38.6	35.2	31.2	26.7
29	長法寺南原	京都府長岡京市	60	40	40	20	28
30	西山1号	京都府城陽市	80	45	40	35	30
31	車塚	岡山県岡山市	48.3	26.5	24.5	21.8	22
32	松本1号	島根県飯石郡三刀屋町	50	28	25	22	12

第19表 前方後方墳（前方後方形周溝墓）墳丘各部計測値一覧（単位：m）

る。

- ① 大半の古墳は前方部長・幅ともに後方部長・幅より短く狭い。
- ② 後方部正方形は、後方部長に対する前方部長の割合が大（概ね10:8）であるものと小（概ね10:5）であるものと2グループに分

類できる。

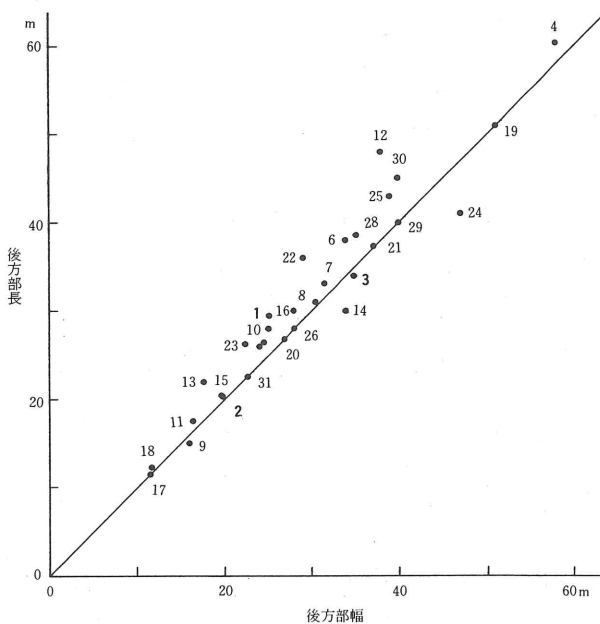
割合が大 大日塚・権現山・浅間山・二子塚1号・宝塚・原1号・鈴ノ宮・將軍塚・下郷SZ42・尼塚1号

割合が小 鷲山・筒野・長法寺南原

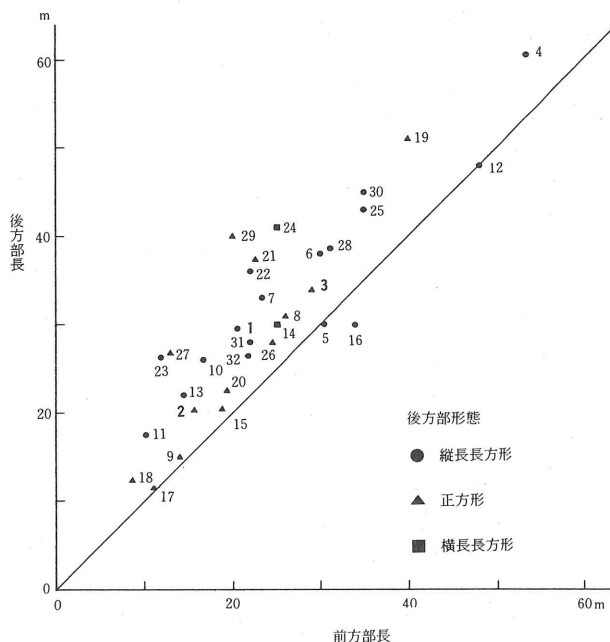
- ③ 後方部縦長長方形は、後方部長に対する前方部長の割合についてみた場合、その大半が後方部正方形の2グループの中間に位置する。

- ④ 後方部幅に対する前方部幅については、後方部形態の相違によって一定した傾向を認めることは困難である。

以上の所見から、まず、三木氏の分類について検討すると、後方部形態を3類型とすることはすでに明らかである。それぞれに付加された特徴について「四角」は前方部が短いというが、確かにそうした一群も認められる。しかし、それとは別に「縦長四角」よりもむしろ長いという逆の特徴をもった一群も認められている。また、それぞれの前方部幅について検討してみたところ、「四角」の前方部は狭いという確証はとれないという結果となった。三木氏の場合、後方部3類型については確かであっても、それぞれの特徴についてはさらに検討を要しよう。



第123図 前方後方墳後方部長・幅相関図

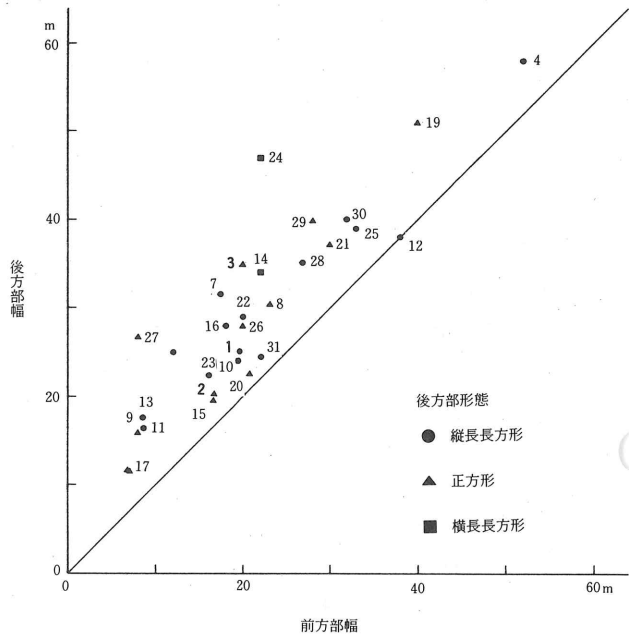


第124図 前方後方墳後方部長・前方部長相関図

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

つぎに、赤塚氏の分類については、規模45mを目安に、それ以下で前方部が比較的小さいもの、それ以上で前方部が発達しているものと二分している。しかし、グラフから見る限りでは45m以下でも比較的前方部が大きいもの、逆にそれ以下で前方部が小さいものもそれぞれに少なからず認められ、2つの類型だけでは整理しきれない感がある。ただ、規模が60mを越える大型古墳ともなると赤塚氏のB型に収まってくる傾向が認められる。

検討の結果、以上両氏の分類には多少の検討の余地があり、前方後方墳の墳形の多様さを痛感するものである。そこで、両氏の分類に対する検討を基に大日塚・愛宕塚両古墳の平面形を考えてみる。



第125図 前方後方墳後方部幅・前方部幅相関図

大日塚古墳は、三木氏の分類にならえば後方部形態は「四角」に、赤塚氏の分類からはA型に属するものであるが、後方部に対する比からみると、前方部は比較的長く、幅も広い一群に属し、両氏の示した特徴には合致しない。なお、形態及び規模の面で宝塚古墳と極めて類似していることが判明した。愛宕塚古墳は、三木氏の分類では後方部形態が「縦長四角」に、赤塚氏の分類ではB型に属するが、後方部に対する比からみると大日塚古墳よりも前方部がやや短く、狭いということになる。このように、三木・赤塚両氏の分類を基礎としてみると、同一古墳群中にあい異なる類型に属する古墳が存在していることが明確になった。この類例として、三木氏の取り上げた上侍塚・下侍塚、ほかに上根二子塚1号・3号などがある。

この種類の違いが果たして古墳築造の年代的違いに関連するものであるのか否かは、さらに出土遺物の詳細な検討を伴わなければならない。古墳の平面形からの検討は、以上の特徴を提示するにとどめる。

(註)

- 1 三木文雄・村井崑雄『那須八幡塚』小川町古代文化研究会 1957年
- 2 三木文雄他『那須駒形大塚』小川町教育委員会 1986年
- 3 赤塚次郎「前方後方墳覚書89」『考古学ジャーナル』No307 1989年

第19表中の古墳各部計測値については次の文献によるが、記載のないものは三木文雄他『那須駒形大塚』から引用した。なお、番号は表中番号に一致する。

- 4 山越茂「上侍塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 1976年

- 5 三木文雄他『那須駒形大塚』小川町教育委員会 1986年
- 6 三木文雄・村井崑雄『那須八幡塚』小川町古代文化研究会 1957年
- 7 山越茂「亀の子塚古墳」『栃木県史』資料編・考古一 1976年
- 8 山越茂「浅間山古墳」『栃木県史』資料編・考古一 1976年
- 9 小森紀男・小森哲也・河俣雅久・竹澤英生「芳賀郡市貝町上根二子塚古墳群墳丘測量調査報告」『峰考古』第6号 宇都宮大学考古学研究会 1986年
- 10 中村紀男・小森紀男・北井清「上根二子塚3号墳」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』 1987年
- 11 山ノ井清人「山崎第1号墳」『真岡市史』第1巻 考古資料編 1984年
橋本澄朗「真岡市山崎1号墳の検討—小貝川流域における古墳出現期の墓制理解の前提として—」『栃木県立博物館研究紀要』第4号 1987年
- 12 前沢輝政『山王寺大塚塚古墳』藤岡町教育委員会 1977年
- 13 伊藤玄三他『本屋敷古墳群の研究』法政大学文学部 1985年
- 15 井上義安・千種重樹『茨城町宝塚古墳』茨城町史編さん委員会 1985年
- 16 大塚初重・小林三郎「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』第2巻第3号 1964年
- 17 茂木雅博「原古墳群」『茨城県史料』考古資料編 古墳時代 1974年
- 18 飯塚恵子・五十嵐至・田口一郎【鈴ノ宮遺跡】高崎市教育委員会 1978年
- 19 田口一郎他『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981年
- 20 巾隆之他『下郷』群馬県教育委員会 1980年
- 21 坂本和俊「鷲山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986年
- 22 坂本和俊他『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室 1986年
- 23 甘粕健・小野昭他『山谷古墳』巻町教育委員会 1984年
- 24 斎藤忠他『弘法山古墳』松本市教育委員会 1978年

2 大日塚古墳出土の小型素文鏡について

研究小史

今日まで数多くの研究者によって鏡の検討が行なわれてきた中で、素文鏡に関する論文は少ない。各報告書毎に若干の検討がなされているだけである。ここではまず、それらをひもとくことによって、「素文鏡」がどのように取り扱われてきたかを理解しよう。「素文鏡」と言う名称は大正15年刊の後藤守一氏著『漢式鏡』^{註1}の中に見える。この中で素文鏡出土の遺跡・古墳がいくつか紹介されている。昭和3年「奈良県三輪町山ノ神遺跡^{註2}の研究」の中で樋口清之氏は、「すなわち、素文鏡、土製品、石製品はいずれも祭祀の目的をもって作られたものである」とし、素文鏡が祭祀用の遺物であるとの性格付けがなされている。昭和13年には、山ノ神遺跡と同様の祭祀遺跡である南豆洗田遺跡の報告の中で、「鏡自らの内容は粗造品に属し、到底実用品とは考えられない。

即ち祭祀用に作られた儀鏡と呼ぶを適当とする。^{註3}とし、素文鏡＝儀鏡と位置付けた。さらに儀鏡は「後世王朝時代の・・・信仰関係遺品の中にその例が多い」と付け加え、奈良・平安時代に数多く出土していることを指摘した。昭和32～33年にかけて行なわれた和歌山県大谷古墳の発掘調査において約13面の素文鏡（鈴鏡を含む）が出土した。その報告書中、素文鏡を「特殊な副葬品」と捉え、「実用の鏡ではなく、それを模して作られた仮器^{註4}と他の鏡とは別に、模造品の一種との捉え方がなされる。昭和51年の平城京右京八条一坊十一坪の発掘調査で6面の素文鏡が出土した。報告書ではその内の4面を「唐式鏡」、2面を「儀鏡」と称し、素文であっても2タイプあるとしている。また、「小型鏡は『延喜式』の中で伊勢神宮の造宮関係の祭りや八十嶋祭の祭料にあがっている」とし、その用法も「櫛の枝にとり懸けて、祭場の表示、浄化といった機能を果たしていたのでは」と述べている。^{註5}昭和52年から始まった鳥取県長瀬高浜遺跡の報告において近藤滋氏は「その出土地は古墳、集落、祭祀遺跡等がありますが、古墳出土の素文鏡はほとんどが他の大・中型鏡とともに出土しており、小型素文鏡のみの例は祭祀遺跡に多い。」と指摘し、遺跡の種類によって素文鏡の出土状況が違うとしている。また、ここで注目されることは、今まで素文鏡の年代が古墳時代中期以降とされていたものが、古墳時代前期を含めて考えなければならないと提示したことである。昭和58年に調査された滋賀県下長遺跡の報告にあたった山崎秀二氏は、「三角縁神獸鏡を代表とする銅鏡の祭祀は大首長が大和連合政権に組み込まれた祭祀形態とするなら、小型倣製鏡は、その支配下の地方首長の祭祀の文物」で、素文鏡はその中でも「もっとも儀礼化した簡素な鏡^{註7}」と取り上げ、その社会的背景にまで言及している。このように今までのところ、素文鏡は、実用品としてではなく、祭祀用の儀礼化した鏡と捉えられている。

ところで、鏡について集成された後藤守一氏の『漢式鏡』、祭祀遺跡について集成された『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集^{註8}及び素文鏡を集めた『長瀬高浜遺跡』Ⅲ等から少なくとも約50にのぼる遺跡において素文鏡と呼ばれる鏡が出土している。そこでここでは、これらの資料を使って、素文鏡に関する大まかな傾向を捉え、その結果を基に、本古墳において唯一の副葬品である小型素文鏡の年代を考えてみたい。

まず、内容の検討に入る前に、素文鏡に対する定義を確認しておきたい。いくつかの概説書をみると、「鏡背に文様が表現されないものの総称^{註9}」「文様を何も持たないもので、直径5cm以下と非常に小さく、数も少ない。」とされている。とにかく「鏡背面に簡単な鈕のあるだけの素文の銅鏡^{註10}」のことである。但しその中には、沖の島例のように鏡面にやすり目が残ったり、平城京左京一条三坊例のように延板を切りぬいただけのもの^{註11}、いわゆる模造品的なものから、本古墳例のように鏡面をしっかりと磨きあげ小型ながらも鏡としての用を足し得るものなど製作手法の異なるものがある。また、大きさに関しては、現在までの資料収集の範囲では、石川県西山第3号墳^{註12}の10cmが最大であるが、第127図からもわかるように面径2cm～5cm未満に集中する。小型素文鏡という場合には、5cm未満が範囲となろう。但しここでは、5cm以上の数もさほど多くないことから資料操作の上では、第20・21表の55遺跡すべてを使用する。

No	遺跡名	所在地	遺跡の種類	面径(cm)	数	全高(mm)	形態	伴出遺物	時代	文献
1	仁位東浜遺跡	長崎県下県郡豊玉町仁位東浜	箱式石棺					鉄剣1, 細形銅剣2, 半球形飾金具	弥生	註6
2	原の辻遺跡	長崎県杵岐郡芦辺町深江原の辻	包含層	7.1	1	(5.0)	A II	こうもり座組片	弥生	註24
3	木さこがらし遺跡	佐賀県唐津市鏡東字木さこがらし						滑石製小白玉, ガラス小玉計2500		註6
4	小長崎1号墳	佐賀県唐津市柏崎長崎山	円墳(竪穴小石室)					へき玉製T字頭2, へき玉製管玉数個, ガラス小玉, 刀子		註6
5	潮見古墳	佐賀県武雄市武雄町潮見	円墳(横穴式石室)					へき玉製管玉, 桂甲, 刀子	6 C中	註9
6	柴屋橋下流遺構	佐賀県佐賀市蓮池町	包含層	4.2	1				弥生後	註6
7	沖ノ島祭祀遺跡	福岡県宗像郡大島村沖ノ島	祭祀遺跡	3.0	1	0.3	B II	武器, 雛形鉄刀, 鉄鏃, 銅鏃, 馬具, 滑石製品(白玉)	古墳後	註11
8	中小田古墳群2号墳	広島県広島市高陽町大字小田・中小田	円墳(竪穴式石室)		1			短甲, 剣, 刀, 鎌, 鏃	5 C後	註25
9	長瀬高浜遺跡	鳥取県羽合町長瀬字高浜	集落	1.9 2.4 2.5	1 1 1	(4.0) (5.0) (6.0)	B II A II A II	ガラス小玉, 剣先型鉄製品, 小銅鐸, 銅剣, 櫛歯文鏡, 内行花文鏡, 金銅製模造品, 石製模造品(鏡・有孔円板), 手づくね土器, 手焙り土器, 土鈴等	古墳前 ~中	註6
10	古郡家1号墳	鳥取県鳥取市古郡家字上ノ山	前方後円墳(粘土槨)	8.5	1			短甲, 剣, 鏃, 櫛, 土師器	古墳中	註26
11	谷尻遺跡	岡山県上房郡北房町上水田	集落	3.0	1	(6.0)	A II	土師器(高坏, 鼓形器台)	古墳前	註16
12	百間川遺跡	岡山県岡山市	集落	2.97	1	5.2	A II	小形丸底土器, 敲石, 滑石製白玉	古墳前	註17
13	大木遺跡	愛媛県越智郡魚島村松ノ浦	包含層		1			石製模造品(有孔円板), 鉄鏃, 土, 土師器	古墳中	註8
14	船越遺跡	香川県三豊郡託間町大浜	複合遺跡	約4	1					註27
15	谷の一古墳	兵庫県城崎郡日高町鶴岡太田	古墳	3.2	1			櫛歯文鏡, 切子玉, 銀環		註6
16	相坂古墳	兵庫県神崎郡香寺町相坂柏	円墳(竪穴式石室)	3.2	1			内行花文鏡, 刀, 鏃		註1
17	長越遺跡大溝	兵庫県姫路市飯田	溝	3.65	1	0.1	B II ?	石製模造品(有孔円板・まが玉・白玉・管玉・剣), 木製品(鳥形・魚形・刀子形), 弥生土器, 土師器	弥生後 ~古墳前	註19
18	吉田南遺跡	兵庫県神戸市西区森友1丁目	集落	2.8	1			船載内行花文鏡, 石製模造品(有孔円板・まが玉・白玉・)		註8
19	大蔵山遺跡	兵庫県神戸市大蔵山	集落					石鏃		註6
20	カトンボ山古墳	大阪府堺市百舌鳥赤	円墳(粘土槨)	4.5	1		A II	滑石製模造品, 鉄製品, 位至三公鏡	5 C中	註28
21	大谷古墳	和歌山県和歌山市大谷	前方後円墳	2.6 3.1 3.4	4 2 3	(3.0) (3.0)	B II B I B I	玉類, 垂飾付, 耳飾, 飾金具, 馬具, 冑, 短甲, 桂甲, 武器	5 C後	註4
22	大藪遺跡	京都府京都市南区久世	川		1			人面墨書土器, 木製人形, 土馬, 手づくね土器, カマド形土器, 齋申等	奈良	註8
23	大塚古墳	滋賀県野州郡栗東町川辺安養寺	古墳	9.3	1			二神二獸鏡, まが玉, 管玉, 巴形銅器, 琴柱形石製品		註6
24	下長遺跡	滋賀県守山市古高町	祭祀遺跡	3.7 2.6	1 1	5.8 5.5	A II A II		古墳中	註7
25	高溝・顔戸遺跡	滋賀県近江町	集落	3.3	2			重圏文鏡	古墳前	註29
26	西野遺跡	岐阜県不破郡垂井町		6.9	1			壺, 琴柱形石製品, 管玉, まが玉, 剣身		註1
27	佐紀池下層	奈良県奈良市佐紀町遺構S D 8520	溝	2.75	1	3.3	A II	土師器(床内式), 木製品(ナスビ形・農具・貼・ちぎり)	古墳前	註30
28	平城京跡小部門西	奈良県奈良市佐紀町	幹線水路		1			土馬, 人面墨書土器	奈良	註8
29	平城京左京一条三坊	奈良県奈良市法華寺東町	道路側溝	3.85	1	(3.3)	B II	多量の須恵器, 土師器, 木簡	奈良~ 平安	註12
30	平城京左京八条三坊九坪	奈良県奈良市九条町姫寺	道路側溝		1			青銅鈴, 土馬, 人面墨書土器, 齋申等	奈良	註8
31	平城京右京八条一坊十一坪	奈良県大和郡山田町	道路側溝	3.3 4.5	2 4	(4.7) (6.6)	B II A I	須恵器, 土師器, 黒色土器, 製塩土器, 皇朝銭, 帯金具	奈良~ 平安	註5
32	山ノ神遺跡	奈良県磯城郡桜井市三輪山ノ神	祭祀遺跡	3.0	1	(4.0)	B II	子持まが玉, 石製模造品, 土製模造品, 土師器, 須恵器	古墳中	註2

第20表 素文鏡一覽(1)

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

No	遺 跡 名	所 在 地	遺跡の種類	面径(cm)	数	全高(mm)	形態	伴 出 遺 物	時 代	文献
33	曾我遺跡	奈良県橿原市曾我町字佃	玉造遺跡	1.2	1			弥生土器片、縄せき文土器、須恵器、玉造関係遺物	古墳後	註31
				1.4	1					
				2.6	1					
34	安部寺跡	奈良県磯城郡桜井市安部	寺院跡	4.5	1				奈良	註6
35	土山遺跡	三重県名張市青蓮寺	祭祀遺跡		1			四獣鏡、石製模造品(有孔円板・まが玉・管玉・剣); 土師器	古墳	註8
36	斎宮跡	三重県多気郡明和町	宮殿、官衙		1				平安前	註8
37	西幡豆遺跡	愛知県幡豆町西幡豆	祭祀遺跡		2			海獣葡萄鏡等	奈良	註8
38	松原遺跡	福井県敦賀市松原			1			金銅製鈴、和銅開 等	奈良	註8
39	西山第3号墳	石川県加賀市辰口町高座	古墳	10.0	1			刀、剣、鏃、櫛、衝角付冑、短甲		註6
40	寺家遺跡	石川県羽咋市寺家町	祭祀遺跡	3.0	1		B II		奈良・平安	註20
				3.2	3	(6.0)	B II			
				3.35	1	(4.5)	B II			
				3.56	1	(7.0)	B II			
				3.6	1	(8.5)	B II			
				4.13	1	(7.0)	A I			
4.6	3	(5.0)	A I							
41	川柳將軍塚古墳	長野県長野市篠ノ井石川湯ノ入	前方後円墳(竪穴式石室)	3.1	1		A II ?	鏡、銅鏃、筒形銅器	古墳前	註23
42	殿村第1号墳	長野県下伊都郡下川路	円墳	4.2	1			四獣鏡、管玉、須恵器		註1
43	新豊院山D2号墳	静岡県磐田市	前方後円墳(竪穴式石室)	4.1	1		A II	三角縁神獣鏡、鉄剣、槍、刀子(棺内)、鉄鏃、銅鏃(棺外)	古墳前	註22
44	神明原・元宮川遺跡	静岡県静岡市大谷・西大谷・高松・水上・宮川	旧河川				B I			註33
45	中林2号墳	静岡県静岡市谷田下	円墳(横穴式石室)					須恵器、馬具、鏃、玉類、金環	古墳後	註6
46	宮脇遺跡	静岡県熱海市上多賀	祭祀遺跡	5.0	1	(6.5)	B I	変形六獣鏡、石製模造品、土馬、土製模造品、手づくね土器	古墳中	註32
				4.5	1	(5.0)	B I			
				4.3	1	(5.5)	B I			
				3.5	1	(5.0)	B I			
				3.3	1	(3.0)	B I			
47	井戸川町遺跡	静岡県伊東市和田町	集落					石製模造品(有孔円板・まが玉・管玉・小玉)、手づくね土器	古墳前	註8
48	洗田遺跡	静岡県加茂郡下田町	祭祀遺跡	4.3	1	5.5	A I	珠文鏡、石製模造品(有孔円板・まが玉・白玉・管玉)、土製模造品(鏡・円板・丸玉)、手づくね土器	古墳中～後	註3
49	根田第6号墳	千葉県市原市惣社789-1	円墳	2.7	1	(5.4)	A II	管玉、素環頭大刀、大刀、短剣、槍	古墳前	註15
50	南三島遺跡	茨城県竜ヶ崎市の	集落	2.9	1	6.0	A II	土師器	平安	註18
51	大日塚古墳	栃木県宇都宮市茂原	前方後方墳	2.6	1	5.7	A II	土師器	古墳前	
52	江曾島雷電山古墳	栃木県宇都宮市	古墳	4.4	1			石製品、土器、鏡	古墳中	註1
53	久保遺跡	群馬県富岡市曾木		約5.0	1		B II	子持玉、石製模造品(鏡・有孔円板・玉・白玉・剣・刀子・鏃)、手づくね土器	古墳後	註8
				約2.0	1		B II			
54	大塚古墳	群馬県高崎市若田町	古墳		1			石製模造品、刀、馬具、短甲		註34
55	八幡塚古墳	福島県国見町字塚野目	円墳(横穴式石室)					石製模造品、櫛	古墳後	註6

第21表 素文鏡一覧(2)

※〈〉は実測図よりの測定

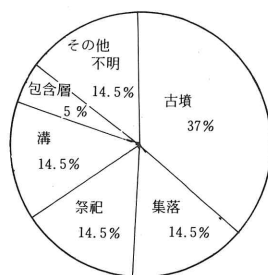
遺跡の種類

素文鏡の出土例は圧倒的に祭祀遺跡に多いように見受けられるが、第126図を見ると、古墳からの出土が2/5を占める。これは勿論、他の鏡のほとんどが古墳から出土しているのに比べれば割合的には少ない。第20・21表を見ると、その多くが円墳からの出土で、前方後円墳からの出土も4例あるが、前方後方墳からの出土は今のところ大日塚古墳のみである。但し、前方後円墳としたうちの^{註14}新豊院山D2号墳は前方後方墳の可能性もあるとのことである。埋葬施設に関しては、竪穴式石室、横穴式石室、粘土槨、木棺直葬と様々である。因みに、大日塚古墳と同様の埋葬方

法は、千葉県註15の根田6号墳である。伴出遺物を見ると、『長瀬高浜遺跡』Ⅲの中で述べられていたように他の鏡との出土例は、19例中8例となる。伴出遺物を大きく、装身具(玉・櫛等)、武器・

武具、農・工具、馬具、石製模造品、土師器・須恵器の6つに分けて傾向を見てみると、装身具(玉・櫛等)11例、武器・武具10例、農・工具5例、馬具3例、石製模造品5例、土師器・須恵器5例となり、特に玉類及び剣・鏃との共伴関係が多くみられる。

次に集落跡をみる。この中には長瀬高浜遺跡のように集落内に祭祀の場をもつ例を含み、必ずしも純粋な意味での集落跡出土とは言えないが、谷尻遺跡、百間川遺跡、南三島遺跡のように一般の住居跡内から出土する場合がある。谷尻遺跡17号住例は南西柱穴付近に鏡背を上面にした形で出土し、註16百間川遺跡21号住例は中央部の穴の中註17から鏡背を上面にして出土し、南三島遺跡38号住は北西側の壁溝中から出土している。前の2遺跡は共に岡山県例で、古墳時代前期に属する。さらに百間川遺跡について付け加えておくと、同遺跡の約3km北に吉備における最古の古墳と思われる備前車塚古墳(前方後方墳)が位置する。



第126図 遺跡の種類別割合

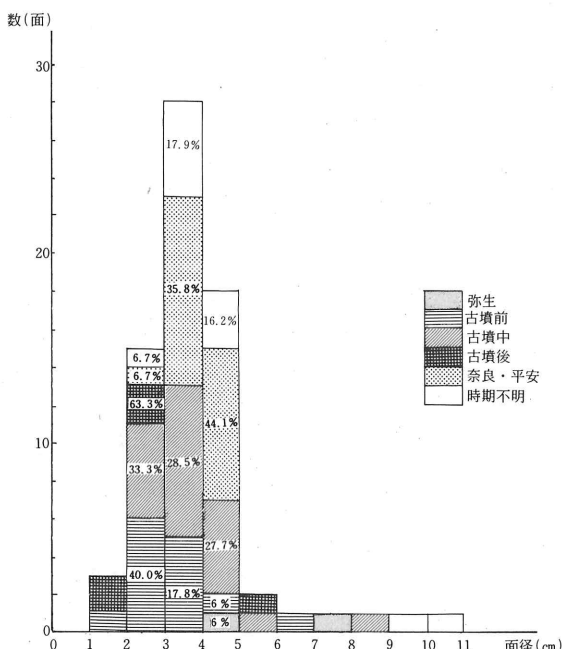
このことは大日塚古墳を考える場合非常に興味深い事である。

第126図で祭祀遺跡としたのは全体の1/5にも満たないが、実際のその遺跡の機能を考えるならば、この他の溝、包含層、複合遺跡、玉造遺跡及び集落内祭祀の場などが合わさり、全体のほぼ半数を占めることになり、祭祀関係遺跡からの素文鏡出土が多いことを改めて感じさせる。但しその祭祀が何に對するものであったかと言うと様々であり、ここでは深く言及しない。

形態

第127図の棒グラフは横軸に面径、縦軸に鏡の数をとり、面径1cm刻みにおける鏡の数を表したものである。また、その鏡の時期のわかるもの、特に2cm～5cm間においては時期別の割合を示しておいた。

前述したように、面径2cm以上5cm未満に集中する。その中でも3cm以上4cm未満は特に多い。それぞれの時代別の割合をみると、2cm以上3cm未満は、古墳時代前期のものが40%、中期が33.3%、後期・奈良・平安のものは20%である。3cm以上4cm未満は、奈良・平安の割合が増加し、前期、中期が減る。但し、中期は、割合としては減少しているが鏡の数は2cm以上3cm未満よりも増えている。



第127図 面径毎の面数及び時代別割合

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

4 cm以上5 cm未満は、やはり奈良・平安が44.4%と大きいですが、中期が3 cm以上4 cm未満とほぼ同じ割合を占めるものの、前期は極端に減少する。

さらに第128図のように横軸に面径、縦軸に総高(鏡の厚さ+鈕高)の傾向をみると、古墳時代前期出土が、面径2.5cm前後、総高が5 mm～6 mmとほぼかたまっているのに対して、中期以降になると面径、総高とも幅が広がり多様化してくる。

ここまでは数量的な面をみたが、次に報告書記載の図面などを基に下記のように形態分類を試みた。

鈕

A類 太い鈕 (平面形が円形及び長方形)

B類 扁平な鈕

縁

I類 三角縁もしくはそれに近いもの

II類 平縁もしくはそれに近いもの

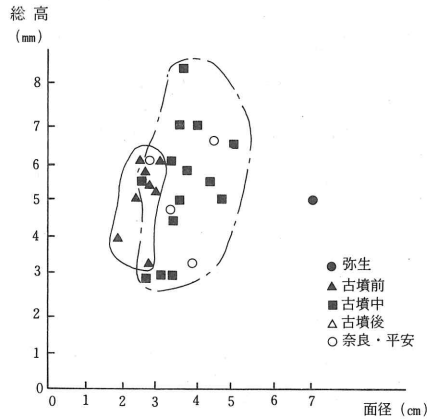
この分類に基づいて、第20・21表の形態のところに表示してみた。表でわかるように、古墳時代前期には長瀬高浜遺跡の1例と長越遺跡大溝例^{註19}を除いてA II類である。但し、長瀬高浜遺跡例は、3面のうちB II類としたものだけが13E地区土器群内と出土地を異にし、長瀬高浜遺自体の年代も前期～中期と若干の時間幅があることを付け加えておく。また、長越遺跡大溝例も肝腎の鈕の部分がないため鈕の付根の部分での判断であるが、全体的な形態も他の素文鏡と若干異なるように思われる。第129図にも示したが、根田6号墳例、長瀬高浜遺跡例、百間川遺跡例などは大日塚古墳例とかなり近い形態である。中期段階でA II類の他のA I類、B I類、B II類が出揃い、奈良・平安まで続くが、後出するほどにB類の割合は増加する。鈕は扁平化の傾向を示すが、奈良時代の段階で分類上A I類とした「唐式鏡」と呼ばれるタイプのものが出現する。また、平城京右京例、寺家遺跡例^{註20}からもわかるようにA I類とB II類がセット関係を示す。

分 布

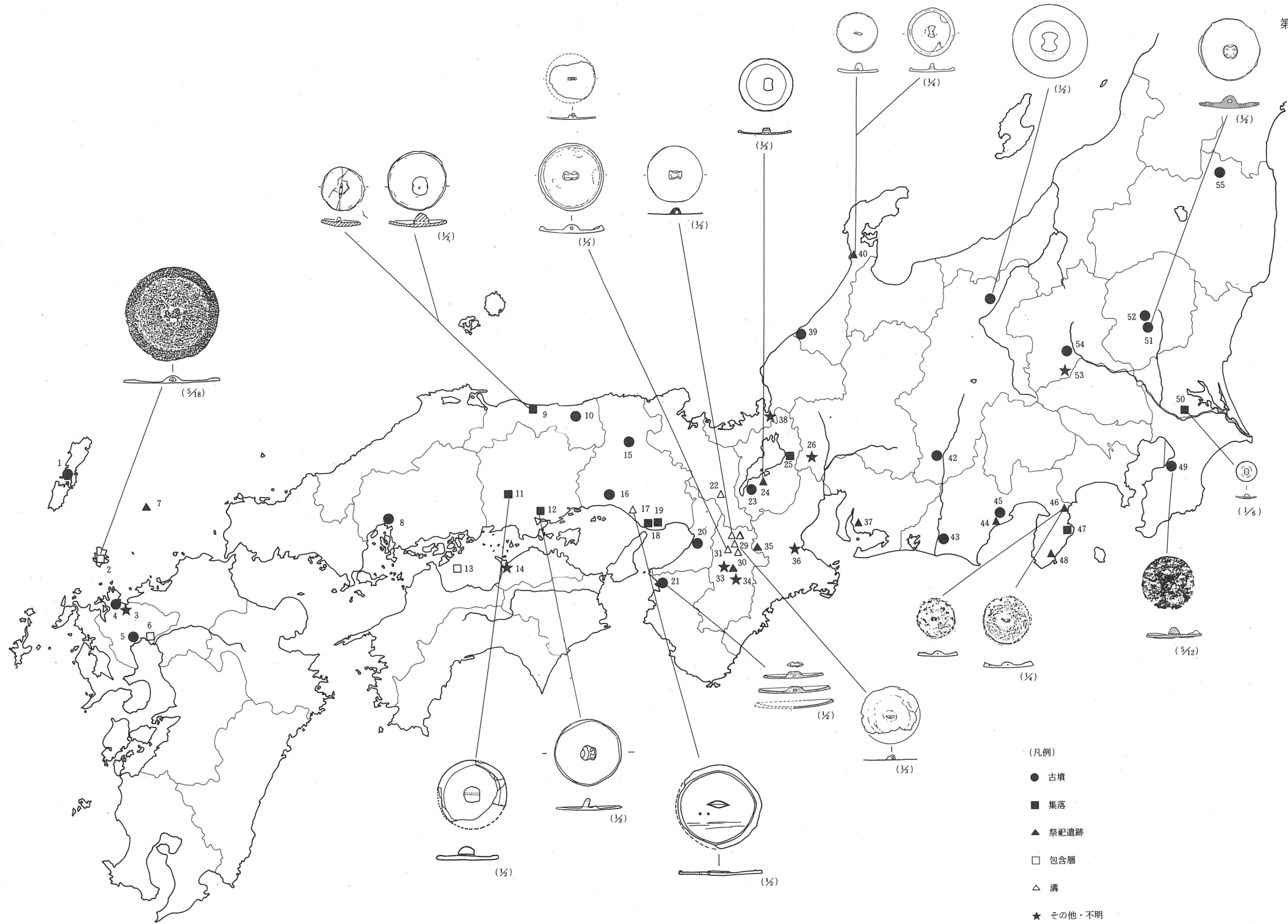
現在までのところ、素文鏡は北は福島県から南は佐賀県に至るまでの広い範囲にわたり分布することがわかる(第129図)。その中でも5つの集中地域がある。玄界灘の沿岸地域、瀬戸内海沿岸特に播磨灘周辺、奈良県、琵琶湖南東岸、伊豆半島周辺である。

弥生時代までに遡る例は原の辻遺跡例などをみてもわかるように玄界灘沿岸に限る。原の辻例は形態分類の上ではA II類としたが、内・外区の別が明確で、面径も他の素文鏡に比べると大きい。このことは、さらに詳細な検討が必要である。

古墳時代前期の段階でほぼ全国的分布である。前述のように、播磨灘周辺特に岡山県で素文鏡



第128図 総高と面径の比



第129図 素文鏡分布図

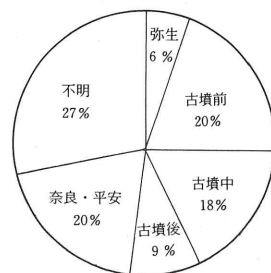
が住居跡から出土しているのに対し、東海以東ではすべて古墳出土である。因みに百間川遺跡の近くに前方後方墳の備前車塚古墳があるように、谷尻遺跡の南西約1kmのところにも古式の前方後方墳の荒木城御崎2号墳が、また長瀬高浜遺跡内にも前方後方墳が存在する。

古墳時代中期・後期とも、ほぼ前期と同様の分布をみるが、奈良・平安時代には、現在のところ平城京とその他の数か所だけになってくる。

まとめ

以上、遺跡の種類・鏡の形態・分布の3点から素文鏡の傾向の簡単な検討をしてみた。素文鏡の系譜をどのように迎えるか、これに関する言及は少ない。高倉氏は弥生時代の小型倣製鏡を8型式に分類し、その中で素文・無文鏡をとりあげている。ただ、高倉氏はこれらを「本来無文なのかあるいは鋳ながれ、摩滅によるものなのか明らかでない^{註21}」としている。その例として、第129図にも載せた原の辻遺跡例は、発見者によって内区図文を削られた痕跡があるとか、東の浜遺跡例は所在不明になっているなどを挙げている。このことから、弥生時代後期段階での素文鏡出現を考えるのはまだ問題がある。確実な存在は古墳時代前期段階である。前期の遺跡は11遺跡、その中で伴出遺物から時期を推定し得るものは、百間川遺跡、新豊院山D2号墳、根田6号墳、川柳將軍塚古墳がある。百間川遺跡21号住は、古墳時代前期をⅢ期に分けたうちのⅡ期（雄町13～14式）に属し、小形丸底土器を伴う。新豊院山D2号墳は34.3mの前方後円墳（前方後方墳の可能性もある）で、埋葬主体は礫粘土槨内に箱式木棺を埋設している。副葬品の中に三角縁四神四獣鏡、銅鏃などがあり、墳丘上から古式土師器が出土している。古式土師器は壺の破片で、それらの中には東海東部に分布を持つ大甍式土器が含まれている。同古墳は4C中ごろに位置付けられている。根田6号墳は墳丘径31mの円墳（前方後円墳の可能性あり）で、埋葬主体は2つあり木棺直葬である。素文鏡は第2主体部からの出土であり、その他の副葬品に管玉、素環頭大刀等がある。墳丘上や周溝内から古式土師器が出土し、その中に底部穿孔土器を含む。土器型式は五領Ⅱ式（4C後半）に位置付けられている。川柳將軍塚古墳は全長90mの前方後円墳で、埋葬主体は竪穴式石室である。副葬品には多数の鏡と銅鏃、筒形銅器などがある。4C後半に位置付けられている。これらのことから、素文鏡の出現が古墳時代前期段階まで遡ることはほぼ間違いない。但し、何度も言うように、弥生時代の小型倣製鏡との接点があるののかないのかは大きな問題であり、今後検討を重ねていかなければならないことである。

そこで、大日塚古墳例を考えると、面径2.7cm、高さ5.7cmと分類による前期のほぼ規格化された範囲内に入り、また形態分類上AⅡ類に属し、百間川遺跡例、根田6号墳例に類似する。さらに墳丘上から古式土師器が出土していることから考え合せると、本鏡の年代を4C後半段階に位置付けることに問題はないと思われる。



第130図 時代別遺跡数割合図

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

以上、素文鏡に関する若干の検討を行ったが、考えていかなければならないことはまだまだたくさんある。弥生時代の素文(無文)鏡との問題、古墳時代の素文鏡と奈良・平安時代の「唐式鏡」との関係、素文鏡の出土遺跡の性格、素文鏡鑄造の意義など数多くの問題が残されているが今後の資料の増加をまって、さらに考察を進めていきたい。

(註)

- 1 後藤守一『漢式鏡』雄山閣 1926
- 2 樋口清之「奈良県三輪町山ノ神遺跡研究」『考古学雑誌』18の12 1928
- 3 大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹「南豆洗田の祭祀遺蹟」『考古学雑誌』28の3 1938
- 4 樋口隆康他『大谷古墳』和歌山県教育委員会 1959
- 5 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』 1984
- 6 清水真一他『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅲ(勸鳥取県教育文化財団 1981
- 7 守山市教育委員会『守山市文化財調査報告書』第19冊 1985
- 8 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集附編 1985
- 9 大塚初重・小林三郎編『古墳辞典』東京堂出版 1984
- 10 村井嘉雄・望月幹夫・松尾昌彦『古墳の知識』Ⅱ出土品 東京美術 1988
- 11 宗像神社復興期成会『沖ノ島』吉川弘文館 1986
- 12 奈良国立文化財研究所『平城京発掘調査報告Ⅵ—平城京左京一条三坊の発掘調査報告書』(『奈良国立文化財研究所学報』第23冊) 1974
- 13 註6に同じ
- 14 第25回埋蔵文化財研究集会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅳ冊—東海以東篇—埋蔵文化財研究会 1989
- 15 米田耕之助「根田遺跡」『叻市原市文化財センター年報』昭和60年度(叻市原市文化財センター 1985
- 16 北房町教育委員会『谷尻遺跡赤茂地区』 1986
- 17 建設省岡山河川工事事務所、岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』59 1985
- 18 (勸茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』18 1989
- 19 松下勝他『播磨長越遺跡』(兵庫県文化財調査報告書)12) 1978
- 20 石川県埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 1988
- 21 高倉洋彰「弥生時代の小型倣製鏡について」『考古学雑誌』58—3 1972
- 22 磐田市教育委員会『新豊院山墳墓群D地点調査報告』 1982
- 23 森本六爾『川柳將軍塚古墳の研究』 1929 岡書院 同復刻本 1978 信毎書籍センター
- 24 埋蔵文化財研究会第20回研究集会『弥生時代の青銅器とその共伴関係』第Ⅰ分冊—九州篇—埋蔵文化財研究会 1989
- 25 潮見浩編『中小田古墳群』広島県教育委員会、広島大学考古学研究会 1980

- 26 古都家1号墳調査団「美和古墳群」『ひすい』85～100 佐々木古代文化研究会 1961
- 27 亀井正道「祭祀遺跡—製塩に関連して—」『新版考古学講座』8 1971
- 28 森浩一・宮川渉『カトンボ山古墳の研究』古代学叢刊第1冊 古代学研究会 1953
- 29 森岡秀人「銅鏡」『季刊考古学』第27号 雄山閣 1989
- 30 奈良国立文化財研究所「佐紀池の調査」『昭和51年度平城京跡発掘調査部発掘調査概報』 1977
- 31 関川尚功他「曾我遺跡」『奈良県遺跡調査概報第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所 1983
- 32 外岡龍二「伊豆の祭祀遺跡」『駿豆考古』第20・21合併号 1978
- 33 財団法人埋蔵文化財調査研究所「大谷川」Ⅱ（遺溝編） 1987
- 34 梅沢重昭「群馬県地域における初期古墳の成立(2)」『群馬県史研究』第3号 群馬県史編さん委員会 1976

3 大日塚古墳出土土器について

今回の調査において、墳丘下及び古墳周辺から4軒の竪穴式住居跡を確認できた。調査対象が古墳であったため、墳丘下及び周辺にあるであろう集落跡の全体像を掴むには至らなかったが、古墳築造とかなり近接した時期のものであるという点、また、土器構成の中に他地方の弥生土器の系譜を引くものを含むという点で考えるべきことは多い。前者に関していうならば、近接する愛宕塚古墳と違って、確実にこの古墳に伴うであろう土器がはっきりしないことから、この古墳の年代を考える場合、墳丘下住居跡の年代を上限とし、それを遡ることはないという言い方が一番事実を即している。つまり、この墳丘下の住居跡の年代を考えることが、この古墳の年代を考えることに繋がることになる。また、後者の土器構成を考えることは、その古墳を造ったであろう生産母体の系譜を考えることにも繋がる。このような問題を念頭に置きながら、住居跡出土土器について述べてみる。

(1) 住居跡出土土器について

4軒の竪穴住居のうち3号住の土器内容についてはほとんどわからないため、残りの3軒についてその時間的位置づけを試みたい。

まず、3軒の住居跡の先後関係について検討した後で、時間的位置付けをしてみたい。

甕は、S字甕、単口辺台付甕、平底甕に分けられる。

S字甕——4号住からの出土はないが、1号住、2号住で出土している。共通して存在するのは台部のみで、1号住の5も2号住の4～7両方とも端部に折り返しをもつもので同様のタイプである。口辺部は2号住からだけの出土である。S字甕については、多くの分類、編年案が示されているので、ここで少し述べてみる。1は、赤塚分類^{註1}のB類、小森分類^{註2}のⅡ類にあたり、2は赤塚分類のC類、小森分類のⅢ類にあたる。赤塚分類は、S字甕の本場である濃尾平野を取り扱っており、小森分類は、本県のS字甕を取り扱ったものである。赤塚氏は、「S字甕はB類にいたり広く東国・畿内へ拡散する」「S字甕の移動には定着型の傾向が見られ、特定集団の移動

を含めて人々の漂泊性とその底流に認められる。」と指摘していることは注目される。^{註3}また、2号住においてB類とC類が共伴するわけであるが、これに関しては、小森が本県谷近台遺跡の例を取り上げ、「^{註3}时期的に一時期併行する可能性がある」とし「土器が古相のものから新相のものへ一時期重複」した段階としている。

また、3もS字甕の範疇に入ると考えられる。その口辺形状は受け口状を呈す。埼玉県神川村前組羽倉遺跡第2号住居跡出土のものも同様の受け口状を呈す。利根川氏は、この報告の中でこれを「^{註4}近江系受け口状口縁の影響下にあり」と説明している。ただ、3は器面仕上げがS字甕と同様であることから、ここではS字甕の範疇でとらえておきたい。付言すれば、前組羽倉遺跡第2号住居跡からは、本跡同様樽式土器が出土している。因みに、利根川氏はこの住居跡を五領式土器の範疇に入るものの弥生時代～古墳時代にかけて移行期の所産としてとらえている。

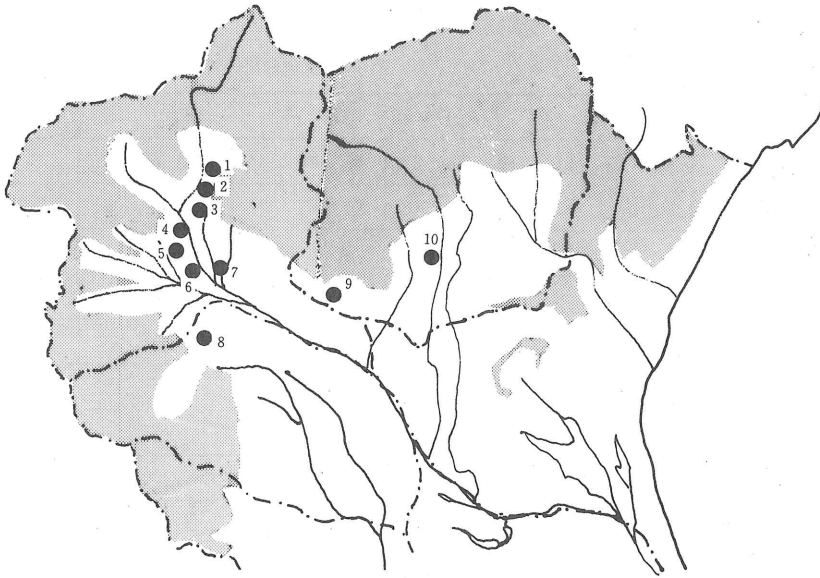
単口辺台付甕——1号住2、4と2号住8、9、15と4号住2が挙げられる。全体的器形がわかるものがないため何とも言えないが、口辺部を比較してみると、1号住の2も2号住の8、9とも仕上げが、内外面ハケ後ヨコナデをしている点、台部はいずれも断面形が内湾するタイプである点、共通する要素が多い。

平底甕——1号住の1と2号住の10～14が挙げられる。12は全体的な器形がわからないが、底部から胴部にかけて直線的に延び、胴部上半に最大径をもつと思われる。本県においては、大平町伯仲遺跡 SI-06、SK-13に類例が求められる。SI-06出土のものは、口辺部～胴部上半にかけて単節斜縄文を三段に施文した土器である。報告にあたった藤田氏によれば、「タテハケの存在・縄文施文部位が上半までしか及ばない」などの点を挙げ、「赤井戸の色彩をより強く残しながら土師の様相をもった土器」として紹介されている。^{註5}所謂、県内において移行期の土器として取り挙げられているものである。13は底部に木葉痕を一部残しあとはナデ消している。10、11は樽式系土器の範疇に入る土器として捉えられる。樽式土器は相京・三宅両氏によってⅣ期に分けられているが、本跡出土のものは、そのうち樽Ⅳ期にあたると思われる。すなわち、Ⅳ期の指標として、甕の文様は口辺部上半波状文、口辺部下半波状文で、頸部2連～多連止め簾状文、胴部は波状文を数段施文するかあるいは無文である。^{註6}ちなみにこれは、榛名東南麓地域の特徴である。本跡出土のものは、口辺部に2段の波状文、頸部3連止め簾状文、胴部は無文である。この他にも、本跡の14は色調が黒光りするような赤褐色で、磨きも入念になされている点、その系統のものと思われる。また、盛土内出土土器のものも波状文こそ施さないが樽式系の壺の折り返し口辺部と考えられる。現在、県内における樽式土器の出土例は本跡を入れて9か所確認され、その分布範囲は本跡を含む茂原地域と樽式土器の本場である群馬県に近い足利地方に集中している。

これに対し、1号住の1は、器形の点から言えばやはり伯仲遺跡の SI-10出土土器に近く、弥生的である。ここで注目すべき点は、在地の弥生時代後期の二軒屋式土器のプロポジションをとらずに、群馬県の樽式或いは赤井戸式のプロポジションをとる点である。次に、仕上げ法では、胴部下半のヘラ削りは樽Ⅳ期、赤井戸Ⅲ期の段階にみられるが、口辺部～胴部中位にかけての櫛

状工具(2~3条)による仕上げは、いまのところ類例を見ない。また、内面は胴部上半~口辺部の一部にかけてへラ磨きが施されている。外面粗い作りのわりに内面に磨きを施す点注目しておきたい。

ここまで甕について述べてきたところで、S字甕と樽式土器の共伴関係について少し詳しく検討してみたい。



第131図 S字・樽共伴遺跡分布図

No	遺跡名	所在地	備考	文献
1	舛海戸遺跡	群馬県利根川場村大字門前	住居跡3軒	註9
2	高野原遺跡	◇ 利根川場村・沼田市	住居跡12軒	註9
3	糸井宮前遺跡	◇ 利根郡昭和村大字糸井	住居跡35軒(古墳前期)	註10
4	有馬遺跡	◇ 渋川市	住居跡, 礎床墓	註8
5	熊野堂遺跡	◇ 高崎市大八木町字熊野堂	住居跡(弥3, 古前期1)	註7
6	新保遺跡	◇ 高崎市新保町	住居跡, 周溝墓	註32
7	堤東遺跡	◇ 前橋市荒子町堤東	周溝墓(前方後方形含)3	註33
8	前組羽倉遺跡	埼玉県児玉郡神川村新里字前組	住居跡3軒, 周溝墓6基	註4
9	菅田西根遺跡	栃木県足利市菅田町字西根	住居跡9軒, 周溝墓7基	註34
10	大日塚墳丘下	◇ 宇都宮市茂原町	住居跡4軒	本書

第22表 S字・樽共伴遺跡一覧

現在までのところ2号住居跡のように、S字甕と樽式土器が1遺跡内で共伴する例は第22表に示すとおり10例を数える。この中で2号住居跡と同様に一住居跡内で共伴している例は、群馬県内において3例ある。

その中で熊野堂8号住例が一番早い時期のものである。本跡は南北に長軸をもつ隅丸長方形の住居跡で、報告書では弥生時代の中で取り扱われている。ここでは、樽系の甕とS字甕の口辺部破片が共伴している。S字甕は口辺部に刺突文をもち、頸部外面に平行横線文を施しているもので、飯塚卓二氏は「大参義一氏の分類によるA類」としている。^{註7}

浅間C降下

畿内	都出編年	庄内古	庄内新	布留古		
	石野編年	纏向1	纏向2	纏向3	纏向4	
			庄内1	庄内2	庄内3	
愛知	加納編年	欠山新	元屋敷古	元屋敷中		
千葉		I	II	III	IV	V
栃木		弥生	III	IV	V	
群馬	橋本・田口編年		I	II	III	IV
	相京・三宅編年		樽 IV			
	小島編年		赤井戸 II	赤井戸 III		
	田口(S字)編年		I	II	III	IV
遺跡名	新保遺跡	158号住(樽)		141号住(S II-b)		
	堤東遺跡				1号周溝墓→2号周溝墓(樽)	(S III)
	糸井宮前遺跡					1期→2期(樽・S III-b, IV-b, c)
	有馬遺跡			82号住(樽・S II-b)		
	熊野堂遺跡		8号住(樽・S I)	9号住(パレス壺)		
	高野原遺跡		6号住(樽)	5号住(S?)		
	舩海戸遺跡					2号住(樽・S II-b?)
	前組羽倉遺跡	1号住→3号住(樽)		2号住(樽)		6号住溝墓(S II-b?)
	菅田西根遺跡		1号住(樽)		3号住(S III-a)	
	大日塚古墳墳丘下			2号住(樽・S II-b, III-a)		

第23表 S字・樽共伴遺跡関係表

これよりも後出した例として、有馬遺跡82号住が挙げられる。ここでは、S字甕と樽式の高坏が共伴している。S字甕は田口分類のⅡ類にあたる。この他に北陸系月影式の甕が共伴していることから畿内との平行関係が考えられ、この住居跡は庄内に比定されるだろうとのことである。また、友廣哲也氏は、土層断面図から「C軽石が示すものは少なくとも有馬遺跡では樽式土器が古式土師器へと変化した以後にC軽石が降下したのである」とし、さらに「C軽石の降下は少なくとも4世紀初頭を下ることはない。」と付け加えている。^{註8}

さらに、後出した段階の例としては舩海戸遺跡2号住が挙げられる。ここではS字甕樽式の甕が共伴している。S字甕は田口分類のⅣ類にあたる。^{註9}

これらの他に、直接の共伴関係はないが、一集落内において同一時期にS字甕と樽式土器を使用した例として、糸井宮前遺跡が挙げられる。報告書によれば、本集落は住居跡の構造から2時期に分けられている。その両時期にまたがってS字甕をもつ住居跡と樽式土器をもつ住居跡とが併存する。関根慎二氏は、S字甕は田口分類のⅢ-b、Ⅳ-b、c類にあたり、「それぞれ田口氏のⅣ期、Ⅴ期に相当し、赤井戸式土器のⅢ期に矛盾しない。」と述べている。^{註10} ちなみに、同一住居跡内でS字甕と樽式土器の共伴がみられない代わりに、赤井戸式土器と共伴関係がみられる点は注目すべき点である。

新保遺跡、高野原遺跡、堤東遺跡、前組羽倉遺跡、菅田西根遺跡の5例は、同一遺跡内での樽式土器とS字甕がみられる例である。若干の時間差はあるが、各遺跡とも樽式土器が終焉しS字甕が使用されるようになる。

以上、大日塚古墳墳丘下2号住居跡のように、S字甕と樽式土器が共伴する例は現在のところ群馬県の3例だけである。ただし、本跡のように樽式土器とS字甕のⅡ・Ⅲ類が共伴する例は今のところない。ただ、考えられることは、群馬県特に高崎市周辺において、熊野堂遺跡8号住の段階にはすでにS字甕を持った外来集団と樽式土器を使用していた在地集団が何らかの形（平和的か征服的か）で接触し始めた。そして少なくとも今のところ、糸井宮前遺跡の段階までこれが続く。この影響がその期間内に本跡を含む茂原周辺に及ぼされる。それがどのような形のものであったかは推測の域を出るものでない。但し、間違いなく人の動きはあり、それも今まで言われてきた「東海道ルート」でなく、藤田氏などが指摘するように「群馬方面」からのものである。^{註11}

壺——1号住の3、6～8と2号住の17～21が挙げられる。これらはそれぞれ大型、小型品に分けられる。大型品は1号住の3と6が球形の胴部で仕上げが粗いのに対し、2号住の17～20と入念なヘラ磨きが施され、17、18は同一個体と考えられ胴部下半に明瞭な稜をもち、また19は口縁が内湾する広口壺で、20がやはり口辺が内湾気味に立ち上がり口縁部に面取りをもつヒサゴ壺と、この壺類に関しては東海系の色彩が濃い。小型品は1号住の7、8胴部下半に明瞭な稜を有する点2号住の大型品と同様で、2号住は20の小型品であるヒサゴ壺が出土している。

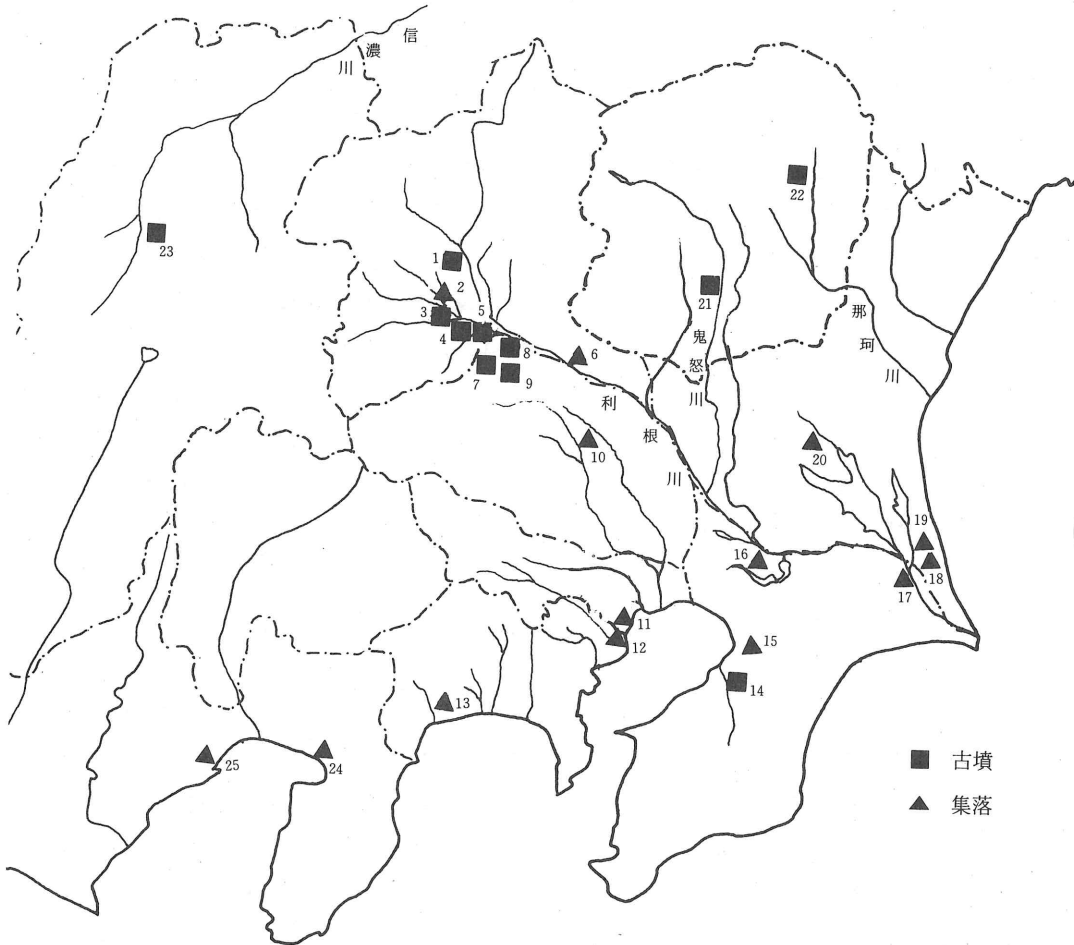
器台——1号住の9と2号住の22と2号住の1が挙げられる。いずれも小型で受皿部に稜をもたないタイプであるが、2号住の22は受皿部中央に貫通孔をもたない。

この他の器種として2号住に高杯が出土している。脚部のみであるが、裾が大きく広がるタイプである。県内では、駒形大塚古墳^{註12}、烏森遺跡^{註13}などの類例を見いだせる。

以上、3軒を比較してきた。4号住に関しては土器が2点しかでていないので比較対象とするには資料的に不十分であったが、ここにあげておいた3軒についてはほぼ同時期の所産と考えておきたい。特に1号住と2号住の2軒に関しては、その器種構成において、両者とも櫛描文文化圏の中でも樽式土器文化圏の影響を残しつつ、その中に新しい時代の潮流として外来系（特に東海西部系）が共伴している事実が挙げられる。このことから考えると両跡はほとんど同時期のものと考えられ、しかも、弥生～古墳時代への移行期（昭和56年シンポジウムにおける3期^{註14}）のものと考えることができる。

(2) 古墳出土土器について

第4章でも述べたように、古墳からは多数の破片が出土しているが、確実に古墳に伴うと考え



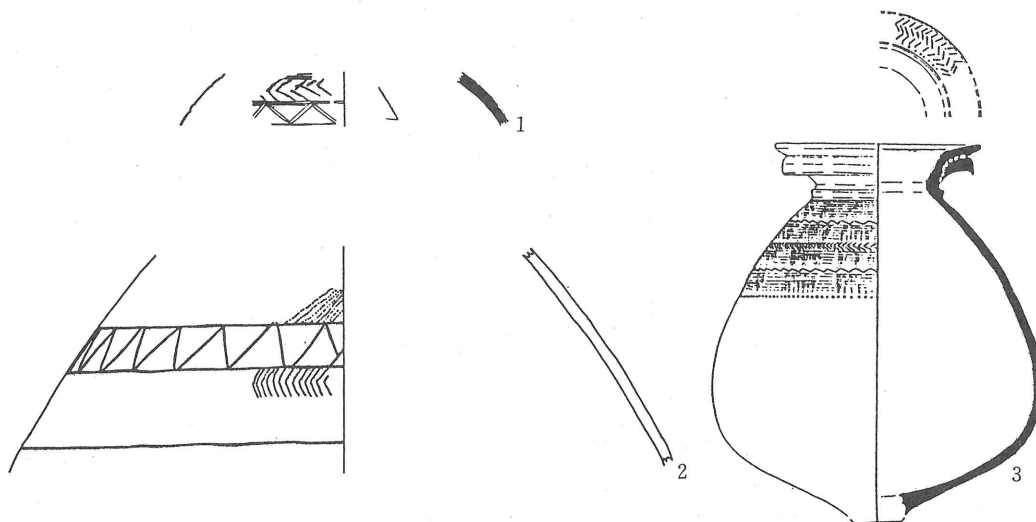
第132図 「壺E類」分布図

No	遺跡名	所在地	遺跡の種類	口辺形態	突帯	胴部文様構成	赤彩	田口分類	備考	文献
1	中村遺跡	◇ 渋川市	円形周溝墓	I	○	A-b-A-b-C	○	A II		註20
2	熊野堂遺跡	◇ 高崎市	集落	?	?	A-B-A-B-A-B	○	A I	(9号住)	註7
3	貝沢柳町遺跡	群馬県高崎市貝沢町	方形周溝墓	I	○	B-A-B-A-B-A-C	○	A II	(1号墓)	註21
				II	○	B-A-B-A-B-A-C	○	B	(◇)	
				II	○	A-E-a-b-a-b	○	B	(2号墓)	
4	元島名将軍塚古墳	◇ 高崎市元島名	前方後方墳	?	?	A-b-A-b-A-b-A-C	×	A III		註22
5	箱石浅間山古墳	◇ 玉村町	方墳	II	?	?-A-b-A-b-A-?	○	C		註23
6	御正作遺跡	◇ 邑楽郡大泉町	集落	I	×	A-b-A-b-A	○	C	(4号住)	註17
				?	?	A-D-A-b-A			(No 2区)	
7	生野山古墳群	◇ ◇ ◇	方形周溝墓	?	○	B-A-B-?			S字共伴	註24
8	村後遺跡	◇	方形周溝墓	II	●	A-b-b	○	C	(1号墓)	註25
9	南志渡川遺跡	埼玉県児玉郡児玉町	方形周溝墓	II	×	A-B-A-C		B I	(5号墓)	註16
				I	×	A-B-A-B-A-B-A-B-A-C		B I	(4号墓)	
				I	×	A-B-A-B-A	○	A I		
				II	×	A-B-A-A-A-C	○	A II	(1号墓)	
10	下閻遺跡	◇ 鴻巣市滝馬室	集落	I	○	A-B-A-B-A-C	○	A I	(5号住)	註26
11	山王遺跡	東京都大田区山王	集落	?	?	A-B-A-B-A				註16
12	久ヶ原遺跡	◇	集落	I	×	A-B-A-B				註16
13	千代遺跡	神奈川県小田原市千代	集落	?	×	A-B-A-B-A-B	○			註16
14	長平台遺跡	千葉県市原市総社	方墳	I	○	C-A-B-A-B-A-C	○	C	(289号墓)	註27
				I	○	A-B-?	○	A I	(288号墓)	
15	東寺山石神遺跡	◇	集落	?	?	a-b-b-A	×	C		註28
16	舟尾町田遺跡	◇	集落	II	○	C-B-A-B-A-B-A-C	○	B II	(Hグリッド)	註29
17	阿玉台北遺跡	◇	集落	?	?	E-A-B-E-C	○	C	(021号住)	註30
18	ふたご塚遺跡	茨城県鹿島郡鹿島町	集落	I	×	A-B-A-B-A-C		A II		註16
19	木滝台遺跡	◇ ◇ ◇	集落	I	○	A-B-A-B-A		A II		註16
20	松延遺跡		集落	I	×	C-b-C		C		註16
21	大日塚古墳	栃木県宇都宮市茂原町	前方後方墳	?	?	A-b-A-D-b-A	○	C		
22	下侍塚古墳	◇ 湯津上村	前方後方墳	?	?	b-A-?	○			註31
23	弘法山古墳	長野県松本市出川	前方後方墳	II	○	A-B-A-B-A-C	○			註15
24	御幸町遺跡	静岡県沼津市御幸町	集落				×			註15
25	下野遺跡	◇ 清水市下野	旧河道	?	?	C-a-b-a-D-b				註18

(註)

- 口辺形態については、次のような簡単な分類をした。I口辺部外面は厚く、ほぼ垂直な面をもつ。II有段口辺(いわゆる二重口辺)。?口辺部欠落のもの
- 突帯が有るものは○、無いものは×、わからないものは?とした。●は突帯に刻目のあるもの。
- 胴部の文様については、次のように記号で表した。A平行線文、a一条の横線文、B山形文(櫛状工具による)、b山形文(ヘラ描きによる)、C刺突文、D綾杉文、E波状文
- 赤彩は部分的にでも施されてあるものは○、まったく無いものが×とした。
- 田口分類は、田口氏が、「パレス・スタイル壺の末裔たち」の中で分類したものをそのまま引用した。

第24表 胴部文様に山形文をもつ東海系壺一覧



第133図 胴部に山形文と綾杉文をもつ壺
(1, 御正作遺跡 2, 下野遺跡 3, 勸学院遺跡)

られる土器は少ない。第55図に示した中のAランクとしたものがそれである。但し、墳丘下に集落跡があったこと、またトレンチ調査であることから問題が複雑になるわけである。そのため、ここで土器の検討が直接古墳の年代に結びつくかは問題である。あくまでも前述したように、墳丘下の住居跡の年代を上限とし、それを遡ることがないという言い方が一番事実在即しているわけであり、1での検討でその上限も考えてみた。

そこで、あくまでも可能性の追求ということになってしまうわけであるが、Aランクの土器、特に東海系壺を検討することによって、さらに古墳の年代を考える上での補強材としたい。

Aランクに挙げた土器には、東海系壺、小型高坏、碗が挙げられる。

その中の東海系壺について見てみる。東海系壺にも本古墳においては2種類ある。1つは文様に円弧文を持つもので埼玉県五領遺跡にその例を見ることができる。もう一方は文様に山形文をもつもので、浅井和宏氏の言う「パレススタイル壺E類」^{註15}に属し、その類例も多い。この種の壺に関する検討は田口氏が詳しく行なっているので、それを参考に考えてみる。^{註16}第24表に示したようにこの範疇に入るものは関東地方において今のところ22例である。大日塚古墳のように墳墓例は10例あり、前方後方墳も3例ある。これらは第132図からもわかるように北関東特に西部に集中する。田口氏は、この墳墓出土例について「濃尾平野から、それぞれの地に定着し、そして死んでいった人々に対してその集団の象徴である装飾壺が鎮魂の器として使われたと考える」と述べている。^{註16}また、田口氏は関東におけるこの種の壺の分類、編年を行なっている。そこで、烏川・井野川地域においては、熊野堂9号住(壺A-I類)段階、S字甕編年I~II期段階に出現し、S字甕V期の段階にその終焉を迎えるとしている。そして大日塚古墳のようなC形式はA-III類とほぼ同じ時期であるとしている。

大日塚古墳例は胴部形態が下膨れ気味で古い様相を残す。赤色塗彩に関しては、山形文部分にのみ胴部下半に施していない点原則から外れている。胴部文様形態においても、平行線文と山形文の間に綾杉文を施している点は「E類」の範疇から外れる。このような例は群馬県御正作遺跡^{註17}、静岡県下野遺跡^{註18}、滋賀県歎学院遺跡^{註19}の3例がある（第133図参照）。御正作遺跡と下野遺跡例は山形文と平行線文の間に櫛状工具の刺突による綾杉文をもつという点で大日塚古墳例と共通するが、両者とも平行線文部分がヘラ描きによる1条の横線文であり、大日塚古墳例と異なる。これに対し、歎学院遺跡 SX 5 出土のものは胴部文様帯に関しては近似しているが、器形の点で違いを見せる。ちなみに歎学院遺跡は、滋賀県近江八幡市に所在し方墳と考えられているもので、共伴遺物に甕、高坏、手あぶり型土器が出土している。

住居跡出土土器の検討から、北関東西部地方との関連が考えられたわけであるが、東海西部系壺の分布状況からみても、北関東西部地方との関連が考えられそうである。これらのことから考えると、当茂原地域への土師器の波及は、北関東西部地方(特に高崎市周辺地域)との交流の中で行なわれたと思われる。時期的には、田口氏が烏川・井野川流域で検討しているS字甕Ⅱ～Ⅲ期以降に「パレス壺」Ⅲ期という図式が、2号住→大日塚古墳という流れにもあてはまる。

(註)

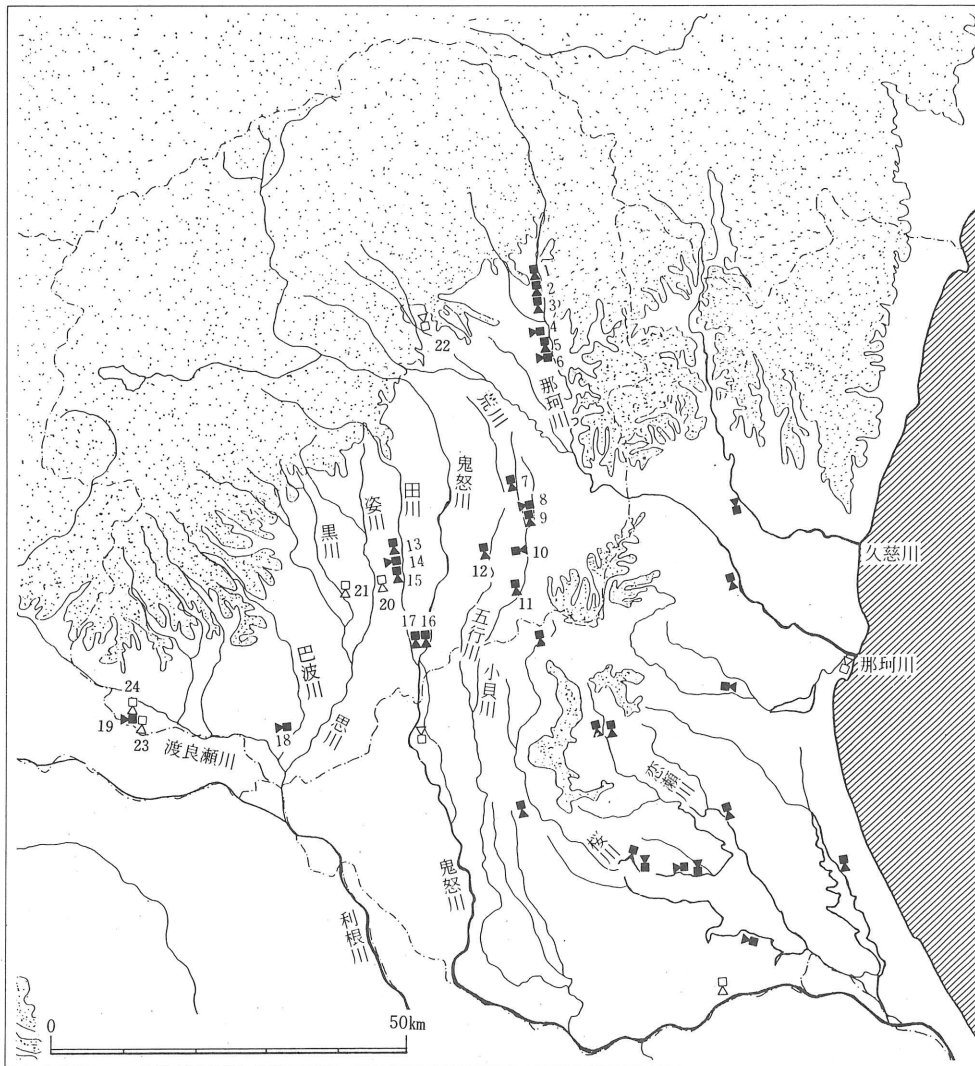
- 1 赤塚次郎「“S字甕”覚書 '85」『愛知県埋蔵文化財センター年報』
- 2 小森紀男「古墳出現期における外来系土器の検討—栃木県内出土例を中心として—」『栃木県考古学会誌』第10集 栃木県考古学会 1988
- 3 赤塚次郎「逍遙する土器」『欠山式とその前後 研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 1987
- 4 書上元博, 柿沼幹夫, 駒宮史朗, 坂本和俊, 関義則, 利根川章彦「神川村前組羽倉遺跡研究」『埼玉県立博物館紀要』-12 1985
- 5 藤田典夫ほか『伯仲遺跡』栃木県教育委員会 1984
- 6 三宅敦気, 相京健史「樽式土器の分類—榛名山東南麓を中心として—」『弥生終末期の土器 四世紀の土器』第3回三県弥生時代シンポジウム群馬県資料 1982
- 7 財群馬県埋蔵文化財調査事業団『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』 1984
- 8 友廣哲也「古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石」『群馬の考古学』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- 9 群馬県教育委員会, (財群馬県埋蔵文化財調査事業団『門前橋詰・外海戸遺跡・高野遺跡』—(財群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第83集公共開発関連出土品等整理報告書 1989
- 10 群馬県教育委員会, (財群馬県埋蔵文化財調査事業団『糸井宮前遺跡Ⅰ』 1985
- 11 藤田典夫「栃木県市貝町下椎谷の古式土師器」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会 1989
- 12 三木文雄『那須駒形大塚』小川町教育委員会 1986
- 13 田代隆ほか『烏森遺跡』(財栃木県文化振興事業団 1986

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

- 14 日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウムⅡ「関東における古墳出現期の諸問題」資料 1981
- 15 浅井和宏「〈宮廷式土器〉について」『欠山式とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- 16 田口一郎「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式とその前後 研究・報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 1987
- 17 車崎正彦ほか『御正作遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』大泉町教育委員会 1984
- 18 建設省中部地方建設局, 静岡県教育委員会, 清水市教育委員会『下野遺跡』1985
- 19 埋蔵文化財研究会『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第Ⅲ分冊—近畿編—第25回埋蔵文化財研究集会 1989
- 20 五十嵐信ほか『中村遺跡』渋川市教育委員会ほか 1986
- 21 久保泰博ほか『貝沢柳町遺跡』高崎市教育委員会 1986
- 22 田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981
- 23 平野進一「箱石浅間古墳」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所ほか 1984
- 24 山川守男「上武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」『古墳出現期の地域性』千曲川水系古代文化研究所ほか 1984
- 25 細田勝ほか『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財事業団 1981
- 26 山崎武ほか『下閭遺跡』鴻巣市遺跡調査会 1981
- 27 白井久美子ほか「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会 1982
- 28 沼沢豊ほか『東寺山石神遺跡』千葉県文化財センター 1977
- 29 田坂浩ほか「舟尾町田遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター 1984
- 30 矢戸三男ほか『阿玉台北遺跡』房総考古学資料刊行会 1975
- 31 大金宣亮ほか『下侍塚周濠発掘調査概報』湯津上村教育委員会 1976
- 32 群馬県教育委員会, 財群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡Ⅱ—関越自動車(新潟線)埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』1988
- 33 群馬県教育委員会『堤東遺跡』1985
- 34 足利市遺跡調査団, 足利市教育委員会『菅田西根遺跡』1987

第3章 下野における古墳出現期の様相

古墳は、一定の領域を支配する首長の墳墓であるが、その領域は河川の領域を単位とする。下(毛)野において出現期の古墳が分布する地域は、①県北東部の那珂川上流域、②県南東部の小貝川・五行川流域、③県中央部の田川流域、④県南部の思川・巴波川流域、⑤県南西部の渡良瀬川流域などである。その状況は上(毛)野と同様で、複数の勢力圏が分立していたものと考えられる。しかしながら、下(毛)野においては出現期古墳のすべてが前方後方墳である。また渡良瀬川流域のものを除けば、小形古墳であることが特徴であり、その支配領域はかなり狭いものであったと思



第134図 下野および常陸における前方後方墳の分布

結 茂原古墳群をめぐる諸問題

No	古墳名	所在地	墳長(m)	埋葬施設	副葬品	土師器	葺石	文献
1	下侍塚古墳	那須郡湯津上村湯津上	84	粘土塚?	鏡・甲冑片・刀片・矛片	底部穿孔壺	○	1・2
2	上侍塚北古墳	那須郡湯津上村湯津上	48.5	—	—			1・3
3	上侍塚古墳	那須郡湯津上村湯津上	114	粘土塚?	鏡・甲冑片・刀片・矛片		○	1・2
4	駒形大塚古墳	那須郡小川町三輪	64	木炭塚	鏡・剣・刀・斧・鉈・刀子・銅鏃・ガラス小玉	壺・高坏・器台・鉢		4
5	吉田温泉神社古墳	那須郡小川町吉田	50	粘土塚	剣・短冊形鉄斧	壺・甕・器台		5・6
6	那須八幡塚古墳	那須郡小川町吉田	68	両小口粘土塊	鏡・剣・鉈・鉈・間透・けずり小刀・鉄斧・鎌	小形埴・甕	○	3
7	ハツ木浅間山古墳	芳賀郡芳賀町ハツ木	57	—	—			7
8	上根二子塚1号墳	芳賀郡市貝町上根	29	—	—			8
9	上根二子塚3号墳	芳賀郡市貝町上根	42.7	—	—	甕		8
10	星の宮浅間塚古墳	芳賀郡益子町塙	52	—	—			10
11	山崎1号墳	真岡市根本・山崎	33.4	鹿沼土塚	剣・鉈・管玉	小形丸底埴・高坏・壺・甕		11
12	西高橋亀の子塚古墳	芳賀郡芳賀町西高橋	56.3	—	—			9
13	茂原権現山古墳	宇都宮市茂原町	63	—	—			本書
14	茂原大日塚古墳	宇都宮市茂原町	35.8	木棺直葬	鏡	壺・甕・埴・埴器台・高坏		本書
15	茂原愛宕塚古墳	宇都宮市茂原町	50	両小口粘土塊	鏡・刀子・櫛・管玉・ガラス小玉	壺・甕・埴・埴器台・高坏		本書
16	三王山南塚1号墳	河内郡南河内町磯部	46.5	—	—			12
17	三王山南塚2号墳	河内郡南河内町磯部	50	—	—	壺・高坏		12
18	山王寺大塚古墳	下都賀郡藤岡町蛭沼	96	鹿沼土塚	鏡・刀・剣・銅鏃・鉄鏃・斧・鎌・鉈・刀子・管玉・ガラス小玉	底部穿孔壺 台付甕		13
19	藤本観音山古墳	足利市藤本町	116.5	—	—	壺・台付甕	○	14

(前方後方墳の可能性のある古墳)

20	文殊山古墳	下都賀郡石橋町下古山	?	—	鏡・剣・銅鏃・管玉			16
21	北原2号墳	下都賀郡壬生町羽生田	23.2	—	—			17
22	木幡神社古墳	矢板市木幡	52.6	—	—			15
23	根本神社古墳	足利市朝倉町	?	—	—		○	18
24	松持古墳	足利市県町松持山	?	—	—			18

第25表 下野の前方後方墳一覧

われる。この中、①の地域は那珂川を介して常陸と密接なつながりがあり、⑤の地域は③の地域からは遠くはなれ、むしろ渡良瀬川を通じて上(毛)野と密接な地域とみられ、③の地域が下(毛)野の中心地域と考えられる。

ここでは、茂原古墳群が所在する田川流域の様相を中心に、下野における古墳出現期の社会をさぐってみることにしたい。

1 出現期の古墳

この地域の出現期の古墳は、①田川右岸地域の茂原古墳群、②姿川左岸地域の文殊山古墳、③田川下流左岸地域の三王山古墳群の三か所にみることができる。

宇都宮市南部の茂原地区には、田川の形成する沖積低地を望む宝木台地の縁辺に大日塚古墳・愛宕塚古墳・権現山古墳と三基の前方後方墳が集中している。

大日塚古墳は、全長35.8m、後方部高さ4.2m、前方部高さ2.1mと後方部に比して前方部が著

古墳名	全長(m)	主軸方向	後方部 (m)			前方部 (m)			埋葬主体部		
			長さ	幅	高さ	長さ	幅	高さ	壙穴(m)	木棺(m)	主軸方向
愛宕塚古墳	約50	N-2°-E	約29	25	5	20.6	19.8	2.2	8.2 3.1 } × { 8.6 3.8	1.1 7.4 × { 1.3	N-2°-E
大日塚古墳	35.8	N-65°-E	20.3	19.1 } 19.8	4.2	15.5	16.6	2.1	約3.6×2.4		N-65°-E
権現山古墳	(63)	N-2°-W	(34)	(35)	6.5	(29)	20	3.5			

第26表 茂原古墳群・前方後方墳の規模

しく低く、ほぼ西面する。周湟から東海系の土器を、主体部からは青銅製の素文鏡(径2.6cm)一面を確認した。

愛宕塚古墳は、全長約50m、後方部高さ5m、前方部高さ2.2mで、前方部が低く南面する。後方部墳頂下に東西約3.5m、南北約8.5m、深さ1.8mの壙穴があり、その底面に幅約1m、長さ7.4m、深さ約50cmの狭長な木棺の痕跡を確認し、小形倣製鏡(径約7cm)、管玉5、ガラス製小玉2、刀子1、竪櫛1などの副葬品がみられた。また周湟から綾杉文をもつ有段口辺壺形土器など東海系の土器が出土した。

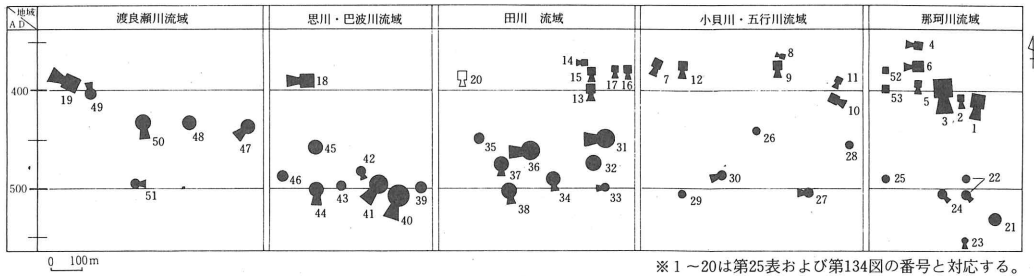
権現山古墳は未発掘であるが全長約63m、後方部高さ約6.5m、前方部高さ約3.5mで南面する。なお、かつて大日塚古墳の前方部に近接した位置にあった小古墳から銅鏃が1本出土している。

発掘した愛宕塚古墳と大日塚古墳を比べると、主軸の方位は異なるが、主軸長はほぼ4:3でそれぞれ晋尺の200尺と150尺に相当し、ともに晋尺で設定されたと推定され、また周湟から東海系の土器を出土することも共通する。ただ濃尾型土器をもつ大日塚に対し愛宕塚の方が、墳丘規模も一段と大きく、埋葬施設や副葬品も整備されており、そこには次第に発展し強化していく首長の姿をみることができる。このような茂原地区の古墳の様相から、4世紀後半から5世紀前半にかけて、三代ないし四代にわたる同一系譜の首長の存在が推定される。

茂原地区の西約2.5kmに石橋町の文殊山古墳がある。姿川の沖積低地を眼下に望む宝木台地の西端に所在したが、開墾によりすでに湮滅して、墳丘の痕跡は全く残っていない。墳形については、双丘があったといわれ、前方後円墳か前方後方墳のいずれかと思われる。埋葬主体も全く不明であるが、三分の一ほど遺存している白銅製の三角縁形式鏡(径推定13.3cm)、有茎柳葉形の銅鏃4、碧玉製管玉3、鉄剣1が現存し、出土遺物から出現期古墳と推定し得る。茂原地区とはきわめて近接しているが同じ地域集団の首長墓ではなく、大日塚以降の茂原の古墳は田川の沖積地を、文殊山古墳は思川の支流姿川流域を背景として成立した別系統の首長墓である。

さらに茂原地区の南約12km、田川下流左岸に南河内町の三王山南塚1号墳、同2号墳がある。鬼怒川と田川にはさまれた岡本台地の南端に位置し、ともに南西面する前方後方墳である。墳丘規模は1号墳が46.5m、2号墳が50mである。この附近からかつて銅鏃20本が出土したと伝えら

結 茂原古墳群をめぐる諸問題



21観音塚古墳、22酢屋古墳群、23下待塚古墳群1号墳、24蛭田富士山古墳群、25谷田1号墳、26芳志戸十三塚古墳、27向北原古墳群8号墳、28新田山古墳群1号墳、29剣塚古墳、30大和田富士山古墳、31笹塚古墳、32鶴舞塚古墳、33八龍塚古墳、34雀宮牛塚古墳、35雷電山古墳、36塚山古墳、37塚山西古墳、38塚山南古墳、39壬生浅間塚古墳、40琵琶塚古墳、41摩利支天塚古墳、42桑57号墳、43宮内2号墳、44茶臼塚古墳、45鶴巻山古墳、46赤麻愛宕塚古墳、47伊勢山古墳、48佐野八幡山古墳、49小曾根浅間山古墳、50勸農車塚古墳、51助戸十二天古墳、52吉田富士山古墳、53観音古墳

第135図 下野における主要古墳の変遷（前期～中期を中心として）

れているが発掘調査をへていないので詳細は不明である。

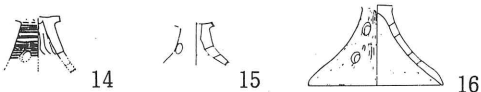
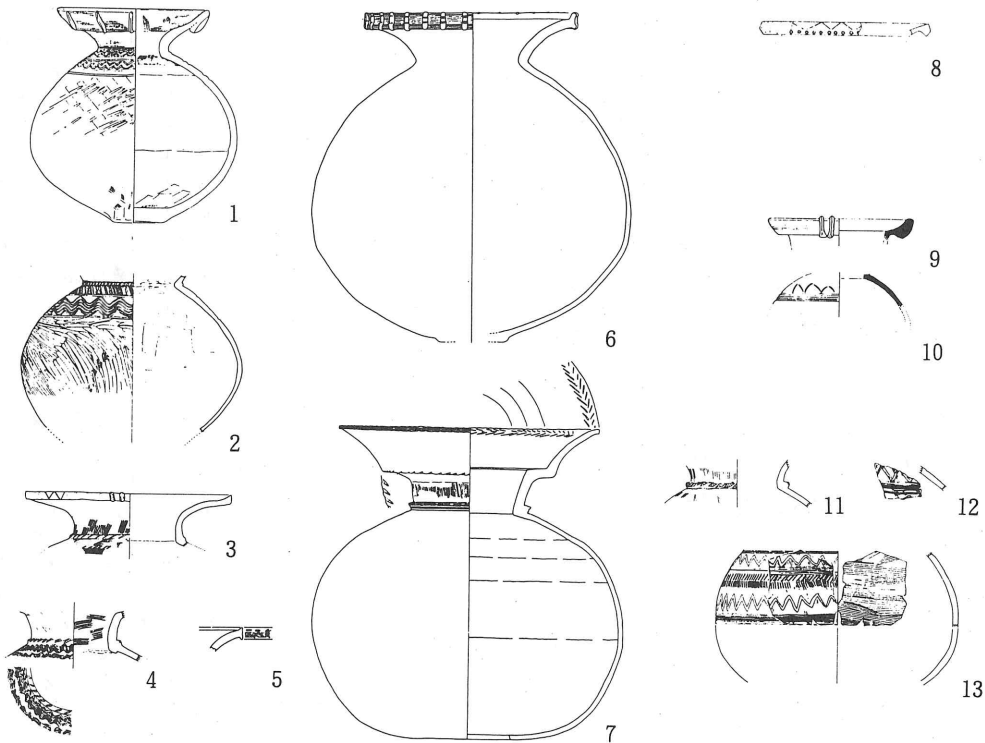
田川・姿川流域における出現期の古墳と推定されるものは、このように三地域に分立する。墳形不明の文殊山古墳を除けばいずれも前方後方墳であることが特徴であるが、那珂川流域や渡良瀬川流域の大形前方後方墳に比べると墳丘規模も50m以下と小さく、副葬品もきわめて貧弱である。副葬鏡の面径は古墳の墳丘規模に対応するとみる説もあるが、この地域でもそれは適合する。またいずれの古墳でも石製模造品や埴輪がともなわないことは、この段階にはまだ専業者集団を支配下にもつことができなかつたことを示している。分立する三地域の出現期古墳の被葬者は、ともに広領域を統合する地域連合の盟主ではなく、墳丘規模・副葬品や分立の状態などからみれば、中小河川の小地域を支配した首長とみることができる。鬼怒川をはさんで対峙する五行川・小貝川流域の前方後方墳の在り方と類似する。しかしこのようなほぼ共通の性格をもつ古墳が三地域に分立するが、それぞれの地域で異なった歴史的経過をたどっていく。茂原地区では、4世紀後半から5世紀前半にかけて首長権が三～四世代にわたり同一系譜で継承され、しだいにその基盤を強化していった過程がうかがわれるのに対し、姿川左岸地区では、茂原地区の古墳よりも豊かな副葬品をもつ(文殊山)古墳のあと、まったく首長墓をみることができなくなる。三王山の場合は二代にわたり前方後方墳がつづいたあと、若干の時間をおいて、北側に全長約76mの前方後円墳・三王山古墳が造営される。このように中小河川流域でも、同一系譜の首長墓が数代にわたる継続型の地区と一代限りで消滅してしまう単独型の地区とがある。そのような現象は他地域でもみられ、那珂川上流域は継続型、渡良瀬川流域は単独型と大河川流域でも異なる様相を示している。

2 古墳出現期の社会

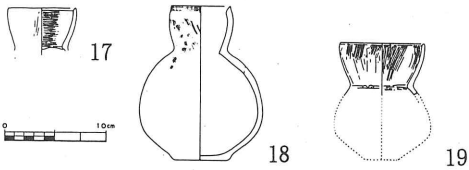
古墳出現期の田川流域には、弥生後期後半の二軒屋式土器を出土する遺跡が多い。住居跡が発見された宇都宮市瑞穂野団地遺跡や国分寺町柴工業団地遺跡のほか、この種の土器が濃密に分布

する遺跡は宇都宮市針ヶ谷町から雀宮町にかけて二軒屋遺跡，天狗原遺跡など多く知られる。これらの遺跡は，この時期の集落を想定し得るし，それが河岸段丘や沖積低地を臨む低い台地の縁辺に営まれたことは，低湿地を利用した湿田経営を反映している。

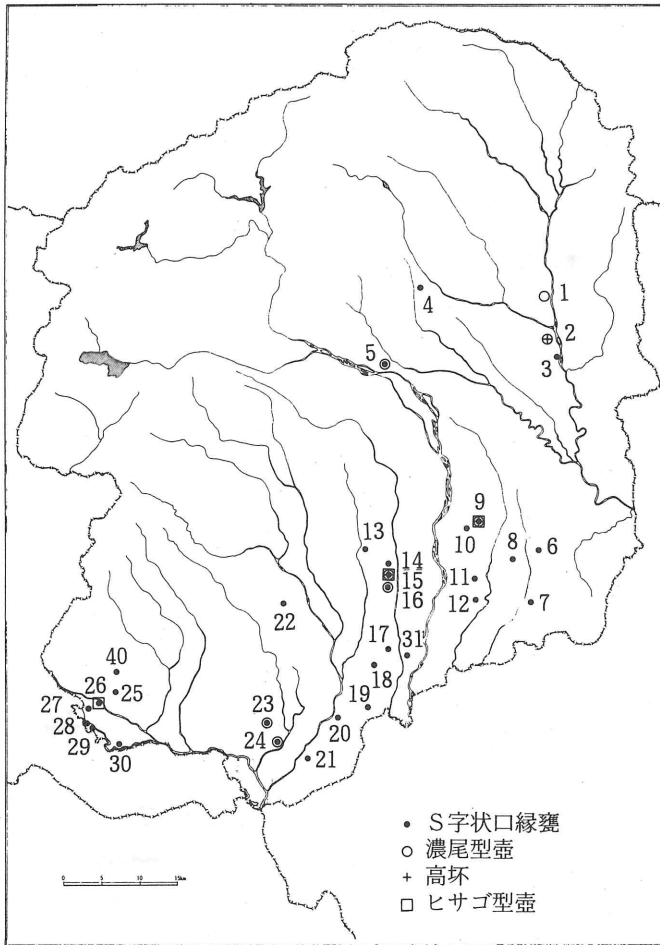
古墳出現期になると，二軒屋式土器の伝統をひく土器は姿を消し，南関東の五領式土器や東海



1：斗光ヶ丘，2・3・4：赤羽根(2：75号住居跡，3：46号住居跡，4：101号住居跡)，5・14・19：谷近台(5：4号住居跡，14：1号住居跡，19：2号住居跡)，6・7：茂原愛宕塚古墳，8・16：那須駒形大塚古墳，9・10：下侍塚古墳トレンチ，11・12・13・15・17：茂原大日塚古墳，18：反過



第136図 下野の東海系土器（濃尾型壺・高坏・ヒサゴ型壺）



第137図 下野の東海系土器分布図

1. 下侍塚古墳トレンチ
2. 那須駒形大塚古墳
3. 谷田1号墳トレンチ
4. 登内遺跡
5. 斗光ヶ丘遺跡
6. 向北原遺跡
7. 車堂遺跡
8. 久保遺跡
9. 谷近台遺跡
10. 中西原遺跡
11. 吹上遺跡
12. 真岡工業高校北遺跡
13. 花の木町遺跡
14. 権現山北遺跡
15. 茂原大日塚古墳
16. 茂原愛宕塚古墳
17. 薬師寺南遺跡
18. 柴工業団地内遺跡
19. 溜ノ台遺跡
20. 神鳥谷遺跡
21. 亀田遺跡
22. 赤石遺跡
23. 赤羽根遺跡
24. 山王寺大樹塚古墳
25. 利保南遺跡
26. 反過遺跡
27. 下八幡遺跡
28. 新宿遺跡
29. 藤本観音山古墳
30. 小曾根浅間山古墳
31. 朝日観音遺跡
40. 西根遺跡

系の土器が、宇都宮市権現山北遺跡、南河内町薬師寺南遺跡、国分寺町烏森遺跡、柴工業団地遺跡など多くの集落遺跡にみられるようになる。集落の立地はほぼ前代と同じであるが、遺跡数の増加が著しく、田川流域の開拓が急速にすすんだことを示している。このような開拓の推進力になったのは、新たに加わった外来系土器に象徴される入植者たちであったと思われる。南関東の弥生式土器から古式土師器への移行が漸移的な変化で一線を画しにくいのに比べると、この地域の変化は断絶的で、すでに記した出現期古墳が東海系土器を伴うのと対応する。このような出現期古墳や集落の特徴は、かなり多くの人間の移動によるものと考えられ、それは畿内政権による東国への浸透活動に東海地方の人々がかかなり重要な役割をになっていたことを示唆している。

3 おわりに

田川流域のこの時期の集落の特徴をよく示すものとして薬師寺南遺跡と烏森遺跡とがある。薬師寺南遺跡では5軒の住居跡が一単位のみとまりをもち、烏森遺跡では6軒が一単位集団を形成

する。このような単位集団は一般に血縁関係の強い個別世帯の集合体(世帯共同体)とみられ、農業経営の基礎単位であったとされる。烏森遺跡では、炉・貯蔵穴・土器など一般的な消費生活に必要な要素を充足させる規模のやや大きな竪穴2軒(A)と、そのうちのいずれかの要素を欠く規模の小さな竪穴4軒(B)に分かれる。(B)は炉のないもので、一般の住居と別な性格のものとも考えられるが、(A)を世帯共同体の家長やその直系世帯、(B)を一般世帯のものとすることもできよう。薬師寺南遺跡でみられる方形周溝墓は、その家長クラスの墳墓と考えられる。

水稻農業が発展して灌漑・排水の水路を造成して新たに乾田経営をすすめる段階になると、多くの世帯共同体の共同労働が必要となり、土地と水利を媒介とした地縁にもとづく集団「農業共同体」が形成されるが、田川流域に最初に出現した小規模な前方後方墳の被葬者は、そのような集団の首長の墳墓であったと考えられる。

(参考文献)

- 1 山越茂 1976「上侍塚古墳・上侍塚北古墳・下侍塚古墳」『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- 2 斉藤忠・大和久震平 1986『那須国造碑・侍塚古墳の研究』吉川弘文館
- 3 三木文雄・村井富雄 1957『那須八幡塚古墳』吉川弘文館
- 4 三木文雄編著 1986『那須駒形大塚』吉川弘文館
- 5 大金宣亮 1974「栃木県那須地方における古墳の分布と展開」『下野古代文化』創刊号
下野古代文化研究会
- 6 大金宣亮 1977「温泉古墳」『栃木県考古学年報』1(昭和50・51年) 栃木県考古学会
- 7 山越茂 1976「浅間山古墳」『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- 8 小森紀男・小森哲也ほか 1986「上根二子塚古墳群墳丘測量調査報告」『峰考古』第6号
宇都宮大学考古学研究会
- 9 山越茂 1976「亀の子塚古墳」『栃木県史』資料編考古一 栃木県
- 10 小森哲也 1987「星の宮浅間塚古墳」『益子町史』益子町
- 11 山ノ井清人 1984「山崎第1号墳」『真岡市史』第1巻考古資料編
- 12 斉藤光利 1990『三王山南塚2号墳発掘調査概報』南河内町教育委員会
- 13 前沢輝政 1977『山王寺大樹塚古墳』早大出版部
- 14 前沢輝政・市橋一郎・大澤伸啓 1986「藤本観音山古墳第2次発掘調査」『昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報』足利市遺跡調査団・足利市教育委員会
- 15 鈴木勝 1981「木幡神社古墳の墳形について」『栃木県考古学会誌』第6集 栃木県考古学会
- 16 山越茂 1979「文殊山古墳」『栃木県史』資料編考古二 栃木県
- 17 山ノ井清人 1987「北原古墳群」『壬生町史』資料編原始古代・中世 壬生町
- 18 前沢輝政 1981「第四章古墳と古墳時代」『近代足利市史』第三巻史料編 足利市

付編 化学的分析

土壌分析について

見城 敏子

古墳のような一種の密閉石室内に遺骸のような有機物(主として蛋白質等)が放置されるとき、種々の微生物の作用によって腐敗が起こる。酸素の補給の少ない密閉古墳内での腐敗生成物は、アミン、アンモニア、二酸化炭素、有機酸などが考えられる。

前2者はアルカリ性であり、後2者は酸性である。こうした腐敗生成物は一部は揮発して古墳内雰囲気構成成分となり、残部は土壌中に吸収されて土壌構成成分となる。

多くの古墳内で二酸化炭素が外気に比して著しく多くなっていることは衆知のことであり¹⁾、また古墳内土壌が古墳の外部の土壌に比べてpHが高く、焼成すると外部の土壌とほぼ同じpHとなることもわかっている(第27表)²⁾。

	pH	
	焼成前	焼成後
古墳内側	7.0	5.0
古墳右隅	7.6	5.0
古墳左隅	7.5	5.0
外側の土	4.5	5.0

このように古墳内部の土壌は揮発性アルカリ成分を吸着していることがわかる。

第27表 虎塚古墳土壌のpH

文献1)『勝田市史 別編1 虎塚古墳』P.161 勝田市史編さん委員会 1978年

2)『勝田市史 別編1 虎塚古墳』P.158 勝田市史編さん委員会 1978年

今回は愛宕塚古墳の土壌のpHを測定した。pHの測定は前回²⁾と同様に行った。すなわち試料10gを25mlの蒸留水中に懸濁し、15~20℃で30分間放置し、軽くかきまぜて、測定容器に入れ、その上澄液中にガラス電極を浸し、30分後にpHを測定した。結果は第28表の通りである。

	埋葬主体部内	埋葬主体部外
A	6.00	ローム地山 4.35
B	7.05	旧表土 4.57
C	7.15 (鏡の付近)	整地層(下) 4.47
D	7.05 (玉の付近)	整地層(上) 4.87
E	5.95 (鉄器の付近)	粘土ブロック 4.30
F	6.44	鹿沼土 4.28
G	6.00	墳丘表土 4.40
H	5.92	
J	6.00 (木棺外)	
K	6.06 (壙穴底面)	

第28表 愛宕塚古墳埋葬主体部内外の土壌のpH

第2表からわかるように、外部の土壌のpHがいずれも4.9以下の酸性であるのに対し、古墳内部のpHは5.9以上であり、特に遺骸の安置場所と思われるB、C、DのpHは7以上と微アルカリ性を呈している。

昨年行った東京都世田谷区の中神明遺跡横穴の調査でも、横穴内の土壌均のpHは6.75以上で対照(5.86)より高く、有機質分解物アルカリ揮発性成分を吸着していると推論した。

今回の調査でも古墳内土壌のpHが外部土壌に比べて高いことがわかり、古墳内土壌がアルカリ性腐敗成分を吸着していることは、ほぼ確実であり、特に遺骸位置付近のpHが高くなっていることは、低揮発性アルカリ成分も直接接触している土壌中へ浸透吸着されたとすればある程度納得されよう。

倣製鏡の化学組成と鉛同位体比

東京国立文化財研究所 馬 淵 久 夫
東京国立文化財研究所 平 尾 良 光

鉛は質量の異なる四種の同位体 ^{209}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床ごとに異なるので、その精密な測定によって原料の産地推定を行なうことができる。^{註1} 筆者は青銅遺物の原料をこの方法で研究しているが、^{註2} 今回、愛宕塚古墳出土の倣製鏡を測定した。

鏡に関する自然科学的所見として重要なものに材質(化学組成)がある。現在の化学では、感度のよい分析法が開発されているので、微量の試料で主成分元素および微量元素を定量することができる。本資料については化学分析用の試料が与えられたので、原子吸光法と放射化分析法を併用して材質調査を行なった。

I 実験法

- 1) 鉛同位体比：本法はほとんど非破壊法と云って差支えない。遺跡出土の青銅鏡に必ず生じている銹を微量(約1mg)採取すればよく、外観を損なうことは全くない。古墳時代以前の青銅鏡は少くとも数パーセントの鉛を含んでおり、銹もそれに近い鉛を含んでいるので、1mg中には数十マイクログラムの鉛がある。今回の試料は化学分析に供した小片の一部で、化学分離によって得られた鉛のうち約1 μg を取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で測定した。
- 2) 化学組成：結果の信頼度を高めるために放射化分析法と原子吸光法を併用した。小片をアセトンで超音波洗浄、希硝酸で超音波洗浄した後、赤外線ランプで乾燥。三等分して1片を放射化分析用に、他の2片を原子吸光分析用に供した。各片は約20mgでありそれぞれを正確に秤量して百分率表示の基とした。

放射化分析は立教大学原子炉研究所 TRIGA II型原子炉を用いて行ない、熱中性子放射化法である。この方法では銅、スズ、ヒ素、アンチモン、金などの金属元素は高感度で同時に測定できるが、鉛は定量できない。

原子吸光法は、狙い定めた元素を一種づつ定量するには適しているが、一つの試料にどのような元素が含まれているかを知るには適していない。本実験では銅、スズ、鉛を定量した。

原子吸光法のように試料を水溶液の形にしなければならない、いわゆる湿式分析法において問題になるのはスズである。スズは特に濃度が高い時酸性溶液中でも沈澱を生じる性質がある。

放射化分析では試料を固定のまま標準試料と比較するので、スズ含有量の測定値は確度が高い。このような意味で2つの方法の併用は意味があると思われる。

II 鉛同位体比測定の結果と考察

資料の鉛同位体比測定結果を第29表に示す。この測定値の意味を理解するためには、筆者らが蓄積している多くの青銅器類のデータと比較しなければならない。詳細は既報の論文に譲るが、^{註3}要点をまとめると次のようになる。

第29表に示したように独立な鉛同位体比は3種類あるが、そのうち $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb} \sim ^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をプロットしてみると、漢代以降に作られた中国製の鏡は第138図のように狭い帯の中に分布する。しかも帯は中間で切れ、右上方の帯には前漢鏡が、左下方に伸びる帯には後漢(中期)以降に作られた鏡がそれぞれ分布する。鉛鉱石や鏡の形式などを総合して判断すると、前者は華北の原料、後者は華中・華南の原料を使って作られたと考えられる。つまり日本に将来した鏡について見る限りでは、漢代に鏡作りに使われた原料は時代とともに北から南へ移行していったということになる。

日本製の青銅器の原料についてもいくつかの点が明らかになっている。

まず、古墳時代までの遺跡(少くとも前期古墳まで)出土のものには日本の鉛は検出されていないことである。その大部分は中国の鉛であり、わずかな比率で朝鮮系の鉛が見られる。

第2に、弥生時代と古墳時代では明らかな差があり、弥生時代の製品(倣製鏡や銅鐸)が図の前漢鏡の帯の中に入るのに対して、古墳時代の倣製鏡は古墳出土の中国鏡と同じ帯の中に入る。つまり中国鏡の時代差と平行な関係が見られる。

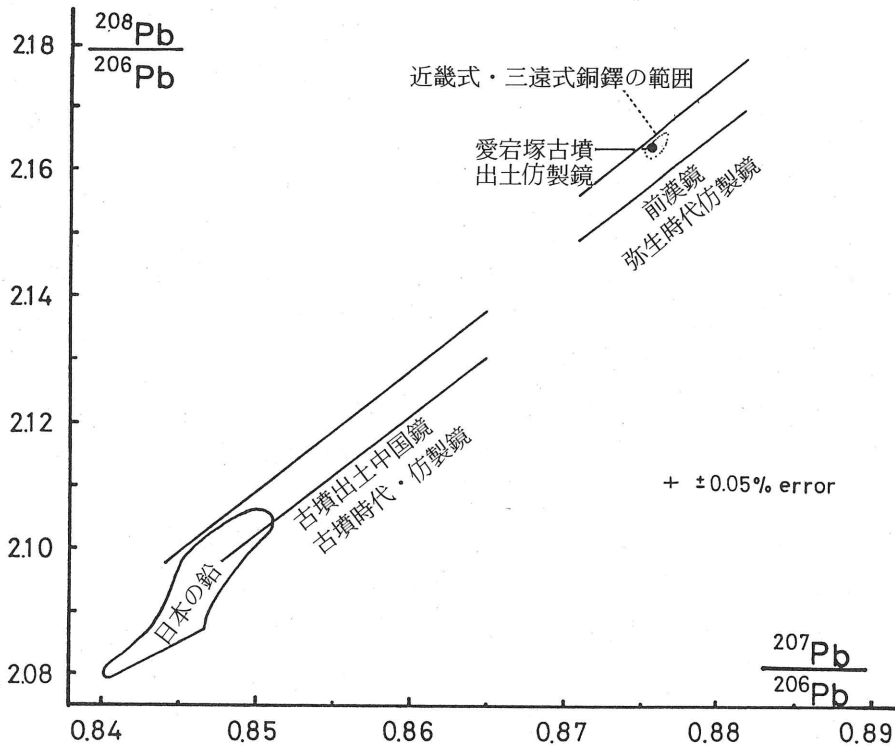
第3に弥生時代の遅い時期の製品は非常に画一的な原料で作られているように見えることである。図の前漢鏡の帯の中に点線の楕円で示した範囲がそれで、近畿式・三遠式銅鐸のすべて(18資料)と弥生式小形倣製鏡の大部分がこの範囲の中に収まる。これは同位体比測定の実際面から云うと驚くべきことで、全く同じ鉛を繰り返し測定したときに機器の誤差によって広がりを見せる程度の範囲である。筆者らは一つの製錬所で作った青銅のインゴットが多量に日本に持ち込まれ、分割されて倣製鏡や銅鐸が作られたと想像している。

近畿式・三遠式銅鐸の化学組成がスズ3~4%、鉛3~4%とほぼ一定なことも、そのような仮定を裏づけると考えている。

さて、今回測定した倣製鏡の鉛同位体比を詳細に検討してみると、図に示したように全く近畿式・三遠式銅鐸と同じ範囲に入ることがわかる。このような値をとる倣製鏡は古墳出土のものとしては初めてである。この古墳は関東で最も古いとのことであるが、弥生時代後期に流通していた材料でできた鏡が古墳から発見されたことになり、注目に値する。

$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
17.740	0.8758	2.1644
± 0.008	± 0.0003	± 0.0005

第29表 鉛同位体比測定結果



第138図 本邦出土の青銅器と愛宕塚古墳出土倣製鏡の鉛同位体比分布

Ⅲ 化学分析の結果と考察

鉛同位体比が近畿式・三遠式銅鐸と類似の値を示すことから興味をもたれるのは化学組成である。前項で述べたように、そのような鉛同位体比を示す銅鐸や弥生式小形倣製鏡の化学組成は、測定されたもので見るとほぼ均一である。

第30表に今回の測定結果をまとめて示す。この結果を見て直ちに気が付くのは、主成分元素の合計が69.2%と異常に小さいことである。

第30表に示したように銅、スズ、鉛は別の小片について複数回測定され、すべて一致した値を示すので、分析の誤りとは考えられない。また神奈川県工業試験所に依頼して試料溶液の一部を発光分光分析法でチェックして頂いたが、第30表の元素以外にパーセントのオーダーで含まれるものはないことが明らかになった。

大正年間から青銅器の化学分析は行なわれてきたが、過去の分析例を眺めると今回のように合

	放射化分析法 (%)	原子吸光法 (%)		平均 (%)
		I	II	
Cu	57	56.6	54.3	56
Sn	3.0	2.6	—	2.8
Pb		9.8	9.5	9.7
As	0.4			0.4
Sb	0.2			0.2
Au	0.1			0.1
合計				69.2

第30表 化学組成測定結果

計が小さい数字になる場合が散見される。^{註4}それは常に試料に錆が甚しい場合である。今回の試料も断面が黒褐色で、金属光沢はなかった。浸食によって金属が酸化物、塩化物、炭酸塩などになり、そのために金属の合計パーセントが小さくなったと思われる。従って、今回の分析値からは化学組成に関しての確実な情報は得られない。

しかし、Sn/Cu比が近畿式・三遠式銅鐸のそれと同程度であることは今後の参考になるであろう。鉛が見かけ上9.7%と大きい値になっているのは、腐食の過程で移動し易いためと考えられる。

終わりに臨み、化学分析でお世話になった青山学院大学工学部木村幹教授と北田真吾氏、発光分光分析を快くお引き受け下さった神奈川県工業試験所の内田弘博士に厚く御礼申上げたい。久保哲三教授には資料の提供と御教示を賜った。記して感謝の意を表するものである。

(註)

- 1 馬淵久夫・富永健編「考古学のための化学10章」東京大学出版会
- 2 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」MUSEUM 第370号, 1982年1月。
- 3 註2の文献のほか次に次のものがある。馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅錆の原料」考古学雑誌第68巻第1号, 1982年6月。
馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法にもる漢式鏡の研究(二)」MUSEUM 第382号, 1983年1月。
馬淵久夫・平尾良光ほか「古代東アジア銅貨の鉛同位体比」考古学と自然化学第15号, 1982。
- 4 山崎一雄「田辺義一著 A study on the Chemical Composition of Ancient Bronze Artifacts Excavated in Japan の概要」考泰学と自然科学第13号, 1980年。